

ISSN 2186 – 3989

働き方改革と文学
— 『蟹工船』を題材として—

松本 和彦

北 陸 大 学 紀 要
第51号(2021年9月)抜刷

働き方改革と文学 — 『蟹工船』を題材として—

北陸大学 経済経営学部 教授 松本 和彦

はじめに

- 第一章 労働者たち
 - 第二章 航海法・工場法
 - 第三章 見せしめ
 - 第四章 殖民地としての北海道と「蝸」
 - 第五章 虐待・虐使と「洗脳」
 - 第六章 駆逐艦
 - 第七章 漁夫の死
 - 第八章 「赤化」と未組織労働者
 - 第九章 闘争への衝迫
 - 第十章 一致団結 —— 反逆と再起
- むすびにかえて

はじめに

みなさん、こんにちは。

「働き方改革と文学」というテーマでの講演依頼でしたので、どの文学作品を選ぶか、かなり迷いました。労働法にかかわる国内外の文学や文学作品を題材とした映画など、私自身が読んだり、観たりして感銘を受けた作品をいろいろと思い返していました。ずいぶんと迷ったあげくに選んだのは、みなさんもご存じかと思いますが、小林多喜二(1903-1933年)の『蟹工船』です。この小説はわが国におけるプロレタリア文学の古典と言える作品です。

まず、物語そのものについて話す前に、『蟹工船』の文学史的位置づけと小林の生い立ちについて簡単に述べておきたいと思います。

『蟹工船』の文学史的位置づけ

20世紀のはじめのわが国における労働にかかわる差別や過酷な生活についての叙述は、すでに『蟹工船』以前の小説にもみられます。たとえば、荒畑寒村『艦底』(大正1年、1912年)が、通称「穴蔵」と呼ばれる地獄のように暑く、空気も悪い船底で一日中艀装工事(船体が完成して進水した船に就航に必要な装備を施すこと)に従事する少年工の悲惨な姿を描きました。プロレタリア文学の代表作としては、小林多喜二『蟹工船』(昭和4年、1929年)の他にもそれ以前に発表された葉山嘉樹『海に生くる人々』(大正15年、1926年)が挙げられます(十川信介『近代日本文学案内』岩波文庫別冊19、2008年、321頁)。

この時期のプロレタリア文学の代表的作品には上記以外にも佐多稲子の「キャラメル工場か

ら」(1928年)、「煙草女工」(1929年)、中野重治なかのしげはるの「春さきの風」(1928年)、「鉄の話」(1930年)、片岡鉄平りょうりむらの「綾里村快拳録」(1930年)、徳永直とくながすなおの「太陽のない街」(1929年)などがあります(『蟹工船 一九二八・三・一五』岩波文庫、2003年、「解説」蔵原惟人、261頁)。

『蟹工船』が執筆される背景について触れておきたいと思います。現存する『蟹工船』のノートによると、この小説は1928年10月28日に筆をおこされ、1929年3月30日に完成しました。その間5カ月を要しています。作者が25歳のときの作品です。

この作品はその年の5月と6月の『戦旗』に分載されました。『戦旗』は全日本無産者芸術連盟(ナップ)による機関雑誌です(同上、「解説」蔵原惟人、262頁)。この小説には『戦旗』に発表された当初から削除や伏字が数多く存在しました。しかも、後半が掲載された6月号は発売禁止になりました。それでも、その年の9月から半年ぐらいの間に戦旗社から三つの単行本が出版されました。

伏字について言えば、『戦旗』初出の時にも、また戦旗社単行本版でも、「卒倒」、「残虐」、「大砲」、「重油」、「軍神」、「天皇陛下」などの言葉は伏せられていました。さらに、雑誌初出では、リンチ場面や露骨な性描写場面に伏字が多く存在しました(『蟹工船』小林多喜二、責任編集 市古貞次(古典編)、小田切進(近代編)、解説「プティブル・インテリゲンツィアの問題」久保田正文、ほるぷ出版、1985年、352頁)。

戦旗社のはじめの二つの版は発売禁止となりました。それにもかかわらず、三つの版の発行部数は総計で35,000部に及んでいます。当時としては記録的な発行部数と言えます。この小説は前年の1928年に出版された『一九二八年三月一五日』以上に世間の注目を引きました。また外国語に翻訳され、海外でも高い評価を受けました。その意味でも『蟹工船』はわが国におけるプロレタリア文学の記念碑的作品です(十川信介『近代日本文学案内』岩波文庫別冊19、2008年、323頁。同上、「解説」蔵原惟人、266頁。『蟹工船・党生活者』小林多喜二、角川文庫、新装改訂初版2008年、「作品解説」手塚英孝、277頁)。

小林の生い立ち

ところで、小林はなぜ労働問題や社会主義やマルクス主義に強い関心を持つようになったのでしょうか。おそらくそれは、小林自身が貧農で生まれ育ったということと無縁ではなかったと思います。虐げられた人々への強い共感が小林を労働運動に突き動かしたのではないかと思います。かれは死の前年である1932年に『コースの変遷』という自伝的随筆の中で高等商業時代の不快な思いを次のように振り返っています。

「家は貧しい農家であった。が、僕は男だし、それに少しばかり学校も出来そうだったので、金持ちの親類で学資を出してくれる事になった。そこはパン工場を経営していたので、僕はその工場を手伝いながら、さんざん恩おんに被せられて、また、使用人たちからは敵視を受けて、実に不快な思いの中に高等商業を卒業した」(同上、「解説」蔵原惟人、250頁)。

小林は1924年に小樽の高等商業学校を卒業しています。現在の小樽商科大学です。かれは明治36年(1903年)10月13日に秋田県北秋田郡下川沿村かわけい(現在の大館市)に生まれました。4歳のときに一家はパン工場を経営していた伯父を頼って小樽に移住します。小樽の場末の労働者街にパンや駄菓子だんごの小店を開きました。小林は小学校を終えてから、伯父の世話でパン工場かで働きながら商業学校での学業に専念したのです(249-250頁)。

かれは貧しい親に仕送りするためにしていたあまりにも単純な労働の辛さについて、当時のことを次のように述懐しています。

「早く卒業して月給をとるようになり、貧乏な親たちを助けたいと思っていた。夏休みには潜水夫にポンプで空気を送り込む作業をやって若干の報酬を得、家へ送ったりしたが、その仕事はあまりに単純で恐らくどんな激しい労働よりも辛かっただろう。それは刑務所の仕事とどこかに似ているように思う」（同上、「解説」蔵原惟人、250頁）。

小林は在学中から文学書に親しみ、友人などと回覧雑誌を発行したり、中央の文学雑誌に投稿したりしていました。また、志賀直哉に傾倒し、文通もしていました。志賀直哉からリアリズムの手法を学びます。このことから小林が10代半ばから文学や小説に強い関心を持っていたことが窺われます。

高等商業学校を卒業後、北海道拓殖銀行小樽支店の為替課に勤務します。1926年9月21日の日記にその当時の自己の矛盾や不徹底について次のように記しています。

「俺が赤貧洗う、といってもまだるっこい生活をしてきながらも、「親類のお蔭で」高商を出た。そのインテリゲンチエラしさが、当然与えるアリストクラティックな気持が、その『赤貧』という俺とごっちゃに住むようになった。俺のあらゆる事件に打ち当たっての、矛盾、不徹底はこの『ごっちゃ』からくるようだ——丁度、あの二重国籍者のような!!」（同上、「解説」蔵原惟人、250-251頁）

小林は高等商業学校を卒業した1924年4月に仲間と共に同人雑誌『クラルテ』を発行しています。北海道拓殖銀行に勤務するかたわら志賀直哉、有島武郎、武者小路実篤などの作品に学びながら文学の修業をします。そしてこの頃から将来、「文豪」になることを真剣に考え始めたようです。かれは1929年に発表された『断片を云う』の中で次のように振り返っています。

「水呑百姓の父、日雇の女土方どかたをした母——そして食うや食わずに育った自分は、十二、三の頃、海軍の青年士官せいじんになることを本気に考えた。そして、十四、五には一躍「鉦山王」になることを空想した。学校までの道は一里半もあったので、途中その計画を色々空想して歩くことを、自分は毎日のたった一つの楽しみにしていた。センチメンタルな十六、七になると、自分は今度は無条件に「文豪」になることを考えた。感傷期と文豪、これは、だが自分ばかりではないだろう。『歌は私の哀しい玩具である。』といった詩人の真似をして、（それよりは少し洗面じゆうめんを作って）『小説は私の一日一訓だ』と考えた。——ブルジョワ社会の無政府状態と水も洩もらさない教化網は、今の若い貧乏人をこんなにも遠廻りとほろさせるのだ。だが、来る処ところには来る、また来させなければならぬ」（同上、251-252頁）。

社会主義、共産主義、マルクス主義への傾倒

小林はこの頃から急速に社会主義、共産主義、マルクス主義に傾倒していくことになります。1927年2月7日の日記に次のように記しています。

「社会主義者として、自分の進路が分っていながら、色々な点で、グズグズしている自分である。マルクスの『資本論』でも読んでみたい気がしている。が、その根本的な処に疑いを持っている自分は、結局、社会主義的情熱を永久に持てぬ人間のように思われる」（同上、「解説」蔵

原惟人、252 頁)。

小林は社会主義やマルクスの『資本論』に強い共感と関心を持ちながらも、この時点ではまだそれらの思想に半信半疑であったようにも思われます。

しかし、「色々な点で、グズグズして」と反省していた小林は1ヶ月も経たないその年の3月2日の日記には次のように記しています。

「マルクスの資本論を読み出している、そのデリケートな科学的頭脳にはホトホト感心してしまった。カール・カウツキーのものや、河上肇、高島素之氏のものなどをそばに置いて、やってみよう、ゲート、ドストエフスキー、ストリンダベルクを知ると同じように、マルクスを知らなければならぬ」(同上、「解説」蔵原惟人、252-253 頁。『蟹工船・党生活者』小林多喜二、角川文庫、新装改版初版 2008 年、「解説 小林多喜二一人と作品」小田切 進、269 頁)。

このように小林は短期間のうちにマルクス主義の古典を集中的に精読したようです。かれは『蟹工船』出版後の 1929 年 11 月『中央公論』に『不在地主』を発表します。これが原因となって北海道拓殖銀行を解雇されました。その経緯は次の通りです。

「蟹工船」発表のころから小林は、全小樽労働組合の再建に協力していましたが、9 月には北海道農村の小作争議を扱った小説『不在地主』を書き、それをその年 11 月の『中央公論』に発表しました。この小説はかれの勤務していた銀行とも取引関係のあった磯野農場の争議を題材にしたものです。それまでに 1929 年のいわゆる四・一六事件でも検束をうけたりしたために注目されていた小林は、この小説が直接の原因となって銀行を解雇されたのです(同上、「解説」蔵原惟人、270 頁)。

日本共産党入党と非合法活動、そして死

その後小林は 1931 年、当時非合法であった日本共産党に入党し、プロレタリア文化連盟の結成、プロレタリア作家同盟の再建のために活動しました。そして、1932 年の 3 月末から 4 月にかけてのプロレタリア文化運動に対する大弾圧を受け、非合法生活に入っていくことを余儀なくされます。

1933 年 2 月 20 日ついに、小林は東京赤坂の福吉町^{ふくよしちょう} 付近で同志と街頭連絡中、党内に潜入していたスパイの密告によって逮捕され、その日の夕刻警視庁特高課員の残虐な拷問の結果、29 歳 4 カ月の生涯を終えました。短い生涯でした(同上、「解説」蔵原惟人、271 頁)。当局はその死因を心臓麻痺と発表し、遺体の解剖も妨害しました。

そして、小林の作品は戦後まで国禁の書となりました。

『一九二八・三・一五』、『蟹工船』、『不在地主』の他にもかれの作品には『党生活者』(1932 年)などがあります。

『蟹工船』執筆の背景

今回取り上げる小説は蟹工船で働く労働者やその過酷な労働をきわめて現実的に描いています。小林はどのようにしてこの小説を書き上げたのでしょうか。

『蟹工船』の執筆までにかれは 1927 年の 3 月以来、北洋漁業の調査資料の蒐集をしていた友人や新聞の報道などによって、かなり綿密な調査を行なっていました。この調査に基づいて帝国主義化におけるこの「国家的」産業にかかわるさまざまな問題を取り扱おうと意図しました。

北洋漁業では同年には汽船 344 隻、帆船 72 隻、47 万トンの漁船が出漁し、約 2 万人の漁業労働者が送り込まれていました。その中で蟹工船は 18 隻、乗り組みの漁夫・雑夫の数は 4000 人を超えていました。北洋漁業の中でも蟹工船は特に労働条件が原始的で、北洋の監獄部屋と呼ばれていました（同上、「解説」蔵原惟人、262 頁。『蟹工船・党生活者』小林多喜二、角川文庫、新装改版初版 2008 年、「作品解説」手塚英孝、275 頁）。

小林が『蟹工船』で語る出来事の多くは、当時実際に起きた事件をモデルにしています。たとえば、1926 年（大正 15 年）に起きた秩父丸事件、博愛丸事件、英航丸事件です。

ですから、この小説の物語は単なるフィクションとしてではなく、ドキュメンタリーとしてもお聞きいただければと思います。

小林が「蟹工船」を物語の題材に選んだのは、それが特殊なひとつの労働形態であり、その他の日本の多くの労働者の現状にも当てはまると考えたからです。文芸評論家の蔵原惟人^{くらばらこれひと}に宛てた手紙の中で次のように述べています。

「この作は「蟹工船」という、特殊な一つの労働形態を取扱っている。が、蟹工船とは、どんなものか、ということを一生ケン命に書いたものではない」（同上、「解説」蔵原惟人、264 頁）。

そして、小林は「蟹工船」を題材に選んだ三つの視点を提示しています。

第一に、「これは殖民地、未開地に於ける搾取の典型的なものであるということ」。第二に、「東京、大阪等の大工業地を除けば、まだまだ日本の労働者の現状に、その類例が 80 パーセントにあるということである」。第三に、「色々な国際的關係、軍事關係、經濟關係が透き通るような鮮明さで見得る便宜があつたからである」（同上、「解説」蔵原惟人、264 頁）。

つまり小林は、第一に殖民地や未開地における搾取の実態、第二に労働者の圧倒的多数が未組織であるという実態、第三に帝国主義戦争における国際的、軍事的、経済的関係、およびそれらの相互関係に焦点を当てて描き出したかったのです。

ですから、これに対応するかのようには小林は『蟹工船』の末尾に「——この一篇は、「殖民地に於ける資本主義侵入史」の一頁である。」と書いたのだと思います(135 頁)。

「搾取」という言葉は後ほど見るように、この作品の中で 1 回だけ出てきます。重要な概念なので手短かに説明しておきたいと思います。

労働者は資本家に対し労働力を提供し、その対価として資本家は労働者の仕事量に見合う労賃を支払うというのが労働力と賃金の「等価交換」です。しかし、実際の社会では労賃以上の価値が生まれるように労働者を働かせる体制になっています。その時に生じた価値である「剰余価値」、つまり「儲け」はすべて資本家のものになります。これが「搾取」です。

ですので、この物語は単に「蟹工船」の物語としてではなく、当時のわが国の労働者の現状を一般的・普遍的なものとして描いたものであると考えていただければと思います。物語が進むにつれてわかるかと思いますが、先取りして言えば、炭坑、国道開拓、鉄道敷設、築港などでも同様に過酷な労働や「搾取」の実態がありました。

『蟹工船』の基本構図

『蟹工船』の基本的な構図は葉山嘉樹（1894-1945 年）の『海に生きる人々』と似ています。しかし、『海に生きる人々』には労働運動の経験者や K. マルクスの『資本論』を読む人物が水夫の中にいて、ストライキを指導して行くことになります（『海に生きる人々』岩波文庫、1950

年、「解説」蔵原惟人、275-292 頁。『海に生きる人々』新日本文庫、1975 年、「解説」祖父江昭二、267-282 頁）。

それに対して、『蟹工船』はその主題において『海に生きる人々』の影響を受けていることは、小林自らが認めているように明らかです。しかし、もともと金が目的で、無法を承知で雇われた食いつめ者が、栄養失調死も無視する監督の、あまりの暴虐に怒って仲間意識を持ち、監督を使用している資本家などもみな一体なのだと自覚を高める点で、『海に生きる人々』より認識が深く、かつ包括的だと言えます（十川信介『近代日本文学案内』岩波文庫別冊 19、2008 年、322-323 頁。同上、「解説」蔵原惟人、268-269 頁）。

『蟹工船』はオホーツク海で蟹漁とその加工を行う下層労働者たちの「地獄」のような労働実態を再現したものです。何事も「帝国」、「国家」のためと口癖に言う漁業監督の極悪非道ぶりや、あまりに粗末な食事や不衛生な環境に労働者たちは堪えかねます。

蟹工船は日露戦争（1904-1905 年）で使われていたもので、20 年間も繋ぎっ放しになっていた病院船や運送船です。その中には日露戦争で戦利品として没収された船もありました。たとえば、ロシアの病院船として使用されていた「カザン号」は「笠戸丸」、「バイカル号」は「秩父丸」として使用されました（『30 分で読める...大学生のためのマンガ蟹工船』原作・小林多喜二、作画・藤生ゴオ、解説・島村輝、企画・編集白樺文学館多喜二ライブラリー、東銀座出版社、2006 年、「マンガ蟹工船」解説、「蟹工船」を解体するキーワード —映画・暴力・汚穢と聖性— 島村輝、167 頁）。

そのような状況で労働者たちはどのような結末を迎えるのでしょうか。

結末を話してしまうと、つまらないかと思います。ですから、ここでは言及しません。しかし、その結末に至る具体的な経過がより重要だと思います。ですので、どのような結末になるのかを想像しながら、それに至る過程を聞いていただければと思います。私にとってその過程と結末は必然的だと思われま

本講演の視点

前置きが長くなりました。今から『蟹工船』の物語について具体的に話をしたいと思います。

この作品は 1 から 10 まで番号が付されており、最後に附記が付けられている中編小説です。数種類の文庫版が出版されていますが、文庫版で約 130 頁の分量です。話をするうえでの都合上、1 から 10 までの番号を章として取り扱います。そして、私なりに各章のエピソードを再構成してできるだけ忠実にお伝えしたいと思います。各章の表題は原典にはなく、それぞれの章の内容がわかりやすくなるように私が便宜上付けたものです。

みなさんの感性に訴えられるように重要だと思われる登場人物の「せりふ」やそれが発せられる状況も多数引用します。「せりふ」の中には、方言で話をしている言葉が多数見られ、また現在ではあまり用いられない言葉もあり、わかりづらいかと思います。わかりづらい言葉や表現には手短かに説明を加えておきたいと思います。

引用する原典は岩波文庫版『蟹工船 一九二八・三・一五』を使用します。初版は 1951 年に発行され、2003 年に改版が発行されました。私が使用するのは改版です。「本文中、差別的ととられかねない表現がみられるが、作品の歴史性を鑑み、原文通りとした」と編集付記に書かれているように、現在からみれば不適切と思われる表現があるかと思います。しかし、著者自身に差別的意図はなく、また作品自体の文学性および芸術性を尊重して原典に忠実に話をしたいと思

います。あらかじめご了承くださいと思います。

みなさんは登場する労働者になったつもりで、その気持ちや情景、また労働現場の状況を頭の中に思い描きながら聞いてほしいと思います。私も可能な限り登場人物になったつもりで、感情を込めて「せりふ」を発したいと思います。ただし、労働者の「せりふ」の中には誰が発言したのか特定できないものもあります。

また、小林は独特の比喩表現を多数使用しています。それらは誇張された比喩のように思われますが、私たちの感性に強く訴えかけてきます。それらの比喩表現にも注目して聞いていただければと思います。

「法と文学」というのが共通のテーマであり、また「作品の背景を法の観点から読み解く」というのがその趣旨かと思えます。ですが、作品の物語そのものが私の話の中心になるかと思えます。むしろ「文学と法」というテーマのほうが適切かもしれません。しかし、私は文学研究者でもありませんし、まして小林多喜二研究者でもありませんので、その作品を専門的に論じることはできません。ですから、私なりの読み方、解釈にならざるをえません。

また、「働き方改革と文学」というのが表題です。「働き方改革」という言葉で思い浮かぶのは「働き方改革関連法」だと思います。これは2019年4月1日から段階的に施行されています。労働基準法など8つの法律が改正されました。残業時間の上限や年休の一部義務化、高度プロフェッショナル制度の導入など多様で柔軟な働き方に対応できるようにするためです。

しかし、残念ながら現在でも資本主義の下で長時間労働やそれに起因する過労死や過労自殺がなくならないという問題があります。

私の主専攻は本来、法哲学・法思想史です。「作品の背景を法の観点から読み解く」のであれば、労働法の観点から働き方改革について具体的に触れるべきかもしれません。しかし、いずれかと言えば哲学的・思想史的視点からの話になるかと思えます。つまり、法哲学的主題としては正義、公正、平等、人間の尊厳などが問題となっています。これについても、あらかじめご了承くださいと思います。

それでは第一章から順次話をしたいと思います。

第一章 労働者たち

第一章では漁夫、雑夫の背景、未組織労働者を集めた会社の意図、主要な登場人物、蟹工船事業の使命と漁業監督の恫喝が主に描かれています。

漁夫は海へ出てタラバ蟹漁をする労働者で、雑夫はその蟹を缶詰にする労働者です。タラバ蟹を大量に水揚げしたとしても陸の工場に運ぶ間に鮮度が落ちてしまうため、船内に加工場を作って長期保存ができるように缶詰にしていました。また、彼らが置かれているこれからの過酷な労働が暗示されています。1920年代、昭和のはじめが時代背景です。

労働者たちの背景

小説の冒頭はとても印象的で衝撃的なせりふではじまります。

「おい地獄さ行くんだで！」(『蟹工船 一九二八・三・一五』岩波文庫、7頁。以下同じ)

身体中酒の臭いが漂う漁夫のひとりが蟹工船のデッキの手すりに寄りかかって、函館の街を見ながら話しかけます。今から函館を出航するのです。しかも、「俺らもう一文も無え。——糞。こら。」と言っていることからわかるようにお金がなくて生活に困窮しています。「地獄」とい

う言葉が最初に出てくる場面です。「地獄」とはいったいどのようなところなのでしょう。この物語では「地獄」という言葉が4回出てきます。それは物語の進行とともに、具体的にわかるかと思います。

蟹工船博光丸にはどのような人々が労働者として乗船していたのでしょうか。多少重複するかと思いますが、8グループに分類することができるかと思います。彼らは人間的権利を剥奪され、会社の利潤と帝国の「国策」のために言語に絶して虐使されることとなります（『蟹工船・党生活者』新潮文庫、1953年、「解説」蔵原惟人、276頁）。

原典を引用しながら彼らの具体的な背景を見ることにします。それによってここに来るまでの彼らの悲惨な状況やその風貌と振舞いによって、彼らがどのように生きてきたのかが理解できるかと思います。また、なぜ彼らが蟹工船に乗らざるをえなかったのかもわかるかと思います。

第一に挙げられるグループは、14、5歳の少年、函館の貧民窟の子供たちです。

雑夫ざつぷのいるハッチを上から覗きこむと、薄暗い船底の棚に、巢から顔だけピョコピョコ出す鳥のように騒ぎ廻っているのが見えた。皆十四、五の少年ばかりだった。

「お前は何処だ。」

「××町。」みんな同じだった。函館の貧民窟の子供ばかりだった。そういうのは、それだけで一かたまりをなしていた。（8-9頁）

ここで「棚」と表現されているのは漁夫や雑夫が寝起きしている寢床のことです。

子供たちを見送りに来ている母親もいました。しかし、誰も見送ってくれる者がいない内地から来た子供たちもいます。こういう子供たちは寂しそうに見えます。また、中には身体がひ弱な子供もいます。母親はそのことをとても心配していますが、家族のために働かざるをえないのです。以下の場面は、日雇い労働者の母親の深い愛情が感じ取られる場面です。

薄暗い隅すみの方で、裈ももひきを着、股引おんなでづらをはいた、風呂敷を三角にかぶった女 出りんご面らしい母親が、林檎の皮をむいて、棚に腹ん這いになっている子供に食わしてやっていた。子供の食うのを見ながら、自分では剥いたぐるぐるの輪になった皮を食っている。何かしゃべったり、子供のそばの小さい風呂敷包を何度も解いたり、直してやっていた。そういうのが七、八人もいた。誰も送って来てくれるものがない内地から来た子供たちは、時々そっちの方をぬすみ見るように、見ていた。

髪や身体がセメントの粉まみれになっている女が、キャラメルの箱から二粒ぐらいずつ、その附近の子供たちに分けてやりながら、

「うちの健吉と仲よく働いてやってけれよ、な。」といていた。木の根のように不恰好に大きいザラザラした手だった。

子供に鼻をかんでやっているのや、手拭てぬぐいで顔をふいてやっているのや、ボンボン何かいっているのや、あった。

「お前さんどこの子供は、身体はええべものな。」

母親同志だった。

「ん、まあ。」

「俺おらどこのア、とても弱いんだ。どうすべかって思うんだども、何んしろ……。」

「それア何処でも、ね。」（9-11頁）

「女出面」というのは女性の日雇い労働者のことです。母親も一生懸命に働いているのですが、それでも生活ができない窮状が読み取れます。

第二に挙げられるグループは、北秋田の百姓たちです。上の引用に続いて次のように描写されています。

「あっちの棚は？」

「南部。」

「それは？」

「秋田。」

それらは各々棚をちがえていた。

「秋田の何処だ。」

濃うみのような鼻をたらし、眼のふちがあかべをしたようにただれているのが、

「北秋田だんし。」といった。

「百姓か？」

「そんだし。」(9頁)

先に話したように、小林多喜二は1903年10月13日に秋田県北秋田郡下川沿村かわぞいに生まれました。小林は1931年に書いた自筆の「年譜」の中で、「父は自作兼小作農で、母は日雇の娘だった。農閑期には二人で近所に建っている土工のトロッコ押しに出掛けたりしたそう。切り立った崖鼻の鋭いカーヴをブレーキを締めながら疾走したときの事を、母は時々ぼくに話す」と語っています(同上、「解説」蔵原惟人、249頁)。ですから、小林も北秋田の百姓たちの貧しい状況をよくわかっていたはずで

第三に、周旋屋にだまされ、引張り廻されて文無しになった者たちがいます。ひとりの若い漁夫の嘆きがそれを物語っています。

そこから少し離れた棚に、宿酔ふつかよいの青ぶくれにムクンだ顔をした、頭の前だけを長くした若い漁夫が、

「俺おらもう今度こそア船さ来ねえって思ってたんだけどもな。」と大声でいっていた。「周旋屋に引っ張り廻されて、文無しになってよ。——また、長なげえことくたばるめに合わされるんだ。」

(12-13頁)

この若い漁夫の言葉からわかるように、長期間、過酷な労働を強いられることを承知のうえで舞い戻って来る労働者もいます。

第四に、夕張炭坑の坑夫がいます。この坑夫は、炭坑が爆発したときに、爆発が他へ及ばないように監督や工夫が坑道に壁を作って、助けることもできた炭坑夫を見殺しにしてしまったことにとっても怒りを感じています。

監督や工夫が爆発が他へ及ばないように、坑道に壁を作っていた。彼はその時壁の後から、助ければ助けることの出来る炭坑夫の一度聞いたら心に縫い込まれでもするように、決して忘れることのできない、救いを求める声を「ハッキリ」聞いた。——彼は急に立ち上がると、気が狂ったように、

「駄目だ、駄目だ！」と皆の中に飛びこんで、叫び出した。(俺は前の時は、自分でその壁を作ったことがあった。そのときは何でもなかったのだが。)

「馬鹿野郎！ここさ火でも移ってみろ、大損だ。」(14頁)

そして、この坑夫自身も同様にガス爆発で死にかけた経験が何度もありました。さすがに今度は、その恐怖に耐えられず蟹工船に來たのです。

「今日は。」と、横の男に頭を下げた。顔が何かで染ったように、油じみて黒かった。

「仲間さ入れて貰えます。」

後で分ったことだが、この男は、船へ来るすぐ前まで夕張炭坑に七年も坑夫をしていた。それがこの前のガス爆発で、危く死に損ねてから——前に何度かあった事だが——ファイと坑夫が恐ろしくなり炭山を下りてしまった。〔中略〕

その事を聞いていた若い漁夫は、

「さあ、ここだってそう大して変らないが……。」といった。

彼は坑夫独特な、まばゆいような、黄色ッぽく艶のない眼差を漁夫の上じっと置いて、黙っていた。(13-15頁)

「さあ、ここだってそう大して変らないが……。」と若い漁夫が言った意味が、物語が進むにつれてわかると思います。

第五に、秋田、青森、岩手から追払われて來た、あるいは「ハネ飛ばされて」來た「百姓の漁夫」たちが挙げられます。

秋田、青森、岩手から來た「百姓の漁夫」のうちでは、大きく安坐をかいて、両手をはすかいに股に差しこんでムシッとしているのや、膝を抱えこんで柱によりかかりながら、無心に皆が酒を飲んでいるのや、勝手にしゃべり合っているのに聞き入っているのがある。——朝暗いうちから畑に出て、それで食えないで、追払われてくる者たちだった。長男一人を残して——それでもまだ食えなかった——女は工場の女工に、次男も三男も何処かへ出て働かなければならない。鍋で豆をいるように、余った人間はドシドシ土地からハネ飛ばされて、市に流れ出てきた。彼らはみんな「金を残して」内地に帰ることを考えている。しかし働いてきて、一度陸を踏む、するとモチを踏みつけた小鳥のように、函館やおたるでバタバタやる。そうすれば、まるッきり簡単に「生れた時」とちっとも変らない赤裸になっておっぼり出された。内地へ帰れなくなる。彼らは、身寄りのない雪の北海道で「越年」するために、自分の体を手鼻ぐらいの値で「売らなければならない。」——彼らはそれを何度繰り返しても、出来の悪い子供のように、次の年にはまた平気で(?)同じことをやってのけた。(15頁)

彼らは安い労賃で働いて故郷にお金を持ち帰るつもりが、そのお金をすぐに使い果たしてしまい、繰り返し蟹工船に戻って來るのです。

百姓の漁夫たちの中には兵隊に行つて來た者も多数いました。

飯が終ると、寝るまでのちょっとした間、ストーヴを囲んだ。——駆逐艦のことから、兵隊の話が出た。漁夫には秋田、青森、岩手の百姓が多かった。それで兵隊のことになると、訳が分らず、夢中になつた。兵隊に行つてきたものが多かつた。彼らは、今では、その当時の残虐に充ちた兵

隊の生活をかえって懐しいものに、色々思い出していた。(91 頁)

「彼らは、今では、その当時の残虐に充ちた兵隊の生活をかえって懐しいものに、色々思い出していた。」とは一体どういう意味なのでしょう。物語が進むにつれてわかるかと思います。

第六に、「季節労働者」として働く職工もいます。

その男は冬の間はゴム会社の職工だった。春になり仕事が無くなると、カムサツカへ^{でかせ}出稼ぎに出た。どっちの仕事も「季節労働」なので、(北海道の仕事は殆んどそれだった。)イザ夜業となるとブツ続けに続けられた。「もう三年も生きれたら有難い。」といていた。粗製ゴムのような死んだ色の膚をしていた。(17 頁)

第七に、周旋屋にだまされた 17、8 人の東京の学生上りもいます。

周旋屋にだまされて、連れて来られた東京の学生上りは、こんな筈^{はず}がなかった、とブツブツいつていた。

「独り寝だなんて、ウマイ事いいやがって！」

「ちげえねえ、独り寝さ。ゴロ寝だもの。」

学生は十七、八人来ていた。六十円を前借りすることに決めて、汽車賃、宿料、毛布、布団、それに周旋料を取られて、結局船へ来たときには、一人七、八円の借金(!)になっていた。それが始めて分ったとき、貨幣だと思っ^か握っていたのが、枯葉であったより、もっと彼らはキョトンとしてしまった。——始め、彼らは青鬼、赤鬼の中に取り巻^{もうじや}かれた亡者のように、漁夫の中にかたまりに固まっていた。(35 頁)

周旋料というのは雇い主と求職者を仲立ちする周旋屋に支払う料金のことです。

最後に挙げられるのは、自分の土地を「他人」に追い立てられた者たち、つまり「移民百姓」です。このような者たちは多くいました。彼らも百姓の漁夫と同様にお金を故郷に持ち帰るつもりが、結局「小作人」にされてしまいました。

それから「入地百姓」——北海道には「移民百姓」がいる。「北海道開拓」「人口食糧問題解決、移民奨励」、日本少年式な「移民成金」などウマイ事ばかり並べた活動写真を使って、田畑を奪われそうになっている内地の貧農^{せんじゆう}を煽動して、移民を奨励して置きながら、四、五寸も掘り返せば、下が粘土ばかりの土地に放り出される。〔中略〕

稀^まれに餓死から逃れ得ても、その荒^あげ地を十年もかかって耕やし、ようやくこれで普通の畑になったと思える頃、実はそれにちアんと、「外の人」のものになるようになっていた。〔中略〕

——百姓は、あっちからも、こっちからも自分のものを噛みとられて行った。そして終いには、彼らが内地でそうされたと同じように「小作人」にされてしまっていた。そうなって百姓は始めて気付いた。

——「失敗^しった！」

彼らは少しでも金^{かね}を作^{つく}って、故里^{ふるさと}の村に帰ろう、そう思って、津軽海峡を渡って、雪の深い北海道へやってきたのだった。——蟹工船にはそういう、自分の土地を「他人」に追い立てられて来たものが沢山いた。(67-68 頁)

このように同じ出身地や背景の者たちは棚でかたまりになっていたのです。そして、蟹工船

に乗船している労働者がいかに貧しく、また内地でも北海道でもひどい目に合わされていたかわかるかと思います。

それでは、漁夫たちは今までどのような仕事を具体的にしてきたのでしょうか。漁夫たちがみんな酒を飲んでいるとき、ひとりの漁夫が「飛んでもねえ所さ、しかし来たもんだな、俺も…。」と発言します。

その事から——そのキツかけで、お互の今までしてきた色々のことが、ひょいひょい話に出てきた。「国道開たく工事」「灌漑工事^{かんがい}」「鉄道敷設」「築港埋立^{うめたて}」「新鉱発掘」「開墾」「積取人夫」「鯨取り^{にしん}」——殆ど、そのどれかを皆はしてきていた。(63頁)

ところで、このような漁夫や雑夫など労働者は何人くらい集められたのでしょうか。物語が進むにつれて明らかになりますが、あらかじめ人数を言うと約300人います。

冒頭で「もともと金が目的で、無法を承知で雇われた」と言いましたが、お金を稼ぐために命を賭けて働かざるをえなかった者も多かったのです。彼らのほとんどはいろいろな仕事を渡り歩いてきた出稼ぎ労働者であると言えるかと思います。

しかしそれにしても、「おい地獄さ行ぐんだで！」と第一章の冒頭で語られていますが、彼らはその「地獄」にどこまで耐えることができるのでしょうか。短い期間ならまだしも、約4~5ヶ月という長期間、陸から孤立した場所で過酷な労働をしなければなりません。それは酷使を超えて虐待というべきものです。しかも、物語が進行するにつれてわかるかと思いますが、長時間労働で休日もなかったようです。海の上では基本的に逃げたくても逃げることができないのです。ただし、まったく逃げるができなかったわけではありません。それについてはあとで話したいと思います。

四人輪になって飲んでいたのに、まだ飲み足りなかった一人が割り込んで行った。

「……んだべよ。四カ月も海の上だ。もう、これんかやれねべと思つて……。」

頑丈な身体をしたのが、そういつて、厚い下唇を時々癖のように嘗めながら眼を細めた。(11頁)

未組織労働者を集めた会社の意図

では、なぜこのようなさまざまな背景をもつ人々を会社は集めたのでしょうか。その理由が次のように説明されています。

漁夫の仲間には、北海道の奥地の開墾地や鉄道敷設の土工部屋へ「蛸^{たこ}」に売られたことのあるものや、各地の食いつめた「渡り者」や、酒だけ飲めば何もかもなく、ただそれでいいものなどがいた。青森辺の善良な村長さんに選ばれてきた「何も知らない」「木の根ッこのように」正直な百姓もその中に交っている。

——そして、こういうてんてんばらばらのものらを集めることが、雇うものにとって、この上なく都合のいいことだった。(函館の労働組合は蟹工船、カムサツカ行の漁夫のなかに組織者を入れることに死物狂いになっていた。青森、秋田の組合などとも連絡をとって。——それを何より恐れていた。)(17-18頁)

ここで「蛸」と表現されているのは、第四章で具体的に描写されていますが、自分が生きていくために、自分の手足をも食ってしまう労働者を意味しています。それについては第四章で詳しく

く話したいと思います。

上の引用からもわかるかと思いますが、労働者から労働組合の組合員を排除するために会社は意図的に彼らを集めたのです。このような人々を集めた理由は、お互いに背景が異なり、関係性が希薄な未組織の労働者が会社にとって都合がよかったからです。つまり、彼らは一致団結して反抗することができないと思われたからです。会社は労働組合の組合員が未組織労働者を組織することを最も恐れていました。このことは漁夫の言葉からも窺い知ることができます。

「飛んでもねえ所さ、しかし来たもんだな、俺も……。」その漁夫は芝浦の工場にいたことがあった。その話がそれから出た。それは北海道の労働者たちには「工場」だとは想像もつかない「立派な処」に思われた。「この百に一つぐらいのことがあったって、あっちじゃストライキだよ。」といった。(63頁)

また、内地と殖民地としての北海道との対比から、北海道という土地は労働組合に関する情報が遮断されており、資本家にとって都合がよかったということを読み取ることができます。

内地では、何時までも、黙って「殺されていない」労働者が一かたまりに固まって、資本家へ反抗している。しかし「殖民地」の労働者は、そういう事情から完全に「遮断」されていた。(69頁)

他方、青森や秋田の組合などと連絡を取りながら「函館の労働組合は蟹工船、カムサツカ行の漁夫のなかに組織者を入れることに死物狂いになっていた。」と記されているように、労働組合も組織化に必死になっていたことが窺われます。

『蟹工船』の主要な登場人物

この小説には具体的な人の名前がほとんど示されておらず、浅川、健吉、宮口、須田、山田などが名前が挙げられているだけです。最初に登場するのは、先に話しましたが、健吉です。髪や身体がセメントの粉まみれになっている母親が子供たちに向かって、「うちの健吉と仲よく働いてやってくれよ、な。」と言っていました。それ以降、彼は登場することはありません。

しかし、吃り、威張んな、芝浦、炭山、学生上りとあだ名で呼ばれる者が若干います。この物語には、あえて言えばあだ名で呼ばれている彼らが牽引役になりますが、個人としての「主人公」が存在しないと言えます。むしろ、労働の「集団」、つまり「労働者たち」が「主人公」となっています。おそらくそうしたの、小林の意図だったと思います。小林は『蟹工船』完成の翌日、蔵原惟人に宛てた手紙の中でこの作品における自分の意図を次のように述べています。

「この作には「主人公」というものがいない。「銘々伝式」の主人公、人物もない。労働の「集団」が、主人公になっている。その意味で、「一九二八・三・一五」よりも一歩前進していると思っている。〔中略〕

とにかく、「集団」を描くことは、プロレタリア文学の開拓しなければならない道であると思っています。〔中略〕

この作では「一九二八・三・一五」などで試みたような、各個人の性格、心理が全然なくなっている。

細々しい個人の性格、心理の描写が、プロレタリア文学からはだんだん無くなりかけている。このことは、プロ文学が集団の文学であることから、そうならなければならないと思っている。

しかし、そのためによくある片輪な、それから退屈さを出さないために、考へたはずである。」
(同上、「解説」蔵原惟人、262-263頁)

確かに、個人の私生活や心理を詳しく描写するそれまでの日本文学の創作方法に対するアンティテーゼとして、小林のこの創作方法は意義があると思います。しかし、個人が集団の中に埋没してしまい、個々の労働者の具体的な階層的・個人的容貌が必ずしも明確には示されていないという欠陥があるように思われます(『蟹工船・党生活者』新潮文庫、1953年、「解説」蔵原惟人、277頁。『蟹工船・党生活者』小林多喜二、角川文庫、新装改訂初版2008年、「解説 小林多喜二一人と作品」小田切 進、264頁)。

彼らがどのような人物であったのかは後ほど順次話したいと思います。ただし、物語の中で人物像として明確に描かれていない者については言及しません。

蟹工船事業の使命と浅川の恫喝

物語の出だしから特に印象深い人物は浅川という漁業監督です。蟹工船事業は国際上の一大問題であるとして、かれは次のように労働者に向かって檄を飛ばします。

「ちょっと置いて置く。」監督が土方の棒頭のように頑丈な身体で、片足を寝床の仕切りの上にかけて、楊子で口をモグモグさせながら、時々歯にはさまったものを、トツトツと飛ばして、口を切った。

「分ってるものもあるだろうが、いうまでもなくこの蟹工船の事業は、ただ単にだ、一会社の儲け仕事と見るべきではなくて、国際上の一大問題なのだ。我々が——我々日本帝国人民が偉いか、露助が偉いか。一騎打ちの戦いなんだ。それにもし、もしもだ、そんな事は絶対にあるべきはずはないが、負けるようなことがあったら、鞆丸をブラ下げた日本男児は腹でも切って、カムサツカの海の中にプチ落ちることだ。身体が小さくたって、野呂間な露助に負けてたまるもんじやない。」(19頁)

上に引用した浅川の話す態度や言葉遣いから、かれがいかに粗暴かつ下品で、また横柄であるかが窺えます。浅川という男は蟹工船の監督の中でも際立って評判が悪い監督です。すぐあとに話しますが、漁夫たちが食事をしているときに、浅川が入ってきます。そのときの漁夫たちのやり取りから、それが読み取れます。

「浅川ッたら蟹工の浅か、浅の蟹工かってな。」

「天皇陛下は雲の上にいるから、俺たちにヤどうでもいいんだけど、浅ってなれば、どっこいそうは行かないからな。」(26頁)

浅川の話からも分かるように、国際上の一大問題と言っていますが、この事業は具体的にはロシアとの一騎打ちの戦いです。北洋一帯は漁業権をめぐるロシアとの間で複雑な利害対立関係があり、国際的にも問題となっていました(『蟹工船・党生活者』小林多喜二、角川文庫、新装改訂初版2008年、「作品解説」手塚英孝、275頁)。ですから、函館港に停泊している博光丸のすぐ手前には日本の「蟹工船」に対するロシアの監視船もいます。

先の引用のあとすぐに、浅川は労働者を見下して次のような警告を付け加えます。

「それに、我カムサツカの漁業は蟹缶詰ばかりでなく、鮭、鱒と共に、国際的にいってだ、他

の国とは比べもならない優秀な地位を保って居り、また日本国内の行き詰った人口問題、食糧問題に対して重大な使命を持っているのだ。こんな事をしゃべったって、お前らには分りはしないだろうが、ともかくだ、日本帝国の大きな使命のために、俺たちは命を的に、北海の荒波をつツ切って行くのだということを知って貰わにゃならない。だからこそ、あっちへ行っても始終我帝国の軍艦が我々を守っていてくれることになっているのだ……それを今流行の露助の真似をして、飛んでもないことをケシかけるものがあるとしたら、それこそ、取りも直さず日本帝国を売るものだ。こんな事は無いはずだが、よく覚えておいて貰うことにする……。」

監督は酔いざめのくさめを何度もした。(19-20 頁)

博光丸が向かう先はカムサツカ沖です。そこはタラバ蟹の豊富な漁場です。「今流行の露助の真似をして」と浅川が言っていますが、それは 20 世紀のはじめにロシアで起こった一連の社会主義革命で、特に 1917 年の世界最初のロシア革命のことを意味しています。この浅川の言葉から想起されるのは『共産党宣言』の冒頭の有名な文章です。

ヨーロッパに幽霊が出る——共産主義という幽霊である。ふるいヨーロッパのすべての強国は、この幽霊を退治しようとして神聖な同盟を結んでいる、法皇とツァー、メッテルニヒとギゾー、フランス急進派とドイツ官憲。(『共産党宣言』マルクス・エンゲルス、1848 年、邦訳岩波文庫改版、大内兵衛・向坂逸郎訳、2007 年、39 頁)

浅川は共産主義というこの幽霊をととも警戒していると同時に、漁夫たちが団結して革命を企てるはずがないと高を括っていることが読み取れます。

先取りして具体的に言えば、浅川は労働時間など守らず、いかなる手段を使ってでも強制的に過重労働をさせるという意図です。浅川は漁夫たちに次のように言います。

「それを一日の働きが十時間だから十三時間だからって、それでピッタリやめられたら、飛んでもないことになるんだ。——仕事の性質が異うんだ。いいか、その代り蟹が採れない時は、お前たちを勿体ないほどブラブラさせておくんだ。」監督は「糞壺」へ降りてきて、そんなことをいった。「露助はな、魚が何んぼ眼の前で群化てきても、時間が来れば一分も違わずに、仕事をブン投げてしまうんだ。んだから——んな心掛けだから露西亞の国がああなったんだ、日本男児の断じて真似てならないことだ！」(77 頁)

浅川のこの話から当時流行していたロシアの共産主義に対する会社、資本家、日本帝国の強い警戒心が窺えます。ここでは伏線のようにも思われますが、「始終我帝国の軍艦が我々を守っていてくれることになっている」という浅川の言葉はどういう意味なのでしょう。気に留めておいてほしいと思います。最後の章で大きな意味を持つこととなります。

また、浅川は事あるごとに「日本男児」という言葉を口にすると描かれています。おそらく「日本男児」と言えば、労働者たちが過酷な労働にも耐えるべきだと納得すると思っていたのかもしれませんが。実際に物語の中で口にするのは、「日本男児は腹でも切って」と「日本男児の断じて真似てならないことだ！」の 2 回だけです。

言葉の説明をしておきたいと思います。聞き慣れない言葉かと思いますが、「群化」とは「群来」のことで、産卵のために沿岸へ押し寄せる魚群を意味します。特に北海道沿岸へ来遊するニシン

の産卵群を意味しています。北海道南部や東北地方で使われる方言です。

第二章 航海法・工場法

第二章ではカムサツカまでの航行、「糞壺」、食事、雑夫宮口の行方不明、蟹工船秩父丸の救助信号受信、航海法・工場法についての話が出てきます。

カムサツカまでの航行

博光丸は函館から出航し、祝津の灯台、留萌、稚内、宗谷海峡、オホーツク海、そして最終目的地であるカムサツカの海へと進んでいきます。

祝津の灯台が、回転するたびにキラッキラッと光るのが、ずうと遠い右手に、一面灰色の海のような海霧の中から見えた。それが他方へ廻転してゆくとき、何か神秘的に、長く、遠く白銀色の光芒を何裡もサッと引いた。

留萌の沖あたりから、細い、ジュークジュークした雨が降り出してきた。漁夫や雑夫は蟹の鉢のようにかじかんだ手を時々はすかいに懐の中につこんだり、口のあたりを両手で円く囲んで、ハアーと息をかけたたりして働かなければならなかった。——納豆の糸のような雨がしきりなしに、それと同じ色の不透明な海に降った。が、稚内に近くなるに従って、雨が粒々になって来、広い海の面が旗でもなびくように、うねりが出て来て、そしてまたそれが細かくせわしなくなった。——風がマストに当たると不吉に鳴った。鉾がゆるみでもするように、ギイギイと船の何処かが、しきりなしにきしんだ。宗谷海峡に入った時は、三千噸に近いこの船が、しゃっくりにでも取りつかれたようにギク、シャクし出した。何か素晴らしい力でグイと持ち上げられる。船が一瞬間宙に浮かぶ。——が、ぐうと元の位置に沈む。エレヴェーターで下りる瞬間の、小便がもれそうになる、くすぐったい不快さをその度を感じた。雑夫は黄色になえて、船酔らしく眼だけとんがらせて、ゲエ、ゲエしていた。〔中略〕

オホーツク海へ出ると、海の色がハッキリもっと灰色がかって来た。着物の上からゾクゾクと寒さが刺し込んできて、雑夫は皆唇をブシ色にして仕事をした。寒くなればなるほど、塩のように乾いた、細かい雪がビュウ、ビュウ吹きつものってきた。それは硝子の細かいカケラのように甲板に這いつくばって働いている雑夫や漁夫の顔や手に突きささった。波が一波甲板を洗って行った後は、すぐ凍えて、デラデラに滑った。皆はデッキからデッキへロープを張り、それに各自がおしめのようにブラ下り、作業をしなければならなかった。——監督は鮭殺しの棍棒をもって、大声で怒鳴り散らした。(21-23 頁)

カムサツカに向かうに従って、海がますます荒れ、風も強くなり、しかも凍えるような寒さに立って仕事をしていられない様子がわかるかと思います。それにもかかわらず、浅川は棍棒を持って容赦なく労働を強制しています。ブシ色というのは打撲などにより皮下に内出血したときに見られる青いあざの色で濃い青紫色のことです。それほど寒かったのです。

蟹工船には川崎船を八隻のせていた。船員も漁夫もそれを何千匹の籠のように、白い歯をむいてくる波にもぎ取られないように、縛りつけるために、自分らの命を「安々」と賭けなければならなかった。——「貴様らの一人、二人が何んだ。川崎一艘取られてみろ、たまったもんでないんだ。」——監督は日本語でハッキリそういった。(23-24 頁)

川崎船とは本船から出て蟹を網で取る小型船のことで、博光丸には八隻のせていました。

浅川のこの言葉からもわかるように、かれにとっては船員や漁夫の命は川崎船に比べれば取るに足りないものなのです。鱻とはサメ類のことを意味します。

漁夫たちの不衛生な部屋

ところで、過酷な労働の後、彼らはどのようなところで生活していたのでしょうか。漁夫が寝起きする部屋である「糞壺」について次のように描写されています。

空気がムシとして、何か果物でも腐ったすっぱい臭気がしていた。漬物を何十樽も蔵^{たる}てある室^{しま}がすぐ隣だったので、「糞」のような臭いも交っていた。(9頁)

この文章でわかるかと思いますが、彼らの部屋は「糞」のような臭気が充満しているのです。また、「糞壺」は異臭が立ち込める豚小屋そっくりであると比喩で表現されています。

薄暗い中で、漁夫は豚のようにゴロゴロしていた。それに豚小屋そっくりの、胸がすぐゲエと来^{にお}そうな臭いがしていた。

「臭せえ。臭せえ。」

「そよ、俺だちだもの。ええ加減、こつたら腐りかけた臭いでもすべよ。」

赤い臼^{うす}のような頭をした漁夫が、一升瓶^{びん}そのまま、酒を端^{ふち}のかけた茶碗に注いで、鰯^{ずるめ}をムシヤムシヤやりながら飲んでた。その横に仰向けにひっくり返って、林檎を食いながら、表紙のボロボロした講談雑誌を見ているのがいた。(11頁)

このやり取りから読み取れるように、部屋だけでなく漁夫自身も臭かったと思います。話が進むにつれてわかるかと思いますが、それは彼らにはどうしようもないことでした。「便所臭い、漬物樽^{たる}の積まざっている物置」の隣だったのでムツとする臭気が漂っていたのです(56頁)。つまり、「糞」のような臭いも交じっており、「便所臭」だったので「糞壺」と呼ばれていたのです。

漁夫の「穴」に、涙^{なみだ}なすのような豆電球がついた。煙草の煙や人いきれで、空気が濁って、臭く、穴全体がそのまま「糞壺」だった。区切られた寝床にゴロゴロしている人間が、蛆虫^{うじむし}のようにうごめいて見えた。[中略] 通路には、林檎やバナナの皮、グジョグジョした高丈^{たかじょう}、鞋^{わらじ}、飯粒のこびりついている薄皮などが捨ててあった。流れの止った泥溝^{どぶ}だった。(18頁)

また、掃除もされておらずきわめて不衛生でした。漁夫たちのことを「豚のようにゴロゴロしていた」とか「蛆虫^{うじむし}のようにうごめいて見えた」と記されていますが、それほどまでに狭くて窮屈な部屋だったことが窺われます。高丈^{たかじょう}というのは東北、北海道方言で地下足袋のことです。

仕事が終わると、皆は「糞壺」の中へ順々に入り込んできた。手や足は大根のように冷えて、感覚なく身体についていた。皆は蚕^{かいこ}のように、各々の棚の中に入ってしまうと、誰も一口も口をきくものがいなかった。ゴロリと横になって、鉄の支柱につかまった。[中略] 誰も、何も考えていなかった。漠然とした不安な自覚が、皆を不機嫌にだまらせていた。(24頁)

過酷な労働が終わって、唯一くつろげる生活空間はこのように不衛生きわまるものでした。過労と寒さで話をする気力もなく、掃除をする気さえ起きなかったのではないのでしょうか。

「糞壺」のストーブはブスブス^{くすぶ} 燻^{くすぶ}ってばかりいた。鮭や鱒と間違われて、「冷蔵庫」へ投げ込

まれたように、その中で「生きている」人間はガタガタ顛えていた。ズックで覆ったハッチの上をザア、ザアと波が大股に乗り越して行った。それが、その度に太鼓の内部みたいな「糞壺」の鉄壁に、物凄い反響を起した。時々漁夫の寝ているすぐ横が、グイと男の強い肩でつかれたように、ドシンとくる。——今では、船は、断末魔の鯨が、荒狂う波濤の間に身体をのたうっている、そのままだった。(25頁)

この文章からもわかるかと思いますが、先ほども言いましたように漁夫たちが寝起きしている寝床も狭く不衛生で、しかもこの部屋にはストーヴはあるものの、暖房が十分に効いておらず、とても寒く、また荒狂う波濤が原因で生じる轟音と揺れの衝撃で、おちおち眠ることさえできないのも当然です。

漁夫たちの粗末な食事

毎日の過酷な長時間労働、また「糞壺」での生活において労働者にとっての楽しみのひとつは何と言っても食事ではないかと思えます。楽しみと言うよりも食事をとることにむしる彼らは執念を抱いてさえいました。休息もさることながら十分に栄養を摂らなければ、このような労働に耐えられるはずがありません。

「飯だ！」^{まかない} 賄 がドアーから身体の上半分をつき出して、口で両手を囲んで叫んだ。「時化てるから汁なし。」

「何んだって？」

「腐れ塩引！」^{しおひき} 顔をひっこめた。

思い、思い身体を起した。飯を食うことには、皆は囚人のような執念さを持っていた。

ガツガツだった。

塩引の皿を安坐を^{あぐら}かいた股の間に置いて、湯気をふきながら、バラバラした熱い飯を頬べると、舌の上でせわしく、あちこちへやった。「初めて」熱いものを鼻先にもってきたために、水漬^{みずばな}がしきりなしに下がって、ひょいと飯の中に落ちそうになった。

飯を食っていると、監督が入ってきた。

「いけホイドして、ガツガツまくらうな。仕事もろくに出来ない日に、飯は^{たらふく}鱈腹食われてたまるもんか。」

ジロジロ棚の上下を見ながら、左肩だけを前の方へ揺って出て行った。

「一体^{いっ}あいつにあんなことをいう権利があるのか。」——船酔と過労で、ゲツソリやせた学生上りがブツブツいった。(25・26頁)

ここで棚と表現されているのは、先ほども言いましたように、漁夫たちが寝起きしている寝床のことです。上記の文章から読み取れるように、彼らにはきわめて粗末な食事しか与えられていませんでした。しかも、お腹いっぱい食べられなかったように思われます。「腐れ塩引き」というのは、防腐のために塩漬けにした魚さえ腐るほどとんでもないという意味です。「いけホイドして」というのは、行き倒れの乞食のようにガツガツ食べることを意味しています。彼らが病気や栄養失調になるのも無理のないことです。この物語の中で「権利」という言葉はこの場面で1回だけ出てきます。食事をめぐって発せられる言葉ですが、印象的な言葉です。

雑夫宮口の行方不明と蟹工船秩父丸の救助信号受信

このような過酷な労働環境と劣悪な生活状態には誰であっても耐えられないのは当然です。こうした状況の中で突然、雑夫宮口が行方不明になってしまいます。雑夫というのは雑役夫のことで、主として 12 歳から 20 歳までの少年労働者です。第一章の冒頭で話しましたが、彼らは蟹を缶詰にする労働者です。主要な業務以外にも種々雑多な仕事をさせられていました。

——次の朝になって、雑夫の一人が行衛不明になったことが知れた。

皆は前の日の「無茶な仕事」を思い、「あれじゃ、波に浚われたんだ。」と思った。イヤな気持ちでした。しかし雑夫たちは未明から追い廻わされたので、そのことではお互に話すことが出来なかった。

「こつたら冷ッこい水さ、誰が好き好んで飛び込むって！隠れてやがるんだ。見付けたら、畜生、タタきのめしてやるから！」

監督は棍棒を玩具のようにグルグル廻しながら、船の中を探して歩いた。(27-28 頁)

一体、宮口に何が起きたのでしょうか。その件は第三章で話したいと思います。気に留めておいてください。

蟹工船は博光丸だけでなく、多くの船が出航しています。突然、秩父丸からの S・O・S を受信します。秩父丸にはたくさんの乗組員がいます。前に話しましたが、この秩父丸事件は 1926 年（大正 15 年）に実際に起きた遭難事件です。

——今朝の二時頃だった。ポート・デッキの上まで波が躍り上って、間を置いて、バジャバジャ、ザアッとそれが滝のように流れていた。夜の闇の中で、波が歯をムキ出すのが時々青白く光ってみえた。時化のために皆寝ずにいた。その時だった。

船長室に無電係が周章^{あわ}ててかけ込んできた。

「船長、大変です。S・O・S です！」

「S・O・S？ ——何船だ？」

「秩父丸^{ちちぶまる}です。本船と並んで進んでいました。」

「ボロ船だ、それア！」——浅川が雨合羽を着たまま、隅の方の椅子^{いす}に大きく股を開いて、腰をかけていた。片方の靴の先だけを、小馬鹿にしたように、カタカタ動かしながら、笑った。「もつとも、どの船だって、ボロ船だがな。」(28-29 頁)

冒頭でも話しましたが、「蟹工船」は日露戦争で使われていたもので、20 年間も繋ぎっ放しになっていた病院船や運送船です。蟹工船は操業当時からかなり沈没していました。船長などは沈没する危険性を覚悟のうえで出航していたのではないかと思います。それほどボロ船なのです。

二十年間の間も繋ぎっ放しになって、沈没させることしかどうにもならないヨロヨロな「梅毒患者」のような船が、恥かしげもなく、上べだけの濃化粧^{こいげしやう}をほどこされて、函館へ廻ってきた。日露戦争で「名誉にも」ピッコにされ、魚のハラワタのように放って置かれた病院船や運送船が、幽霊よりも影のうすい姿を現わした。——少し蒸気を強くすると、パイプが破れて、吹いた。露国の監視船に追われて、スピードをかけると、(そんな時は何度もあった。)船のどの部分もメリメリ鳴って、今にもその一つ、一つがバラバラにほぐれそうだった。中風患者^{ちゆうふう}のように身体をふるわした。(33 頁)

しかし、蟹工船は操業当時に比べればそれなりに改良されたようです。操業は1920年頃から始められていました。カムサツカ海域の大量出漁は1923年(大正12年)からであるとされています(『30分で読める...大学生のためのマンガ蟹工船』原作・小林多喜二、作画・藤生ゴオ、解説・島村輝、企画・編集白樺文学館多喜二ライブラリー、東銀座出版社、2006年、166頁)。

「——この蟹工船だって、今はこれで良くなったそうだよ。天候や潮流の変化の観測が出来なかったり、地理が実際にマスターされていなかったりした創業当時は、幾ら船が沈没したりしたか分らなかったそうだ。」(59頁)

ところで、博光丸は秩父丸の乗組員を救助するのでしょうか。

「一刻といえないようです。」

「うん、それア大変だ。」

船長は、舵機室に上るために、急いで、身仕度もせずにドアを開けようとした。しかし、まだ開けないうちだった。いきなり、浅川が船長の右肩をつかんだ。

「余計な寄道せって、誰が命令したんだ。」

誰が命令した? 「船長」ではないか。——が、突嗟のことで、船長は棒杭より、もっとキョトンとした。しかし、すぐ彼は自分の立場を取り戻した。

「船長としてだ。」

「船長としてだア——ア?」船長の前に立ちほだかった監督が、尻上りの侮辱した調子で抑えつけた。「おい、一体これア誰の船だんだ。会社が傭船してるんだで、金を払って。ものをいえるのア会社代表の須田さんとこの俺だ。お前なんぞ、船長といつてりゃ大きな顔してるが、糞場の紙ぐれえの価値もねえんだど。分ってるか。——あんなものにかかわってみろ。一週間もフィになるんだ。冗談じゃない。一日でも遅れてみろ! それに秩父丸には勿体ないほどの保険がつけてあるんだ。ボロ船だ、沈んだらかえって得するんだ。」〔中略〕

「人情味なんか柄でもなく持ち出して、国と国との大相撲がとれるか!」唇を思い切りゆがめて唾をはいた。(28-30頁)

S・O・Sを出している船を救助するのは当然のことと思います。しかし、浅川にとっては他船およびその乗組員の命などどうでもいいのです。かれにとっては蟹の漁獲量を上げること、つまりお金がすべてなのです。ここではじめて「須田」という名前が出てきます。かれは会社代表です。本来ならば船長の命令に従わなければならないのですが、須田と浅川の命令に船長でさえも従わざるをえないのです。

しかし、浅川は自分が都合悪くなると船長の立場を利用して船長に責任を押しつける卑怯な人間でもあります。それが顕著に見て取れるのは次の事件です。蟹の漁獲量を増やすためにロシア領海内に侵入するように船長を強要します。しかし、船長が頑としてそれを断ります。

前にあったことだった——領海内に入って漁をするために、船を入れるように船長が強要された。船長は船長としての公の立場から、それを犯すことは出来ないと頑張った。

「勝手にしやがれ!」「頼まないや!」といって、監督らが自分たちで、船を領海内に転錨(てんびよう)さしてしまっただ。ところが、それが露国の監視船に見付けられて、追跡された。そして訊問になり、

自分がしどろもどろになると、「卑怯」にも退却してしまった。「そういう一切のことは、船としては勿論船長がお答えすべきですから……。」無理矢理に押しつけてしまった。全く、この看板は、だから必要だった。それだけでよかった。(112 頁)

それで船長は船を函館に帰そうと何度も考えますが、結局そうすることができませんでした。その時の浅川の侮辱的態度が次のように描写されています。

そのことがあってから、船長は船を函館に帰そうと何遍も思った。が、それをそうさせない力が——資本家の力が、やっぱり船長をつかんでいた。

「この船全体が会社のもなんだ、分ったか！」ウアハハハハハと、口を三角にゆがめて、背のびするように、無遠慮に大きく笑った。(112-113 頁)

船長でさえ会社、つまり資本家には抵抗できなかったのです。

他方で、船長は浅川に対してどのような感情を抱いていたのでしょうか。

——船長は、監督が何時でも自分の目の前で、マヤマヤ邪魔をしているようで、たまらなく不快だった。漁夫たちがワッと事を起して、こいつをカムサツカの海へたたき落すようなことでもないかな、そんな事を考えていた。(58 頁)

船長は浅川をきわめて不快に思っており、自分ではできないけれども漁夫たちが蜂起して浅川を海へたたき落としてほしいと内心では願っていました。

それでは、秩父丸は最終的にどうなったのでしょうか。

係は身体をひねって、廻転椅子をぐるりとまわした。

「沈没です！……。」

頭から受信器を外しながら、そして低い声でいった。「乗組員四百二十五人。最後なり。救助される見込なし。S・O・S、S・O・S、これが二、三度続いて、それで切れてしまいました。」

それを聞くと、船長は頭とカラアの間に手をつっこんで、息苦しうに頭をゆすって、頸をのばすようにした。[中略]——その船長は見えていなかった。(31-32 頁)

この話を聞いた学生上りは、「ウム、そうか！」と言って、博光丸も沈没するのではないかと強い不安に駆られます。

「本当に沈没したかな。」^{ひとりごと}独言が出る。気になって仕方がなかった。——同じように、ボロ船に乗っている自分たちのことが頭にくる。(32 頁)

この強い不安感を漁夫たちを含め、すべての労働者が共有していたと思います。

航海法・工場法の不適用

浅川が秩父丸を救助しようとしなかった理由は他にもあります。お気づきかと思いますが、蟹工船の「工船」は「航船」ではないのです。つまり、航海法が適用されません。でも当然ですが、適用されないからと言って見捨てていいものではありません。

小林が「蟹工船」執筆にあたって直接の素材とした事件が起きたのは、1926(大正 15)年のことでした。この年の4月26日、蟹工船「秩父丸」は北千島海域で暴風雨のため座礁し、乗組員

254 人中 161 人もの犠牲者を出しました。このとき、「秩父丸」と前後して出漁していた「英航丸」その他の蟹工船は、「秩父丸」からの救助信号を受信していたにもかかわらず、救助の手を差し伸べませんでした。

この事件は、『小樽新聞』などのジャーナリズムにとりあげられ、厳しく非難されることになります(『30 分で読める...大学生のためのマンガ蟹工船』原作・小林多喜二、作画・藤生ゴオ、解説・島村輝、企画・編集白樺文学館多喜二ライブラリー、東銀座出版社、2006 年、167 頁)。

——蟹工船はどれもボロ船だった。労働者が北オホツクの海で死ぬことなどは、丸ビルにいる重役には、どうでもいい事だった。資本主義がきまりきった所だけの利潤では行き詰まり、金利が下がって金がダブついてくると、「文字通り」どんな事でもするし、どんな所へでも、死物狂いで血路を求め出してくる。そこへもってきて、船一艘でマンマと何十万円が手に入る蟹工船、——彼らの夢中になるのは無理がない。

蟹工船は「工船」(工場船)であって、「航船」ではない。だから航海法は適用されなかった。(32-33 頁)

それでは「工船」は「工場」なのですから、工場法が適用されたのでしょうか。しかし、これもまた適用されていませんでした。

——それに、蟹工船は純然たる「工場」だった。しかし工場法の適用もうけていない。それでこれぐらい都合のいい、勝手に出来るところはなかった。(33 頁)

ここで少し工場法について説明しておきたいと思います。

工場法(法 46)は 1911 年(明治 44 年)に成立しました。工場労働者保護に必要な諸種の義務を事業主に課す法律です。当初は常時 15 人以上の職工を使用する工場(1923 年(大正 12 年)には「常時 10 人以上」に改正)および事業の性質が危険な工場または衛生上有害のおそれがある工場を適用対象とし、次の 2 つの事項を定めていました。

第一に、女子・年少者(「保護職工」)の就業制限であり、最低入職年齢の設定、最長労働時間の法定、深夜業の禁止、一定の休日・休憩の義務化、危険有害業務の就業制限などです。

第二に、職工一般に対する保護として、工場の安全・衛生のための行政官庁の臨検・命令権、業務上の傷病・死亡についての本人または遺族に対する扶助の制度、職工の雇入れ・解雇・周旋に関する取締りを規定していました。工場法は労働基準法の制定により 1947 年(昭和 22 年)に廃止されました(『労働法第九版』菅野和夫、弘文堂、2010 年、4-5 頁)。

工場法の適用をうけないことを利用して、丸ビルにいる重役はこの仕事を表向きは「日本帝国のため」と結びつけて暴利を貪っていたのです。

利口な重役はこの仕事を「日本帝国のため」と結びつけてしまった。嘘のような金が、そしてゴツソリ重役の懐^{ふところ}に入ってくる。彼はしかしそれをモット確実なものにするために、「代議士」に出馬することを、自動車をドライブしながら考えている。——が、恐らく、それとカッキリ一分も違わない同じ時に、秩父丸の労働者が、何千哩^{マイル}も離れた北の暗い海で、割れた硝子層^{くず}のように鋭い波と風に向かって死の戦いを戦っているのだ！(33-34 頁)

この文章から読み取れるように、資本家と政治家との癒着関係、および資本家の労働者に対す

る搾取関係が浮き彫りされています。

第三章 見せしめ

第三章では病気、薬、雑夫の監禁、強制労働、川崎船の行方不明、ロシア人家族による遭難した漁夫たちの救助の話が出てきます。

船医と薬

先ほども話しましたが、このような過酷な労働と劣悪な生活をしていれば病気になるのも当たり前です。この船にはもちろん船医も乗っています。

函館を出帆してから、四日目ころから、毎日のボロボロな飯と何時も同じ汗^{しろ}のために、学生は皆身体の工合を悪くしてしまいました。寝床に入ってから、膝を立てて、お互に脛^{すね}を指で押していた。何度も繰り返して、その度に引こんだとか、引こまないとか、彼らの気持は瞬間明るくなったり、暗くなったりした。脛をなでてみると、弱い電気に触れるように、しびれるのが二、三人出てきた。棚の端から両足をブラ下げて、膝頭^{てがたな}を手刀で打って、足が飛び上るか、どうかを試した。それに悪いことには、「通じ」が四日も五日も無くなっていた。学生の一人が医者に通じ薬^{もら}を貰いに行った。帰ってきた学生は、興奮から青い顔をしていた。——「そんなぜいたくな薬なんて無いとよ。」

「んだべ。船医なんてんなものよ。」側^{そば}で聞いていた古い漁夫がいった。

「何処^{どこ}の医者も同じだよ。俺のいたところの会社の医者もんだった。」坑山の漁夫だった。

(35-36 頁)

出向してまだ4日目頃であるにもかかわらず、脚気の症状を訴える漁夫たちが出てきます。脚気とはビタミンB1の欠乏により起こる病気で、倦怠感、手足のしびれ、むくみなどから末梢神経の麻痺や心臓衰弱を引き起こします。重症化すると心不全を起こして死に至ることもあります。1920年代当時、脚気による死亡が多数発生していました。彼らが極度の栄養失調状態であったことがわかるかと思います。このように病気になった者に対して適切な治療も薬の処方もされていませんでした。

「見せしめ」としての監禁と強制労働

ところで、第二章で「気に留めておいてください」と話しました。行方不明になった雑夫宮口はどうなったのでしょうか。

行衛^{ゆくえ}の分からなかった雑夫が、二日前にボイラーの側から出てきた所をつかまえた。二日隠れていたけれども、腹が減って、腹が減って、どうにも出来ず、出て来たのだった。捕^{つか}んだのは中年過ぎの漁夫だった。若い漁夫がその漁夫をなぐりつけるといって、怒った。

「うるさい奴だ。煙草のみでもないのに、煙草の味が分かるか。」バットを二個手に入れた漁夫はうまそうに飲んでた。(36-37 頁)

宮口は二日間隠れていたもののあまりの空腹に耐えかねて、出てきたところを捕まえます。ところでこの漁夫は、なぜバット2個を手に入れることができたのでしょうか。バットとは当時、一般的なタバコの銘柄で、正式には「ゴールデン・バット」と呼ばれていました。

「糞壺」の梯子を下りると、すぐ突き当りに、誤字^{たくさん}沢山で、

雑夫、宮口を発見せるものには、バット
二つ、手拭一本を、賞与としてくれるべし。

浅川監督

と、書いた紙が、糊代りに使った飯粒のボコボコを見せて、貼らさ^はってあった。(34頁)

この中年過ぎの漁夫は「賞品」欲しさのために仲間を売ったのです。浅川は「こつたら冷ッ^{しや}こい水さ、誰が好き好んで飛び込むって！隠れてやがるんだ。見付けたら、畜生、タタきのめしてやるから！」と激怒していましたが、捕まった雑夫宮口はどのような仕打ちを受けることになるのでしょうか。

この物語の後半で「俺たちは力を合わせることだ。俺たちは何があろうと、仲間を裏切らないことだ。力を合わせることだ。落伍者を一人も出さないということだ。一人の裏切者、一人の寝がえり者を出さないということだ。」とある漁夫が言いますが、強い連帯感、仲間意識がなければこのような裏切り者が出ることになります。そして、このような内発的・内部的分裂を上手く利用して、また外発的・策略的に内部分裂を誘発して資本家や会社は労働者を団結させないようにするものです。現在でもこのような会社はないとは言えないではないでしょうか。

雑夫は監督にシャツ一枚にされると、二つあるうちの一つの方の便所に押し込まれて、表から錠を下ろされた。初め、皆は便所へ行くのを嫌った。隣りで泣きわめく声が、とても聞いていられなかった。二日目にはその声がかすれて、ヒエ、ヒエしていた。そして、そのわめきが間を置くようになった。その日の終り頃に、仕事を終った漁夫が、気掛りで直ぐ便所のところへ行つたが、もうドアを内側から叩きつける音もしていなかった。こつちから合図をしても、それが返って来なかった。——その遅く、鞆隠し^{きんかく}に片手をもたれかけて、便所紙の箱に頭を入れ、うつぶせに倒れていた宮口が、出されてきた。唇の色が青インキをつけたように、ハッキリ死んでいた。(36-37頁)

この描写からわかるように、隠れていた雑夫宮口は捕らえられ、浅川に便所に監禁され、虐待されたのです。これが最初の「見せしめ」です。はじめのほうで浅川は漁業監督と言いましたが、その仕事の実態は労働者を「監督」するのではなく、むしろ「監視」し強制的に働かせることです。しかも、発見したのは同僚の中年過ぎの漁夫で、バット二つ、手拭一本の「賞品」欲しさのために仲間を売ったのです。同じ苦しい環境の中にいる者同士だからこそ、強い連帯意識を持って助け合うのが普通かと思えます。しかも、宮口は雑夫なので14、5歳の少年です。このような極限状態に至ったときには、利己的で非人間的な振舞いをする者も出てくるものです。

先ほども触れましたが、多くの労働者たちが病気になり、体調不良を訴えます。彼らは十分な休養さえ取ることができません。彼らの悲惨な状況が上の引用文に続いて次のように具体的に描写されています。

朝は寒かった。明るくなつてはいたが、まだ三時だった。かじかんだ手を懐につっこみながら、背を丸くして起き上つてきた。監督は雑夫や漁夫、水夫、火夫の室まで見廻って歩いて、風邪^{かぜ}をひいているものも、病気のものも、かまわず引きずり出した。

風は無かったが、甲板で仕事をしていると、手と足の先^{さき}が播粉木^{すりこぎ}のように感覚が無くなった。雑夫長が大声で悪態をつきながら、十四、五人の雑夫を工場に追い込んでいた。彼の持っている

竹の先には皮がついていた。それは工場で怠けているものを機械の杵越しに、向う側でもなぐりつけることが出来るように、造られていた。(37-38 頁)

浅川も雑夫長も漁夫や雑夫だけでなく、水夫や火夫にも過酷な労働を強制していました。このことに注意しておいてもらいたいと思います。あとでその意味がわかるかと思いますが。

雑夫長は浅川の子分のような存在で、浅川と同様に雑夫たちに対して竹の先に皮をつけた鞭で打つなど暴力を振っていました。

先ほど宮口は「唇の色が青インキをつけたように、ハッキリ死んでいた」と言いましたが、本当に死んでいたのでしょうか。上の引用に続いて次のように描写されています。

「昨夜出されたきりで、ものもいえない宮口を今朝からどうしても働かさなけアならないって、さっき足で蹴ってるんだよ。」

学生上がりになじんでいる弱々しい身体の雑夫が、雑夫長の顔を見い見い、そのことを知らせた。「どうしても動かないんで、とうとうあきらめたらしいんだけど。」(38 頁)

宮口は幸運にも死を免れました。しかし、瀕死の宮口に対してさえこのような惨い仕打ちをし容赦なく働かせようとします。

ちょうどそのとき浅川は仕事をさせるために病気で身体が弱っている他の雑夫を押し連れて来ます。この物語では蟹工船での労働を「監獄」という比喩的な言葉で表現しているところが3回出てきます。その最初の場面です。

そこへ、監督が身体をワクワクふるわせている雑夫を後からグイ、グイ突きながら、押して来た。寒い雨に濡れながら仕事をさせられたために、その雑夫は風邪をひき、それから肋膜炎を悪くしていた。寒くないときでも、始終身体をふるわしていた。子供らしくない皺を眉の間に刻んで、血の気のない薄い唇を妙にゆがめて、疝のピリピリしているような眼差しをしていた。彼が寒さに堪えられなくなって、ボイラーの室にウロウロしていたところを、見付けられたのだった。

出漁のために、川崎船をウインチから降ろしていた漁夫たちは、その二人を何もいえず、見送っていた。四十ぐらいの漁夫は、見ていられないという風に、顔をそむけると、イヤイヤをするように頭をゆるく二、三度振った。

「風邪をひいてもらったり、不貞寝をされてもらったりするために、高い金払って連れて来たんじゃないんだぜ。——馬鹿野郎、余計なものを見なくたっていい！」

監督が甲板を棍棒で叩いた。

「監獄だって、これより悪かったら、お目にかからないで！」

「こんなこと内地さ帰って、なんぼ話したって本当にしねんだ。」

「んさ。——こったら事って第一あるか。」(38-39 頁)

この雑夫も宮口と同様に寒さに耐えられず、また他に隠れる場所もなかったので暖かいボイラー室に隠れていたのだと思います。

夕張炭坑の坑夫を思い出してください。「さあ、ここだってそう大して変わらないが……。」と若い漁夫がその坑夫に言った意味が、物語が進むにつれてわかっていきます、と第一章で言いました。ようやくここに至って坑夫はそれを痛感することになります。

炭山とあだ名で呼ばれる漁夫がはじめて登場する場面です。この物語の中盤でこの漁夫は重要な役割を果たすことになります。

仕事の切れ目が出来たので、学生上りがちよつとの間、風を避けて、荷物のかげに腰を下していると、炭山から来た漁夫が口のまわりに両手を円く囲んで、ハア、ハア息をかけながら、ひよいと角を曲ってきた。

「生命的だな！」それが——心からファイと出た実感が思わず学生の胸を衝いた。「やっばし炭山と変らないで。死ぬ思いばしないと、生きられないなんてな。——瓦斯も恐ッかねど、波もおっかねしな。」(39頁)

「生命的だな！」というのは、命がけの危険な行為を意味しています。繰り返しになりますが、最初に浅川が漁夫たちに向かって「俺たちは命を的に、北海の荒波をつっ切っていくのだということを知って貰わにゃならない。」と警告していました。

川崎船の行方不明

昼過ぎから空の様子が変わり突風になります。

「兎が飛ぶどオ——兎が！」誰か大声で叫んで、右舷のデッキを走って行った。その声が強い風にすぐちぎり取られて、意味のない叫び声のように聞こえた。

もう海一面、三角波の頂きが白いしぶきを飛ばして、無数の兎があたかも大平原を飛び上っているようだった。——それがカムサツカの「突風」の前ブレだった。(40頁)

船で仕事をしている漁夫や雑夫たちは周章で出します。実はその日の朝早く浅川は「突風」の警戒報を受信していました。

すぐ頭の上で、警笛が鳴り出した。〔中略〕——遠く本船を離れて、漁に出ている川崎船が絶え間なく鳴らされているこの警笛を頼りに、時化をおかして帰ってくるのだった。

薄暗い機関室への降り口で、漁夫と水夫が固まりあって騒いでいた。斜め上から船の動揺の度に、チラチラ薄い光の束が洩れていた。興奮した漁夫の色々な顔が、瞬間瞬間、浮き出て、消えた。

「どうした？」坑夫がその中に入り込んだ。

「浅川の野郎ば、殴り殺すんだ！」殺気だっていた。

監督は実は今朝早く、本船から十湊ほど離れたところに碇っていた××丸から「突風」の警戒報を受取っていた。それにはもし川崎船が出ていたら、至急呼戻すようにさえ付け加えていた。その時、「こんな事に一々ピク、ピクしていたら、このカムサツカまでワザワザ来て仕事なんか出来るかい。」——そう浅川のいったことが、無線係から洩れた。

それを聞いた最初の漁夫は、無線係が浅川ででもあるように、怒鳴りつけた。「人間の命を何んだって思ってやがるんだ！」

「人間の命？」

「そうよ。」

「ところが、浅川はお前たちをどだい人間だなんて思っていないよ。」(40-41頁)

カムサツカの海は想像を絶する荒波です。漁夫でさえそれに恐怖を抱いていました。

カムサツカの海は、よくも来やがった、と待ちかまえていたように見えた。ガツ、ガツに飢えている獅子のように、いどみかかってきた。船はまるで兎うさぎより、もっと弱々しかった。空一面の吹雪は風の工合で、白い大きな旗がなびくように見えた。夜近くなってきた。しかし時化は止みそうもなかった。(24 頁)

無線係と漁夫の会話から、浅川が漁夫の命などまったく気にも留めていないことがこの場面でも窺えます。秩父丸が沈没したときにも浅川は同様の言動をしていました。

皆がゴロゴロ横になっていたとき、監督が入ってきた。

「皆、寝たか——ちょっと聞け。秩父丸ちちぶまるが沈没したっていう無電が入ったんだ。生死の詳しいことは分らないそうだ。」唇をゆがめて、唾をチェツとはいた。癖だった。

学生は給仕からきいたことが、すぐ頭に来た。自分が現に手をかけて殺した四、五百人の労働者の生命のことを、平気な顔でいう。海にタタキ込んでやっても足りない奴だ、と思った。(36 頁)

前に浅川に対する船長の不快な思いについて話をしましたが、漁夫たちも気持ちは同じでした。この突風のために川崎船一艘が漁夫とともに行方不明になります。

夕方になるまでに二艘そうを残して、それでも全部帰ってくるのが出来た。どの漁夫も本船のデッキを踏むと、それっきり気を失いかけた。一艘は水船になってしまったために、錨いかりを投げ込んで、漁夫が別の川崎に移って、帰ってきた。他の一艘は漁夫とともに全然行衛不明だった。(43 頁)

行方不明になった漁夫たちを浅川は必死になって探し出し救助しようとするはずがありません。浅川の非人間的な性格が次の描写でも顕著にあらわれていると思います。かれは漁夫たちではなく、川崎船を気にかけているのです。

監督はブリブリしていた。何度も漁夫の室へ降りて来て、また上って行った。皆は焼き殺すような憎悪に満ちた視線で、だまって、その度に見送った。

翌日、川崎の搜索かたがた、蟹の後を追って、本船が移動することになった。「人間の五、六匹何んでもないけれども、川崎がいたまじかった」からだった。(43 頁)

浅川は労働者のことを 5、6 匹と侮蔑的に表現していることに注意してください。かれにとって漁夫の 5、6 人がいなくなっても大した問題ではありません。というのも、代替可能な漁夫たちが大勢いるからです。しかし、川崎船を失うことは蟹漁ができなくなるので重大事でした。つまり、「労働者の命」より「お金」が優先されるのです。

炭坑と同じです。夕張炭坑の話をしたときに、「馬鹿野郎！ ここさ火でも移ってみろ、大損だ」と監督らしき者が怒鳴りつけていました。引火しないように壁を作って坑道を塞ぎ、坑夫たちを生き埋めにしたのです。

幸いにも戻って来ることができた漁夫たちは行方不明になった漁夫たちの残された荷物や家族の住所を調べたり、万が一の場合に備えて、すぐに処置ができるように取り纏めていました。その中には子供からの手紙もありました。

ぐずりと鼻をならして、手紙から顔を上げると、カスカスした低い声で、「浅川のためだ。死んだと分ったら、弔い合戦をやるんだ。」といった。その男は図体の大きい、北海道の奥地で色々

なことをやってきたという男だった。もっと低い声で、

「奴、一人ぐらいタタキ落せるべよ。」若い、肩のもり上った漁夫がいった。

「あ、この手紙いけねえ。すっかり思い出してしまった。」

「なア」最初のがいった。「うっかりしていれば、俺たちだって奴にやられたんだで。他人ごとでねえんだど。」

隅の方で、立膝をして、^{おやゆび}拇指の爪をかみながら、上眼をつかって、皆のいうのを聞いていた男が、その時、うん、うんと頭をふって、うなずいた。「万事、俺にまかせれ、その時ア！あの野郎一人グイとやってしまうから。」

皆はだまった。——だまったまま、しかし、ホツとした。(47-48 頁)

「死んだと分ったら、弔い合戦をやるんだ。」「奴、一人ぐらいタタキ落せるべよ。」「あの野郎一人グイとやってしまうから。」と漁夫たちが言っています。浅川の言動はそう言わせるほど許せなかったのです。しかも、「うっかりしていれば、俺たちだって奴にやられたんだで。他人ごとでねえんだど。」とも言っています。確かに誰が遭難して死んでもおかしくない状況だったのです。

ロシア人家族による救助

行方不明になった川崎船と漁夫たちはどうなったのでしょうか。

博光丸が元の位置に帰ってから、三日して突然(!)その行衛不明になった川崎船が、しかも元気よく帰ってきた。

彼らは船長室から^{くそつぼ}「糞壺」に帰ってくると、^{たちま}忽ち皆に、渦巻のように取巻かれてしまった。

——彼等は「大暴風雨」のために、一たまりもなく操縦の自由をなくしてしまった。そうなればもう襟首をつかまれた子供より他愛なかった。一番遠くに出ていたし、それに風の工合もちようど反対の方向だった。皆は死ぬことを覚悟した。漁夫は何時でも「安々と」死ぬ覚悟をすることに「慣らされて」いた。

が(!)こんなことは滅多にあるものではない。次の朝、川崎船は半分水船になったまま、カムサツカの岸に打ち上げられていた。そして皆は近所のロシア人に救われたのだった。(48 頁)

冒頭で「函館港に停泊している博光丸のすぐ手前には日本の「蟹工船」に対するロシアの監視船もいます。」と話しました。しかし、遭難した彼らは意外にもロシア人の家族に救助され、親切にいろいろと世話をしてもらいました。

彼らはそこに二日いて、身体を直し、そして帰ってきたのだった。「帰ってきたくはなかった。」誰がこんな地獄に帰りたかって！ が、彼らの話は、それだけで終ってはいない。「面白いこと」が、その外にかくされていた。(49 頁)

ここでまた「地獄」という言葉が出てきます。この物語の冒頭で「おい地獄さ行ぐんだで！」とひとりの漁夫が話しかけていました。これが1回目でした。ここでは「誰がこんな地獄に帰りたかって！」と言っています。これで2回目です。今まで話したように、彼らの労働環境や生活状態そのものが地獄だったのです。しかし、「地獄」はこれで終わりません。このあとにも、それはより酷いものとして続いていくのです。

彼らはそのロシア人家族からどのような影響を受けることになるのでしょうか。上の引用に続いて次のように描写されています。

ちょうど帰る日だった。彼らがストーヴの周りで、身仕度をしながら話していると、ロシア人が四、五人入ってきた。——中に支那人が一人交っていた。——顔が巨きくて、赤い、短い鬚の多い、少し猫背の男が、いきなり何か大声で手振りをして話し出した。船頭は、自分たちがロシア語は分らないのだという事を知らせるために、眼の前で手を振って見せた。ロシア人が一句切りうると、その口元を見ていた支那人は日本語をしゃべり出した。それは聞いている方の頭が、かえってごじゃごじゃになってしまうような、順序の狂った日本語だった。言葉と言葉が酔払いのように、散り散りによろめいていた。

「貴方がた、金キツ持っていない。」

「そうだ。」

「貴方がた、貧乏人。」

「そうだ。」

「だから、貴方がた、プロレタリア。——分る？」

「うん。」

ロシア人が笑いながら、その辺を歩き出した。時々立ち止って、彼らの方を見た。

「金持、貴方がたをこれする。(首を締める恰好をする。) 金持だんだん大きくなる。(腹のふくれる真似。) 貴方がたどうしても駄目、貧乏人になる。——分る？ ——日本の国、駄目。働く人、これ。(顔をしかめて、病人のような恰好。) 働かない人、これ。えへん、えへん。(偉張って歩いてみせる。)」

それらが若い漁夫には面白かった。「そうだ、そうだ！」とあって、笑い出した。

「働く人、これ。働かない人、これ。(前のを繰り返して。) そんなの駄目——働く人、これ。(今度は逆に、胸を張って偉張ってみせる。) 働かない人、これ。(年取った乞食のような恰好。) これ良ろし。——分かる？ ロシアの国、この国。働く人ばかり。働く人ばかり、これ。(偉張る。) ロシア、働かない人いない。ずるい人いない。人の首しめる人いない。——分る？ ロシアちっとも恐ろしくない国。みんな、みんなウソばかりいって歩く。」(49-50 頁)

漁夫たちはこの話を聞いて漠然と、これが「恐ろしい」「赤化」というものではないだろうかと考えます。しかし一方で、「赤化」なら馬鹿に「当たり前」のことであるかのような気もしました。そして、この話に大変引きつけられました (51 頁)。

赤化というのは共産主義のことです。共産主義が理想とする社会は労働者の権利を守り、すべての者が平等である社会です。会社は資本主義のブルジョアであり、彼ら労働者はプロレタリアです。この物語の中でプロレタリアという言葉が最初に出てくる場面です。ただし、ブルジョアという言葉は一度も出てきません。重要な言葉なので、ブルジョアとプロレタリアの意味について手短かに説明しておきたいと思います。

1888 年英語版『共産党宣言』の第一章「ブルジョアとプロレタリア」の表題にエンゲルスが次のように注記しています。

ブルジョア階級とは、近代的資本家階級を意味する。すなわち、社会的生産の諸手段の所有者

にして賃金労働者の雇傭者である階級である。プロレタリア階級とは、自分自身の生産手段をもたないので、生きるためには自分の労働力を売られる近代賃金労働者の階級を意味する。(『共産党宣言』マルクス・エンゲルス、1848年、邦訳岩波文庫改版、大内兵衛・向坂逸郎訳、2007年、40頁)

さらに支那人は話を続けます。長いのですが、重要な会話だと思いますのでそのまま引用したいと思います。

「働かないで、お金儲ける人いる。プロレタリア、いつでも、これ。(首をしめられる恰好。)——これ、駄目！ プロレタリア、貴方がた、一人、二人、三人……百人、千人、五万人、十万人、みんな、みんな、これ(子供のお手々つないで、の真似をしてみせる。)強くなる。大丈夫。(腕をたたいて) 負けない、誰にも。分る？」

「ん、ん！」

「働かない人、にげる。(一散に逃げる恰好。) 大丈夫、本当。働く人、プロレタリア、偉張る。(堂々と歩いてみせる。) プロレタリア一番偉い。——プロレタリア居ない。みんな、パン無い。みんな死ぬ。——分る？」

「ん、ん！」

「日本、まだ、まだ駄目。働く人、これ。(腰をかがめて、縮こまってみせる。) 働かない人、これ。(偉張って、相手をなぐり倒す恰好。) それ、みんな駄目！ ——働く人、これ。(形相凄く立ち上る、突っかかって行く恰好。相手をなぐり倒し、フンづける真似。) 働かない人、これ。(逃げる恰好。) ——日本、働く人ばかり、いい国。——プロレタリアの国！ ——分る？」

「ん、ん、分る！」

ロシア人が奇声をあげて、ダンスの時のような足ぶみをした。

「日本、働く人、やる。(立ち上って、刃向う恰好。) うれしい。ロシア、みんな嬉しい。パンザイ。——貴方がた、船へかえる。貴方がたの船、働かない人、これ。(偉張る。) 貴方がた、プロレタリア、これ、やる！ (拳闘のような真似——それからお手々つないでをやり、また突っかかって行く恰好。) ——大丈夫、勝つ！ ——分る？」

「分る！」知らないうちに興奮していた若い漁夫が、いきなり支那人の手を握った。「やるよ、キットやるよ！」(51-52頁)

「——貴方がた、船へかえる。貴方がたの船、働かない人、これ。(偉張る。) 貴方がた、プロレタリア、これ、やる！ (拳闘のような真似——それからお手々つないでをやり、また突っかかって行く恰好。) ——大丈夫、勝つ！ ——分る？」と支那人は通訳しています。この言葉からブルジョアの代表である浅川たちにプロレタリアである漁夫たちが一致団結して奮闘することを促しているように思えます。また、必ず勝利を収めることができると鼓舞しているかのようにも見えます。

漁夫たちは「やるよ、キットやるよ！」と誓っているように思われます。けれども、本当に浅川たちに立ち向かうことができるのでしょうか。

しかし一方で船頭は、「これが「赤化」だと思っていた。馬鹿に恐ろしいことをやらせるものだ。これで——この手でロシアが日本をマシマと騙すんだ」(52頁)、と言っていること

から読み取れるように「赤化」に対して警戒心を露わにしています。話が進むにつれてわかるかと思いますが、船頭と平漁夫とでは立場が異なっているので、考え方も異なっています。

第四章 殖民地としての北海道と「蝟」

第四章では他船との競争における「船員」と「漁夫、雑夫」との競争心の煽り、「賞品」と「焼き」による労働者の競争心の煽り、北海道での「虐使」と「搾取」、タコ部屋労働者、風呂などの話題を中心に話したいと思います。

「船員」と「漁夫、雑夫」との競争心の煽り

多くの蟹工船が函館港から出港し、カムサツカで漁をしています。浅川は他船の収穫量がとても気にかかっています。他船に負けるわけにはいきません。

無電係が、他船の交換している無電を聞いて、その収穫を一々監督に知らせた。それで見ると、本船がどうしても負けているらしい事が分ってきた。監督がアセリ出した。すると、テキ面にそのことが何倍かの強さになって、漁夫や雑夫に打ち当たってきた。

——何時でも、そして、何んでもドン詰りの引受所が「彼ら」だけだった。(57頁)

そこで浅川と雑夫長は狡猾な手段を考えつきます。つまり、「船員」と「漁夫、雑夫」との競争心を煽るのです。そして、彼らは同じ仲間であるにもかかわらず、互いに敵同志になって戦います。言うまでもなく、「船員」の仕事はそもそも蟹漁をすることではありません。

監督や雑夫長はわざと「船員」と「漁夫、雑夫」との間に、仕事上での競争させるように仕組んだ。同じ蟹つぶしかにをしていながら、「船員に負けた」となると、(自分の儲けになる仕事でもないのに、)漁夫や雑夫は「何に糞ッ！」という気になる。監督は「手を打って」喜んだ。(57頁)

浅川は人間の心理をよく知っているのです。

今日勝った、今日負けた、今度こそ負けるもんか——血の滲にじむような日が滅茶苦茶に続く。同じ日のうちに、今までより五、六割も殖ふえていた。(57頁)

確かに、浅川たちの目論見は最初のうちはうまくいきます。しかし、このような過重な労働や無理強いされた競争心が長続きするはずがありません。

しかし五日、六日になると、両方とも気抜けしたように、仕事の高がズン、ズン減って行った。仕事をしながら、時々ガクリと頭を前に落した。監督はものもいわないで、なぐりつけた。不意を喰らって、彼らは自分でも思いがけない悲鳴を「キヤッ！」とあげた。——皆は敵同志か、言葉ことばを忘れてしまった人のように、お互にだまりこくって働いた。ものものをいうだけのぜいたくな「余分」さえ残っていなかった。(57頁)

「賞品」と「焼き」による労働者の競争心の煽り

疲れ果て競争心を失った彼らの競争心を再び煽るために浅川は、今度は「飴」と「鞭」、つまり報奨と懲罰の策略を目論みます。

監督はしかし、今度は、勝った組に「賞品」を出すことを始めた。燻くすぶりかえっていた木が、また燃え出した。

「他愛のないものさ。」監督は、船長室で、船長を相手にビールを飲んでいた。〔中略〕

監督は「賞品」の外に、逆に、一番働きの少いものに「焼き」を入れる事を貼紙した。鉄棒を真赤に焼いて、身体にそのまま当てることだった。彼らは何処まで逃げても離れない、まるで自分自身の影のような「焼き」に始終追いかけて、仕事をした。仕事が尻上りに、目盛りをあげて行った。(58 頁)

「焼き」とは引用からもわかるように、焼いた火箸を用いて制裁や拷問を加えることです。

浅川は人間の身体はどれくらい耐えられるものなのか、その限界を当の本人よりもよく知っているのです。ですから、極限まで労働を強い労働者を使い潰すのです。このような会社は現在の日本にもないとは言えないのではないのでしょうか。

人間の身体には、どのぐらいの限度があるか、しかしそれは当の本人よりも監督の方が、よく知っていた。——仕事が終わって、丸太棒のように棚の中に横倒れに倒れると、「期せずして」う、う——、うめいた。(58 頁)

このような状況の中で、学生のひとりが自分たちの置かれた状況が子供のときに見た「地獄」絵とまったく同じであることを思い出します。「おい地獄さ行くんだで！」が1回目でした。「誰がこんな地獄に帰りたいて！」が2回目でした。ここで「地獄」という言葉が使われるのはこれで3回目です。

学生の一人は、小さい時に祖母に連れられて、お寺の薄暗いお堂の中で見たことのある「地獄」の絵が、そのままこうであることを思い出した。それは、小さい時の彼には、ちょうどうわばみのような動物が、沼地ににょろ、にょろと這っているのを思わせた。それとそっくり同じだった。——過労がかえって皆を眠らせない。夜中過ぎて、突然、硝子の表に思い切り疵をつけるような不気味な歯ざしりが起ったり、寝言や、うなされているらしい突調子な叫声が、薄暗い「糞壺」のところどころから起った。

彼らは寝れずにいるとき、フト、「よく、まだ生きているな……。」と自分で自分の生身の身体にささやきかえすことがある。よく、まだ生きている——そう自分の身体に！

学生上りは一番「こたえて」いた。(58-59 頁)

学生上りが一番「こたえて」いたのは、まだ20代のはじめで、おそらく蟹工船での仕事にまったく慣れていなかったからだと思います。ほかの漁夫たちはすでに以前の仕事で過酷な労働の経験がある者もあり、また蟹工船に舞い戻ってくる者も少なくありませんでした。しかしそれでも、彼らは「よく、まだ生きているな……。」と、自分自身に向かってつい口に出るほど、今自分が生きていることが不思議でならなかったのです。

この学生上りはドストエフスキー(1821-1881年)の『死の家の記録』(1860-1862年)を読んでいたのでしょうか。このような過酷な労働の中でこの作品に言及します。学生だったので小説なども読んでおり、教養があったのだと思います。当時の言葉で言えば、かれはインテリゲンツィアです。かれは地獄のような獄内の生活や凄惨な答刑(答とは答のことで、鞭打ち刑)などドストエフスキーのシベリア流刑の体験や見聞と自分たちの状況を比較して、自分たちの状況がいかに酷いものであるかを痛感します。

「ドストイェフスキーの死人の家な、ここから見れば、あれだって大したことではないって気がする。」——その学生は、糞が何日もつまって、頭を手拭でカ一杯に締めないと、眠れなかった。

(59 頁)

前にも話しましたが、糞詰まりで体調不良を訴える漁夫が多かったようです。

北海道での「虐使」と「搾取」

ところで繰り返しになりますが、北海道ではなぜこのような虐使がまかり通っていたのでしょうか。言い換えると、なぜ資本家は北海道に目を付けたのでしょうか。

——内地では、労働者が「横柄」になって無理がきかなくなり、市場も大体開拓されつくして、行き詰ってくると、資本家は「北海道・樺太へ！」鉤爪をのぼした。そこでは、彼らは朝鮮や、台湾の殖民地と同じように、面白いほど無茶な「虐使」が出来た。(64 頁)

つまり、北海道では資本家は労働者に対して無茶な「虐使」ができたからです。その「虐使」は具体的にはどのようなものだったのでしょうか。

しかし、誰も、何んともいえない事を、資本家はハッキリ呑み込んでいた。「国道開たく」「鉄道敷設」の土工部屋では、虱より無雑作に土方がタタき殺された。虐使に堪えられなくて逃亡する。それが捕まると、棒杭にしばりつけて置いて、馬の後足で蹴らせたり、裏庭で土佐犬に噛み殺させたりする。それを、しかも皆の目の前でやってみせるのだ。〔中略〕

脚気では何人も死んだ。無理に働かせるからだった。死んでも「暇がない」ので、そのまま何日も放って置かれた。裏へ出る暗がりに、無雑作にかけてあるムシロの裾から、子供のように妙に小さくなった、黄黒く、艶のない両足だけが見えた。

「顔に一杯蠅がたかっているんだ。側を通ったとき、一度にワーンと飛び上るんでないか！」額を手でトントン打ちながら入ってくると、そういう者があった。

皆は朝は暗いうちに仕事場に出された。そして鶴嘴のさきがチラッ、チラッと青白く光って、手元が見えなくなるまで、働かされた。近所に建っている監獄で働いている囚人の方を、皆はかえって羨しがった。殊に朝鮮人は親方、棒頭からも、同じ仲間の土方（日本人の）からも「踏んづける」ような待遇をうけていた。(64-65 頁)

「国道開拓」や「鉄道敷設」の労働は「監獄」よりも言語に絶するほど酷いということが読み取れます。「監獄」という言葉が使われるのは、これで 2 回目です。1 回目は第三章で出てきた「監獄だって、これより悪かったら、お目にかからないで！」という会話でした。

途中の引用はあえて省略しています。その箇所ではより具体的でありにも残酷極まる虐使が描かれているからです。人間が人間に対してこんな事ができるものだろうか、と目を覆いたくなる描写です。

築港の埋立でも同様の虐待や虐使が行われ、「原始的」な搾取が公然とまかり通っていました。

北海道では、字義通り、どの鉄道の枕木もそれはそのまま一本一本労働者の青むくれた「死骸」だった。築港の埋立には、脚気の土工が生きたまま「人柱」のように埋められた。——北海道の、そういう労働者を「タコ（蛸）」といっている。蛸は自分が生きて行くためには、自分の手足をも食ってしまう。これこそ、全くそっくりではないか！ そこでは誰も憚らない「原始的」な搾取が出来た。「儲け」がゴゾリ、ゴゾリ掘りかえってきた。しかも、そして、その事を巧み

に「国家的」富源の開発ということに結びつけて、マンマと合理化していた。抜け目がなかった。「国家」のために、労働者は「腹が減り」「タタキ殺されて」行った。(65-66 頁)

第一章で「蛸」の話をしました。詳しく言うとかういう意味なのです。

「人柱」というのは、橋、堤防、城などを築くときに工事の完成を祈り神々の心を和らげるために「生贄」として人を水底や地中に生き埋めにすることです。

具体的な事件についてひとつだけ触れておきたいと思います。常紋トンネルは 1912 年(明治 45 年)に着工され、1914 年(大正 3 年)に開通しました。この難工事はタコ部屋労働者の凄惨過酷な労働によって完成しました。1968 年(昭和 43 年)十勝沖地震でのトンネルの壁面損傷に伴う改修工事を行ったところ、1970 年(昭和 45 年)レンガ壁の中から「人柱」が発見されました。犠牲者は数百人とも言われています(『常紋トンネル—北辺に斃れたタコ労働者の碑—』小池喜孝、朝日新聞社、1977 年)。

また、先ほど言及した懲罰としての「焼き」は「国道開拓」や「鉄道敷設」の現場でも日常的に行われていました。

焼火箸やけひばしをいきなり尻にあてることや、六角棒で腰が立たなくなる程なぐりつけることは「毎日」だった。飯を食っていると、急に、裏で鋭い叫声が起る。すると、人の肉が焼ける生ッ臭い匂いが流れてきた。

「やめた、やめた。——とても飯なんて、食えたもんじゃねえや。」

箸を投げる。が、お互暗い顔で見合った。(64 頁)

さらに鉱山でも同様のことが起こっていました。

鉱山やまでも同じだった。——新しい山に坑道を掘る。そこにどんな瓦斯ガスが出るか、どんな飛んでもない変化が起るか、それを調べあげて一つの確針をつかむのに、資本家は「モルモット」より安く買える「労働者」を、乃木軍神がやっと同じ方法で、入り代り、立ち代り雑作ぞうさなく使い捨てた。鼻紙より無造作に!「マグロ」の刺身のような労働者の肉片が、坑道の壁を幾重にも幾重にも丈夫にして行った。都会から離れていることを好都合にして、ここでもやはり「ゾッ」とすることが行われていた。トロッコで運んでくる石炭おやゆびの中に拇指や小指がバラバラに、ねばって交ってることがある。女や子供はそんな事にはしかし眉を動かしてはならなかった。そう「慣らされていた」。彼らは無表情に、それを次の持場まで押してゆく。——その石炭が巨大な機械を、資本家の「利潤」のために動かした。

どの坑夫も、長く監獄かんごくに入れられた人のように、艶のない黄色くむくんだ、始終ボンヤリした顔をしていた。日光の不足と、炭塵と、有毒ガスを含んだ空気と、温度と気圧の異常とで、眼に見えて身体がおかしくなるとしてゆく。「七、八年も坑夫をしていれば、凡そ四、五年間ぐらいは打ッ続けに真暗闇の底にいて、一度だって太陽を拝まなかったことになる、四、五年も!」——だが、どんな事があろうと、代わりの労働者を何時でも沢山仕入れることの出来る資本家には、そんなことはどうでもいい事であった。(66-67 頁)

前に蟹工船を「監獄」だと言いました。「どの坑夫も、長く監獄かんごくに入れられた人のように、艶のない黄色くむくんだ、始終ボンヤリした顔をしていた。」と記されているように、炭坑も「監

獄」だったのです。「監獄」という言葉が使われる1回目は第三章で出てきた「監獄だって、これより悪かったら、お目にかからないで！」という会話でした。2回目は先ほど引用しましたが、「近所に建っている監獄で働いている囚人の方を、皆はかえって羨しがった。」という会話です。「どの坑夫も、長く監獄に入れられた人のように、艶のない黄色くむくんだ、始終ボンヤリした顔をしていた。」という描写が「監獄」という言葉が使われる最後の場面です。

女性や子供たちはそんな事に眉を動かしてはならず、そう「慣らされていた」とあります。第三章で話しましたが、漁夫の場合には、何時でも「安々と」死ぬ覚悟をすることに「慣らされて」いました。この物語で「慣らされていた」という表現が出てくるのはこれら2つの場面です。

「入地百姓」、特に北海道の「移民百姓」にも同様のことが当てはまります。「入地百姓」というのは、没落した他の村から移住させられて耕作に当たられた小作農民のことを言います。

それから「入地百姓」——北海道には「移民百姓」がいる。「北海道開拓」「人口食糧問題解決、移民奨励」、日本少年式「移民成金」などウマイ事ばかり並べた活動写真を使って、田畑を奪われそうになっている内地の貧農を煽動して、移民を奨励して置きながら、四、五寸も掘り返せば、下が粘土ばかりの土地に放り出される。豊饒な土地には、もう立札が立っている。雪の中に埋められて、馬鈴薯も食えずに、一家は次の春には餓死することがあった。それは「事実」何度もあった。雪が溶けた頃になって、一里も離れている「隣りの人」がやってきて、始めてそれが分った。口の中から、半分のみかけている藁屑が出てきたりした。

稀れに餓死から逃れ得ても、その荒ぶ地を十年もかかって耕やし、ようやくこれで普通の畑になったと思える頃、それは実にちアんと、「外の人」のものになるようになっていた。資本家は——高利貸、銀行、華族、大金持は、嘘のような金を貸して置けば、(投げ捨てて置けば)荒地は、肥えた黒猫の毛並のように豊饒な土地になって、間違なく、自分のものになってきた。そんな事を真似て、濡手をきめこむ、目の鋭い人間も、また北海道に入り込んできた。——百姓は、あっちからも、こっちからも自分のものを噛みとられて行った。そして終いには、彼らが内地でそうされたと同じように「小作人」にされてしまっていた。そうやって百姓は始めて気付いた。——「失敗った！」(67-68頁)

第一章でも触れましたが、このように「移民百姓」は資本家に騙され「搾取」されたのです。積取人夫も蟹工船の漁夫と同様に「虐使」されていました。

積取人夫は蟹工船の漁夫と似ていた。監視付きの小樽の下宿屋にゴロゴロしていると、樺太や北海道の奥地へ船で引きずられて行く。足を「一寸」すべらすと、ゴングンゴンとうなりながら、地響をたてて転落してくる角材の下になって、南部セシベイよりも薄くされた。ガラガラとワインチで船に積まれて行く、水で皮がペロペロになっている材木に、拍子食って、なぐりされると、頭のつぶれた人間は、蚤の子よりも軽く、海の中へたたき込まれた。(69頁)

「資本家は「モルモット」より安く買える「労働者」を、乃木軍神がやったと同じ方法で、入り代り、立ち代り雑作なく使い捨てた。鼻紙より無造作に！」と記されているように、資本家にとって「労働者」は常に代替可能で、「使い捨て」できる「物」、つまり単なる手段にすぎなかったのです。そして、悪辣な資本家はこのような貧しい労働者を搾取していたのです。そこには「人間の尊厳」という考えなどまったく見られません。残念ながら、偉そうなことを言っ自分たち

の利益だけを優先し、他人を手段としてうまく利用する人間は常にどこにでもいるものです。

18世紀のドイツの哲学者であるカント（1724-1804年）は、「人間の権利を侵害する人が、他人の人格を単に手段としてのみ利用しようとするなら、これらの人を理性的存在者として、いついかなる時にも目的と見なされるべきであるということ——換言すれば、彼のする行為とまったく同じ行為の目的を、この人達もまたもち得ねばならないような存在者と見なすべきであるということ、考慮にいれていないことは明白」であると述べています（『道徳形而上学原論』原著 1785年、邦訳岩波文庫改訳版、篠田英雄訳、1976年、105頁）。

もちろんこの場合、「人間の権利を侵害する人」というのは上記のような資本家のことを私は指して言っています。

上記のような資本家が「人間の権利を侵害する人」であるというのはなぜかと言えば、それは定言的命法に反するからです。

「そこで私はこう言う、——人間ばかりでなく、およそいかなる理性的存在者も、目的自体として存在する、すなわちあれこれの意志が任意に使用できるような単なる手段としてではなく、自分自身ならびに他の理性的存在者たちに対してなされる行為において、いついかなる場合にも同時に目的と見なされねばならない、と。」（同上、101頁）

またカントは、物と人格とを峻別し、物には手段としての相対的価値があるだけであり、他方で人格を持つ理性的存在者である人間は尊敬の対象となる、つまり尊厳を具えているとして次のように述べています。

「ところで存在するもののなかには、その現実的存在がわれわれの意志に依存するのではなくて、自然に依存しているものがある、そしてこのような仕方では存在するものが理性をもたない場合には、手段としての相対的価値をもつだけであり、その故に物件と呼ばれる。これに反して理性的存在者は人格と呼ばれる、理性的存在者の本性は、この存在者をすでに目的自体として——換言すれば、単に手段として使用することを許さないような或るものとして特示し、従ってまたその限りにおいていっさいの主我的な意志を制限する（そしてまた尊敬の対象となる）からである。」（同上、101頁）

そして、カントは道徳的法則である定言的命法を次のように定式化しています。

「君自身の人格ならびに他のすべての人の人格に例外なく存するところの人間性を、いつでもまたいかなる場合にも同時に目的として使用し決して単なる手段として使用してはならない。」（同上、103頁）

「濡手をきめこむ、目の鋭い人間」と表現されている資本家は労働者の人間性を単なる手段としてだけ使用し、その人格の内にある人間性を目的そのものと見なさず、まったく無視していたのです。それにもかかわらず、漁夫たちはなぜ「北海道」に来たのでしょうか。繰り返しになりますが、彼らの本来の目的はお金を稼いで故郷に持ち帰りたかったのです。

彼らは少しでも金を作って、故里ふるさとの村に帰ろう、そう思って、津軽海峡を渡って、雪の深い北海道へやってきたのだった。——蟹工船にはそういう、自分の土地を「他人」に追い立てられて

来たものが沢山いた。(68 頁)

第一章で言及しましたが、彼らは8グループの中の最後のグループに属する者たちです。

こういう「労働者」は資本家にとって都合がよかったのです。なぜなら、すでに触れましたが、次のような事情があったからです。

——内地では、何時までも、黙って「殺されていない」労働者が一かたまりに固って、資本家へ反抗している。しかし「殖民地」の労働者は、そういう事情から完全に「遮断」されていた。(69 頁)

内地では労働者が一致団結して、資本家に反抗しているのに対して、北海道ではそのような事情がまったく遮られていたのです。

ところで、彼ら労働者は「糞壺」で毎日生活を共にしています。きわめて不衛生な環境です。そのためだけではありませんが、ぐっすりと眠ることさえまなりません。

漁夫は虱を口に入れて、前歯で、音をさせてつぶしたり、両方の^{おやゆび}拇指の爪で、爪が真赤になるまでつぶした。子供が汚い手をすぐに着物に拭くように、裨天の裾にぬぐうと、また始めた。——それでもしかし眠れない。何処から出てくるか、夜通し虱と蚤と南京虫に責められる。いくらどうしても退治し^{すお}尽くされなかった。薄暗く、ジメジメしている棚に立っていると、すぐモゾモゾと何十匹もの蚤が脛を這い上がってきた。終いには自分の体の何処かが腐ってでもないのか、と思った。^{うじ}蛆や^{みらん}蠅に取りつかれている腐爛した「死体」ではないか、そんな不気味さを感じた。(70-71 頁)

労働者にとって一日のうちで最も楽しみだったのは、第二章で話したように食事です。その次に楽しみにしていたのは風呂だと思えます。夜通し虱と蚤と南京虫に身体を襲われて眠れない彼らは、一日の疲れを癒し、身体を衛生的にするためにちゃんと風呂に入れたのでしょうか。

お湯には、初め一日置きに入れた。身体が生ッ臭くよごれて仕様がなかった。しかし一週間もすると、三日置きになり、一カ月ぐらい経つと、一週間一度。そしてとうとう月二回にされてしまった。水の^{らんび}濫費を防ぐためだった。しかし、船長や監督は毎日お湯に入った。それは濫費にはならなかった。(！)——身体が蟹の汁で汚れる。それがそのまま何日も続く。それで虱や南京虫が湧かない「筈」^{はず}がなかった。(71 頁)

まともに栄養も摂れず、身体が痒くて眠れず、しかも満足に風呂にも入れないので一日の労働の疲れが癒されるわけがありません。これもまた地獄と言わざるをえません。

第五章 虐待・虐使と「洗脳」

第五章では雑夫の吊し上げ・縛りつけなどの虐待、虐使、「サボ」、中積船、活動写真隊などの話が語られます。

「見せしめ」としての吊し上げ・縛りつけ

この章は目を覆うような信じられない描写から始まります。浅川の手下である雑夫長が雑夫に対して正視に堪えない虐待をします。

あわてた漁夫が二、三人デッキを走って行った。

曲り角で、急にまがれず、よろめいて、手すりにつかまった。サロン・デッキで修繕をしていた大工が背のびをして、漁夫の走って行った方を見た。寒風の吹きさらしで、涙が出て、初め、よく見えなかった。大工は横を向いて勢よく「つかみ鼻」をかんだ。鼻汁が風にあおられて、歪んだ線を描いて飛んだ。

ともの左舷のウインチがガラガラなっている。皆漁に出ている今、それを動かしているわけがなかった。ウインチにはそして何かブラ下っていた。それが揺れている。吊り下がっているワイヤーが、その垂直線の囲りを、ゆるく円を描いて揺れていた。「何んだべ？」——その時、ドキッと来た。

大工は周章のように、もう一度横を向いて「つかみ鼻」をかんだ。それが風の工合でズボンにひっかかった。トロツとした薄い水鼻だった。

「また、やってやがる。」大工は涙を何度も腕で拭いながら眼をきめた。

こっちから見ると、雨上りのような銀灰色の海をバックに、突き出ているウインチの腕、それにすっかり身体を縛られて、吊し上げられている雑夫が、ハッキリ黒く浮び出てみえた。ウインチの先端まで空を上ってゆく。そして雑巾切れでもひっかかったように、しばらくの間——二十分もそのままに吊下げられている。それから下がって行った。身体をくねらして、もがいているらしく、両足が蜘蛛の巣にひっかかった蠅のように動いている。〔中略〕

ウインチに吊された雑夫は顔の色が変わっていた。死体のように堅くしめている唇から、泡を出していた。大工が下りて行った時、雑夫長が薪を脇にはさんで、片肩を上げた窮屈な恰好で、デッキから海へ小便をしていた。あれでなぐったんだな、大工は薪をちらっと見た。(72-73 頁)

この事件がこの物語における 2 回目の「見せしめ」です。1 回目は雑夫宮口に対する「見せしめ」でした。「また、やってやがる。」と大工が言っていることから窺い知れるように、このような残酷な仕打ちは日常的に行われていたものと思われます。雑夫長も浅川と同様にきわめて暴力的で残忍な性格であることがわかるかと思えます。大工については第九章でまた話したいと思えます。

今まで話したような過酷な労働が何日も続きます。彼らは過労のため朝も起きられず、身体もくたくたです。しかも、疲労回復のための十分な休息もありません。カムサツカの夜明けは早く、午前 2 時頃です。

漁夫たちは何日も何日も続く過労のために、だんだん朝起きられなくなった。監督が石油の空缶を寝ている耳もとでたたいて歩いた。眼を開けて、起き上がるまで、やけに缶をたたいた。脚気のもの、頭を半分上げて何かいっている。しかし監督は見ない振り、空缶をやめない。声が聞こえないので、金魚が水際に出てきて、空気を吸っている時のように、口だけパクパク動いてみえた。いい加減たたいてから、

「どうしたんだ、タタき起こすぞ！」と怒鳴りつけた。「いやしくも仕事が国家的である以上、戦争と同じなんだ。死ぬ覚悟で働け！馬鹿野郎！」(74 頁)

浅川も雑夫長も病人に対しては継子にでも対するようにジリジリと陰険でした。「いやしくも仕事が国家的である以上、戦争と同じなんだ。死ぬ覚悟で働け！馬鹿野郎！」と浅川は言っています。「はじめに」でも言及しましたが、この言い草は浅川の口癖のように思われます。死ぬ覚

悟で働かされた労働者がどのような状況になるかは想像がつくのではないのでしょうか。彼らは常に生と死の境にいます。

学生が蟹をつぶした汚れた手の甲で、額を軽くたたいていた。ちょっとすると、そのまま横倒しに後へ倒れてしまった。その時、側に積かさなっていた缶詰の空瓶がひどく音をたてて、学生の倒れた上に崩れ落ちた。それが船の傾斜に沿って、機械の下や荷物の間に、光りながら円まるく転んで行った。仲間が周章あわてて学生をハッチに連れて行こうとした。それがちょうど、監督が口笛を吹きながら工場に下りてきたのと、会った。ひよいと見てとると、

「誰が仕事を離れたんだ！」

「誰が!?.....」思わずグッと来た一人が、肩でつかかかのように、せき込んだ。

「誰がア——？ この野郎、もう一度いってみろ！」監督はポケットからピストルを取り出して、玩具のようにいじり廻まわした。それから、急に大声で、口を三角形にゆがめながら、背のびをするように身体をゆすって、笑い出した。

「水を持って来い！」

監督は桶一杯に水を受取ると、枕木のように床に置き捨てになっている学生の顔に、いきなり——一度に、それを浴せかけた。

「これでええんだ。——要らないものなんか見なくてもええ、仕事でもしやがれ！」(75 頁)

本来ならあまりの過労に倒れてしまった学生には十分な休息を与えるべきですが、それでも浅川は強制的に働かせようとしたのです。しかも、浅川は脅しのためにピストルを常に携帯しています。ピストルがはじめて登場する場面です。

この学生はその後どうなるのでしょうか。

次の朝、雑夫が工場に下りて行くと、旋盤の鉄柱に前の日の学生が縛りつけられているのを見た。首をひねられた鶏のように、首をガクリ胸に落し込んで、背筋の先端に大きな関節を一つぽコンと露わに見せていた。そして子供の前掛けのように、胸に、それが明かに監督の筆致で、

「此者ハ不忠ナル偽病者ニツキ、麻繩アサナヲ解クコトヲ禁ズ。」

と書いたボール紙を吊していた。(76 頁)

これがこの物語の中での 3 回目の「見せしめ」です。浅川や雑夫長の虐使、虐待はこれにとどまりません。蟹漁が忙しくなるといっそう虐使、虐待が激しさを増すことになります。

蟹漁が忙がしくなると、ヤケに当たってくる。前歯を折られて、一晩中「血の唾」をはいたり、過労で作業中に卒倒したり、眼から血を出したり、平手で滅茶苦茶に叩かれて、耳が聞えなくなったりした。あんまり疲れてくると、皆は酒に酔ったよりも他愛あやまりなくなった。時間がくると、「これでいい」と、フト安心すると、瞬間クラクラとした。(76 頁)

それにしてもなぜ、彼らはこのように虐使され、酷い虐待を受けても抵抗もせず我慢し続けることができたのでしょうか。念のために繰り返しますが、彼らはこの蟹工船で大金を稼いで、内地で待っている家族に持って帰らなければならないからです。

川崎船が遭難したときにロシア人家族に救助された漁夫たちがいました。彼らは「やるよ、キツトやるよ！」と誓ったように思えましたが、これでもまだ浅川たちに立ち向かわないのでしょ

うか。我慢の限界を超えるのは一体いつなのでしょう。

さらに浅川は、怪我をして体力的にも疲弊し、氣力をなくした労働者たちに追い討ちをかけるように非情な言葉を浴びせ掛けます。

皆が仕舞いかけると、

「今日は九時までだ。」と監督が怒鳴って歩いた。「この野郎たち、仕舞いだっていう時だけ、手廻わしを早くしやがって！」

皆は高速度写真のようにノロノロまた立ち上った。それしか氣力がなくなっていた。

「いいか、ここへは二度も、三度も出直して来れるところじゃないんだ。それに何時だって蟹が取れるとも限ったものでもないんだ。それを一日の働きが十時間だから十三時間だからって、それでピッタリやめられたら、飛んでもないことになるんだ。——仕事の性質が異うんだ。いいか、その代り蟹が採れない時は、お前たちを勿体ないほどブラブラさせておくんだ。」監督は「糞壺」へ降りてきて、そんなことをいった。「露助はな、魚が何んぼ眼の前で群化してきても、時間が来れば一分も違わずに、仕事をブン投げてしまうんだ。んだから——んな心掛けだから露西亞の国がああなったんだ、日本男児の断じて真似てならないことだ！」(76-77 頁)

浅川の言葉でわかるかと思いますが、彼らは一日に 10 時間も 13 時間も休みなく働かされていたのです。しかも、カムサツカの夜明けは午前 2 時頃ですので、その時間には漁に出る準備をすでに済ませていなければなりません。

網さばきが終って、何時からでも蟹漁が出来るように準備が出来た。カムサツカの夜明けは二時頃なので、漁夫たちはすっかり身支度をし、股までのゴム靴をはいたまま、折箱の中に入れて、ゴロ寝をした。(35 頁)

漁夫たちは早めに準備を整えてゴロ寝をしながら時間待ちをしていたのです。

「サボ」

浅川や雑夫長のこのような虐待・虐使にもはや漁夫たちは耐えることができません。ここではじめて漁夫たちの口から「サボ」という言葉が出てきます。「サボ」というのは「サボタージュ」の略語で、労働者が団結して仕事の能率を落とすことによって、使用者との紛争の解決を図る戦術のことです。しかしまだ、ここでの「サボ」はまだ集団的行動とまでは言えず、紛争解決を図る戦術として行われたものでもありません。

朝だった。タラップをノロノロ上りながら、炭山から来た男が、

「とても続かねえや。」といった。

前の日は十時近くまでやって、身体は壊れかかった機械のようにギクギクしていた。タラップを上りながら、ひょいとすると、眠っていた。後から「オイ」と声をかけられて思わず手と足を動かす。そして、足を踏み外して、のめったまま腹ん這いになった。

仕事につく前に、皆が工場に降りて行って、片隅に溜った。どれも泥人形のような顔をしている。

「俺ア仕事サボるんだ。出来ねえ。」——炭山だった。

皆も黙ったまま、顔を動かした。

ちょっとして、

「火^な焼きが入るからな……。」と誰かいった。

「ずるけてサボるんでねえんだ。働けねえからだよ。」

炭山^{やま}が袖^{じょうほく}を上^あ膊^{はたけ}のところまで、まくり上げて、眼の前ですかして見るようにかざした。

「長^{なが}げえことねえんだ。——俺アずるけてサボるんでねえんだど。」

「それだら、そんだ。」

「……………」〔中略〕

それが船員の方にも移って行った。船員を漁夫とにらみ合わせて、仕事をさせ、いい加減に馬鹿をみせられていたことが分ると、彼らも時々「サボリ」出した。

「昨日ウンと働き過ぎたから、今日はサボだど。」

仕事の出しなに、誰かそういうと、皆そうなった。しかし「サボ」といっても、ただ身体を楽に使うということではなかったが。

誰だって身体がおかしくなっていた。イザとなったら「仕方がない」やるさ。「殺されること」はどっち道同じことだ。そんな気が皆にあった。——ただ、もうたまらなかった。(79-80 頁)

最初に「サボ」をするのは炭山から来た漁夫です。しかし、「ずるけてサボるんでねえんだ。働けねえからだよ。」「長^{なが}げえことねえんだ。——俺アずるけてサボるんでねえんだど。」と2度と言っているように、かれはなまけてサボるのではなく、本当に身体が疲れ切っていたのです。そして、船員も同じような行動をとることになります。船員は、自分たちを漁夫とにらみ合わせて、仕事をさせ、いい加減に馬鹿をみせられていたことがようやくわかったからです。

労働者のこのような「サボ」を見て、浅川はどのように反応するのでしょうか。

その日、監督^{としか}は鶏冠^{けんかどり}をピンと立てた喧嘩鶏のように、工場を廻って歩いていた。「どうした、どうした!!」と怒鳴り散らした。がノロノロと仕事をしているのが一人、二人でなしに、あっちでも、こっちでも——殆んど全部なので、ただイライラ歩き廻ることしか出来なかった。漁夫たちも船員もそういう監督を見るのは始めてだった。上甲板で、網から外した蟹が無数に、ガサガサと歩く音がした。通りの悪い下水道のように、仕事がドンドンつまって行った。しかし「監督の棍棒」が何の役にも立たない!

仕事が終わってから、煮しまった手拭で首を拭きながら、皆ゾロゾロ「糞壺」に帰ってきた。顔を見合うと、思わず笑い出した。それが何故か分らずに、おかしくて、おかしくて仕様がなかった。(79-80 頁)

意外に思われるかもしれませんが、棍棒も何の効き目もなく、暴君浅川でさえどうしてよいかわからず、当惑している様子が窺えます。「サボ」とは言っても、団結したうえでの問題を解決するための集团的行動とまでは言えません。しかし、「船員の方にも移って行った」、「一人、二人でなしに、あっちでも、こっちでも——殆んど全部」とあるように炭山がきっかけとして行われた「サボ」が皆に自然と共有されたように思われます。共有されるということはとても重要なことです。その後も彼らはこの「サボ」を上手く利用しようとしませんが、果たしてその効果は持続するのでしょうか。

中積船、活動写真と「洗脳」

漁夫たちの楽しみとして、第二章で食事を、第四章で風呂を挙げました。その他にもうひとつの楽しみがありました。中積船です。この船は定期的に来て、蟹工船で作られた缶詰を内地に持って行くとともに、漁夫たちにいろいろな届け物をします。

中積船は漁夫や船員を「女」よりも夢中にした。この船だけは塩ッ臭くない、——函館の匂い^{にお}がしていた。何か月も、何百日も踏みしめたことのない、あの動かない「土」の匂いがしていた。それに、中積船には日附の違った何通りもの手紙、シャツ、下着、雑誌などが送りとどけられていた。

彼らは荷物を蟹臭い筋立った手で、驚^{おど}づかみにするとあわてたように「糞壺」にかけ下りた。そして棚に大きな安坐^{あんざ}をかいて、その安坐の中で荷物を解いた。色々のものが出る。——側から母親がもの^{もの}をいって書かせた、自分の子供のたどたどしい手紙や、手拭、歯磨、楊子、チリ紙、着物、それらの合わせ目から、思いがけなく妻の手紙が、重さでキチンと平べったくなって、出てきた。彼らはその何処からでも、陸にある「自家^{うち}」の匂いをかぎ取ろうとした。乳臭い子供の匂いや、妻のムツとくる膚^おの臭いを探した。(81頁)

この引用からもわかるように、内地にいる両親や妻、子供たちが彼らのことをどんなに想っているかが窺い知れます。また、彼らがいかに届け物を待ち遠しく思っていたかも伝わります。

中積船には、会社で派遣した活動写真隊が乗り込んでいました。活動写真とは無声映画のことです。出来上った缶詰を中積船に移したあと、晩に船で活動写真を映すことになっていました。

活動写真隊は2、3人ですが、彼らが乗船して最初に発した言葉は「臭い、臭い！」です(83頁)。臭いのは糞壺だけでなく、船全体、特にデッキにも「生ッ臭い匂い」が漂って残っていました。駆逐艦からやってきた綺麗な口髭の若い士官も同様に「臭いね」と言って、上品に顔をしかめます(89頁)。

ある弁士が「しかしひどい所にいるんだな！」と漁夫たちに話しかけ、そのあと漁夫たちにとっては思いもよらないことを語り出します(84頁)。

「知らないだろうけれども、この会社がここへこうやって、やって来るために、幾ら儲けていると思う？ 大したもんだ。六カ月に五百万円だよ。一年千万円だ。——口で千万円っていえば、それっ切りだけでも、大したもんだ。それに株主へ二割二分五厘なんて滅法界もない配当をする会社なんて、日本にだってそうないんだ。今度社長が代議士になるっていうし、申分^{もうしぶん}がないさ。——やはり、こんな風にしてもひどくしなけア、あれだけ儲けられないんだろな。」(84頁)

この弁士の言葉によって、会社が労働者から酷い搾取をしていることが読み取れます。弁士というのは無声映画で映画の説明をする人のことです。

しかし、娯楽などほとんどない糞壺で生活している漁夫や雑夫にとって活動写真は気晴らしであり、楽しみでもあったに違いありません。

夜になった。

「一万箱祝」を兼ねてやることになり、酒^{しようちゆう}、焼酎、するめ、にしめ、バット、キャラメルが皆の間に配られた。(84頁)

「一万箱祝」とはいえ、このように普段口にできない酒や食べ物を振る舞うのは見え透いた会

社の懐柔策であるようにも思えます。

それでは、どんな映画が上映されたのでしょうか。まず、最初に宮城、松島、江ノ島、京都などの「実写」が映し出されました。そのあと、西洋物はアメリカ映画で「西部開発史」を取り扱ったものでした。

ところで、日本映画では何を観たのでしょうか。

日本の方は、貧乏な一人の少年が「納豆売り」「夕刊売り」などから「靴磨き」をやり、工場に入り、模範職工になり、取り立てられて、一大富豪になる映画だった。——弁士は字幕にはなかったが、「げに勤勉こそ成功の母ならずして、何んぞや！」といった。

それには雑夫たちの「真剣な」拍手が起った。しかし漁夫か船員のうちで、

「嘘こけ！ そんだったら、俺なんて社長になってねかならないべよ。」

と大声を出したものがいた。

それで皆は大笑いに笑ってしまった。

後で弁士が、「ああいう処へは、ウンと力を入れて、繰りかえし、繰りかえしいって貰いたいって、会社から命令されて来たんだ。」といった。(86-87 頁)

そして最後は、会社の各所属工場や事務所などが上映されました。そこには「勤勉」に働いている多くの労働者が写っていました。いかに貧乏であったとしても「勤勉」に働くことで、いつかは一大富豪になれるのだ、という夢を見させるような仕組みになっていたのです。確かに、労働者にとって活動写真は気晴らしや楽しみといった面もありました。しかしそれ以上に、過酷な労働、粗末な食事、不衛生な生活環境を我慢させるための会社による「洗脳」という側面もあったのではないかと思います。

先ほど話しましたが、浅川が漁夫たちに「露助はな、魚が何んぼ眼の前で群化てきても、時間が来れば一分も違わずに、仕事をブン投げてしまうんだ。んだから——んな心掛けだから露西亞の国がああなったんだ、日本男児の断じて真似てならないことだ！」と言いました。この言葉に反感を持つ者もいましたが、大部分の漁夫たちは自分たち「日本男児」は偉いのだと思い込むように見えます。ここにも浅川の巧みな「洗脳」が読み取れるように思われます。

なにいつてるんだ、ペテン野郎！ そう思って聞いていないものもあつた。しかし大部分は監督にそういわれると日本人はやはり偉いんだ、という気にされた。そして自分たちの毎日の残虐な苦しさ、何か「英雄的」なものに見え、それがせめても皆を慰めさせた。(77 頁)

漁夫たちは毎日の残虐な苦しさを「英雄的」なものだと思い込むことによって、自らを慰めていたように思えます。

第一章で「海の上では基本的に逃げたくても逃げることはできないのです。」と言いました。しかし、逃げる手段がまったくなかったわけではありません、とも言いました。

「中積船、函館ば出たとよ。——無電係の人いつてた。」

「帰りにえな。」

「帰れるもんか。」

「中積船でヨク逃げる奴がいるってな。」

「んか!?!.....ええな。」

「漁に出る振りして、カムサツカの陸さ逃げて、露助と一緒に赤化宣伝ばやってるものもいるッてな。」

「.....。」(61 頁)

このように、中には過酷な労働に耐えかねて中積船に逃げ込んだり、川崎船でロシアに逃亡する者もいました。活動写真が終わってからも、彼らは一万箱祝いの酒でみんな酔っぱらってました。それが夜中の 12 時過ぎまで続きます。その時、ある騒動が起きます。

写真が終わってから、皆は一万箱祝いの酒で酔払った。

長い間口にしなかったのと、疲労し過ぎていたので、ペロペロに参ってしまった。〔中略〕

それが十二時過ぎまで続いた。〔中略〕

よほど過ぎてからだった。——「糞壺」の階段を南京袋のように漁夫が転がって来た。着物と右手がすっかり血まみれになっていた。

「出刃、出刃！ 出刃を取ってくれ！」土間を匍いながら、叫んでいる。「浅川の野郎、何処へ行きやがった。居ねえんだ。殺してやるんだ。」

監督のためになぐられたことのある漁夫だった。——その男はストーヴのデレッキを持って、眼の色をかえて、また出て行った。誰もそれをとめなかった。

「な！」函館の漁夫は友達を見上げた。「漁夫だって、何時も木の根っこみたいな馬鹿でねえんだな。面白くなるぞ！」

次の朝になって、監督の窓硝子からテーブルの道具が、すっかり滅茶苦茶に壊されていたことが分った。監督だけは、何処にいたのか運良く「こわされて」いなかった。(87・88 頁)

この漁夫は酔いのせいもあって今まで抑え込んでいた虐待、虐使に対する怒り、特に自分自身も殴られたことに対する憤りを抑えきれず、その張本人である浅川を殺そうとさえしたのだと思います。デレッキというのは北海道で火かき棒のことを意味します。

しかし監督はその場に居合わせなくて、運良く助かりました。浅川はどこにいたのでしょうか。

第六章 駆逐艦

第六章では船長、監督、工場代表と漁夫、船員などに対する給仕の対比的な見方、駆逐艦の本来の目的などが語られます。

給仕の対比的な見方

ある日の昼過ぎ、駆逐艦が博光丸にやって来ます。漁夫、雑夫、船員がそれに見とれています。というのも、物珍しかったからです。ところで、駆逐艦は何をしに来たのでしょうか。

駆逐艦からは、小さいボートが降ろされて、士官連が本船へやってきた。サイドに斜めに降ろされたタラップの、下のおどり場には船長、工場代表、監督、雑夫長が待っていた。ボートが横付けになると、お互に挙手の礼をして船長が先頭に上がってきた。監督が上をひよいと見ると、眉と口隅をゆがめて、手を振って見せた。「何を見ているんだ。行ってる！行ってる！」〔中略〕後からついてきた監督が、周章でて前へ出ると、何かいって、頭を何度も下げた。〔中略〕

「ああなんと、浅川も見られたもんでないな。」(89 頁)

浅川は士官連にペコペコ頭を下げていました。漁夫たちに対しては偉そうにしていますが、士官連には媚びを売っています。下の者に対しては傲慢で横柄な態度をとり、上の者に対しては媚び諂う人間はよく見かけるのではないのでしょうか。ですから、浅川は漁夫たちにその様子を見られたくなかったのです。嫌な人間です。

漁夫たちが仕事を終えてサロンの前を通ると中から酔っぱらって無遠慮に大声で喚き散らしているのが聞こえます。漁夫のひとりがサロンを見て「何をしに来るんだべ？」と給仕に聞きます。給仕はわからないという顔をして急いでコック場に走って行きました。漁夫たちは糞壺で粗末な食事をしながら次のように言います。あとで具体的にわかるかと思いますが、この場面でサロンと糞壺の対比が際立って描かれています。

箸^{はし}では食いつらいボロボロな南京米に、紙ッ切れのような、実が浮んでいる塩ッぽい味噌汁で、漁夫らが飯を食った。

「食ったことも、見たことも無えん洋食が、サロンさ何んぼも行ったな。」

「糞喰え——だ。」(90-91 頁)

南京米というのは、インド・タイ・インドネシア・中国などから輸入された白米の俗称で、細長く、粘質に乏しい米のことです。この騒々しいサロンでの宴会は夜明けまで続きます。次の朝の状態は次のように描写されています。

コックの部屋の隅には、粗末に食い散らされた空の蟹缶詰やビール瓶が山積み^{やまづみ}に積みさっていた。朝になると、それを運んで歩いたボーイ自身でさえ、よくこんなに飲んだり、食ったりしたもんだ、と吃驚した。(92 頁)

しかも、士官たちが宴会をしていたテーブルの側の壁には次のような教訓が書かれたピラが貼られています。

テーブルの側の壁には、

一、飯^{めし}のことで文句^{もんく}をいうものは、偉^{えら}い人間^{にんげん}になれぬ。

一、一粒^{つぶ}の米を大切にせよ。血と汗^{たまもの}の賜物なり。

一、不自由^{ふじゆう}と苦^たしさに耐えよ。

振仮名^{ふりがな}がついた下手な字で、ピラが貼らさっていた。(91 頁)

給仕は仕事の関係上、漁夫や船員などが窺い知ることのできない船長、監督、雑夫長、工場代表などのムキ出しの生活をよく知っていました。と同時に、漁夫たちの惨めな生活もはっきりと対比されて知っていました。また、監督は酔うと漁夫たちを侮蔑的に「豚奴豚奴」と言っているのも聞いていました。

公平^{たふら}にいうて、上の人間はゴウマンで、恐ろしいことを儲けのために「平気」で謀^{たくら}んだ。漁夫や船員はそれにウマウマ落ち込んで行った。——それは見ていられなかった。

何も知らないちはいい、給仕は何時もそう考えていた。彼は、当然どうということが起るか——起らないではないか、それを自分で分かるように思っていた。(93 頁)

給仕は、近いうちに漁夫や船員たちが蟹工船で何を起こすのか、あるいは起こさざるをえない

のかを予感しているように思えます。

駆逐艦の本来の目的

先ほど駆逐艦は何をしに来たのでしょうかと言いました。「始終我帝国の軍艦が我々を守っていてくれることになっている」と、浅川が漁夫たちに対する警告の中で言っていたのを覚えているかと思います。しかし、駆逐艦には蟹工船の警備だけでなく、他にも大きな目的がありました。

夕飯が終わってから、「糞壺」へ給仕がおりにきた。皆はストーヴの周囲で話していた。薄暗い電灯の下に立って行って、シャツから風を取っているのもいた。電灯を横切るたびに、大きな影がペンキを塗った、^{すす}煤けたサイドに斜めにうつった。

「士官や船長や監督の話だけれどもな、今度ロシアの領海へこっそり潜入して漁をするそうだと。それで駆逐艦がしっきりなしに、側にいて番をしてくれるそうだと——大部、コレやってるらしいな。(拇指と人差指で円くしてみせた。)」

「皆の話を知っていると、金がそのままゴロゴロ転がっているようなカムサツカや北樺太など、この辺一帯を行く行くはどうしても日本のものにするそうだと。日本のアレは支那や満洲ばかりでなしに、こっちの方面も大切だということだ。それにはこの会社が三菱などと一緒になって、政府をウマクつついているらしい。今度社長が代議士になれば、もっとそれをドンドンやるようだ。」

「それでさ、駆逐艦が蟹工船の警備に出動するといったところで、どうしてどうして、そればかりの目的でなくて、この辺の海、北樺太、千島の附近まで詳細に測量したり気候を調らべたりするのが、かえって大目的で、万一のアレに手ぬかりなくする訳だな。これア秘密だろうと思うんだが、千島の一番端の島に、コッソリ大砲を運んだり、重油を運んだりしているそうだと。」(94-95頁)

給仕は続けて漁夫たちに次のように話します。

「俺初めて聞いて吃驚したんだけどな、今までの日本のどの戦争でも、本当は——底の底を割ってみれば、みんな二人か三人の金持の(そのかわり大金持の)指図で、^{まっつけ}動機だけは色々こじつけて起したもんだとよ。何んしろ見込のある場所を手に入れたくて、手に入れたくてパタパタしてるんだそうだからな、そいつらは。——危いそうだと。」(95頁)

つまり、近い将来、ロシアと戦争になったときにカムサツカや北樺太などを日本の領土にするための準備が主目的だったのです。

第七章 漁夫の死

第七章では船医の立場と診断書、脚気の漁夫の死、その通夜と水葬が語られます。

船医の立場と診断書

『蟹工船』の物語の中で、私にとって最も印象的な出来事が二つあります。そのひとつがこの章で描写されている脚気の漁夫である山田君の死、その通夜と水葬です。悲痛な気持ちでいたまれなくなります。

病気になった漁夫や雑夫でさえ休むことができず、強制的に働かされていたということはすでに何度も話しました。また、「通じ」が4、5日もなくなった学生が医者に通じ薬をもらいに行った話を思い出してください。その学生は棚に帰ってからこう言いました。「そんなぜいたくな

薬なんて無いとよ。」ですから、彼らは病気になったときのために、あらかじめ出航前に薬屋から常備薬などを購入しなければなりません。

菓子折を背負った沖売の女や、薬屋、それに日用品を持った商人が入ってきた。真中の離島のように区切られている所に、それぞれの品物を広げた。(15・16 頁)

病気になったり、あるいは怪我をした漁夫や雑夫は船医に処方してもらったり、十分な手当で受けられなかったとしても、病状を証明する診断書を書いてもらえるのでしょうか。

よく危いことがあった。ボロ船のウインチは、脚気^{かっけ}の膝のようにギクシャクとしていた。ワイヤーを巻いている歯車の工合で、グイと片方のワイヤーだけが跛^{くんせいにしん}にのびる。川崎船が燻製^{くんせいにしん}鯨のように、すっかり斜めにブラ下がってしまうことがある。その時、不意を喰らって、下にいた漁夫がよく怪我をした。——その朝それがあった。「あッ、危い！」誰か叫んだ。真上からタタキのめされて、下の漁夫の首が胸の中に、杭のように入り込んでしまった。〔中略〕監督は蛇に人間の皮をきせたような奴だから何んとかキット難くせを「ぬかす」に違いなかった。その時の抗議のために診断書は必要だった。それに船医は割合漁夫や船員に同情を持っていた。(95・96 頁)

そう思って漁夫や雑夫は、せめて船医に診断書だけでも書いてほしいと頼むことにしました。というのも、この船医は彼らを今まで割と親切に診てくれていたからです。

「この船は仕事を^じして怪我をしたり、病気になったりするよりも、ひっぱたかれたり、たたきのめされたりして怪我したり、病気したりする方が、ずウツと多いんだからねえ。」と驚いていた。一々日記につけて後の証拠にしなければならない、といていた。それで、病気や怪我をした漁夫や船員などを割合に親切に見てくれていた。

診断書を作って貰いたいんですけども、一人が切り出した。

初め、吃驚^{びつくり}したようだった。

「さあ、診断書はねえ……。」

「この通りに書いて下さればいいんですが。」

はがゆかった。

「この船では、それを書かせないことになってるんだよ。勝手にそう決めたらしいんだが、……後々の^{ごご}ことがあるんでね。」

気の短い、吃りの漁夫が「チェッ！」と舌打ちをしてしまった。

「この前、浅川君になぐられて、耳が聞えなくなった漁夫が来たので、何気なく診断書を書いてやったら、飛んでもないことになってしまっただけ。——それが何時までも証拠になるんで、浅川君にしちゃね……。」

彼らは船医の室を出ながら、船医もやはりそこまで行くと、もう「俺たち」の味方でなかったことを考えていた。(96・97 頁)

第五章で次のように話しました。「前歯を折られて、一晩中「血の唾」をはいたり、過労で作業中に卒倒したり、眼から血を出したり、平手で滅茶苦茶に叩かれて、耳が聞えなくなったりした。」おそらく彼らも船医に診断書を書いてほしいと頼んだのではないかと思います。しかし、浅川は後々のことを考えて証拠になる診断書を書かせなかったのです。ただし、船医は後の証拠

にするために日記にはつけていたようです。

ここで「吃りの漁夫」と書かれていますが、かれはこの物語の中で最初にあだ名で呼ばれる漁夫です。この吃りの漁夫が最初に登場するのは第四章です。浅川が飴と鞭の策略によって過重な労働を強要しているときです。

憂々した気持が、もたれかかるように、そこへ雪崩れて行く。殺されかかっているんだ！皆はハッキリした焦点もなしに、怒りッぽくなっていた。

「お、俺だちの、も、ものにもならないのに、く、糞、こッ殺されてたまるもんか！」

吃りの漁夫が、自分でももどかしく、顔を真赤に筋張らせて、急に、大きな声を出した。

ちょっと、皆だまった。何かにグイと心を「不意に」突き上げられた——のを感じた。(60 頁)

この吃りの漁夫ははっきりとものを言う激しやすい性格のように思われます。

漁夫の死

ところで第三章と第五章で話しましたが、便所に監禁された雑夫宮口、ウインチに吊るされた雑夫、旋盤の鉄柱に縛りつけられた学生がいました。幸いにも彼らは死なず済んだようです。しかし、ついに死者が出ます。今まで死者が出なかったことがむしろ不思議に思えます。その経緯について詳しく話したいと思います。

前から寝たきりになっていた脚気の漁夫が死んでしまった。——二十七だった。東京、日暮里の周施屋から来たもので、一緒に仲間が十人ほどいた。しかし、監督は次の日の仕事に差支えるというので、仕事に出ていない「病気のものだけ」で、「お通夜」をさせることにした。(97 頁)

浅川は仲間の漁夫たちが少しの間、仕事を中断して通夜をすることさえ認めなかったのです。27 歳というこの若い漁夫はどういった状態で亡くなっていたのでしょうか。

湯灌をしてやるために、着物を解いてやると、身体からは、胸がムカーッとする臭気がきた。そして不気味な真白い、平べったい虱が周章ててゾロゾロ走り出した。鱗形に垢のついた身体全体は、まるで松の幹が転がっているようだった。胸は、肋骨が一つ一つムキ出しに出ていた。脚気がひどくなってから、自由に歩けなかったのも、小便などはその場でもらしたらしく、一面ひどい臭気だった。襦もシャツも赭黒く色が変わって、つまみ上げると、硫酸でもかけたように、ポロポロにくずれそうだった。臍の窪みには、垢とゴミが一杯につまって、臍は見えなかった。肛門の周りには、糞がすっかり乾いて、粘土のようにこびりついていた。(98 頁)

この状態からわかるかと思いますが、この若い漁夫は十分な栄養も摂れず、世話をされることもなく放置されていたのだと思います。他の漁夫たちが世話をしたいと思ってもそういう余裕もなく、また浅川がそれを認めるとは到底考えられません。湯灌というのは仏葬で遺体を棺に納める前に湯水で拭き清めることです。

この若い漁夫は死の直前どういう思いだったのでしょうか。

「カムサツカでは死にたくない。」——彼は死ぬ時そういったそうだった。しかし、今彼が命を落とすというとき、側にキット誰も見てやった者がいなかったかも知れない。そのカムサツカでは誰だって死にきれないだろう。漁夫たちはその時の彼の気持を考え、中には声をあげて泣いたものがいた。(98 頁)

この若い漁夫は「カムサツカでは死にたくない」と死の間際に言ったようですが、他の漁夫たちも同じ気持ちを共有していたと思います。彼らはみんな、カムサツカで死ぬことに極度の恐怖を抱いていたのです。そう読み取れる場面が他にも二つ挙げられます。

ひとつ目が、先ほどの吃りの漁夫が「お、俺だちの、も、ものにもならないのに、く、糞、こッ殺されてたまるもんか！」と言ったあとに、「カムサツカでア死にたくないな……。」と言う場面です（60-61 頁）。

ふたつ目が、過労が原因で心臓を悪くした漁夫について描写されている場面です。

過労から心臓を悪くして、身体が青黄く、ムクンでいる漁夫が、ドキッ、ドキッとくる心臓の音でどうしても眠れず、甲板の上ってきた。手すりにもたれて、フ糊でも溶かしたようにトロツとしている海を、ぼんやり見ている。この身体では監督に殺される。しかし、それにしてはこの遠いカムサツカで、しかも陸も踏めずに死ぬのは淋し過ぎる。（53-54 頁）

フ糊とは海産の紅藻類の一属で、煮て糊に用いられます。

亡くなった遺体に丁寧な湯灌をするのは死者に対する敬意だと思います。せめてそれだけでも許されるのでしょうか。

湯灌に使うお湯を貰いにゆくと、コックが、「可哀相にな。」といった。「沢山持って行ってくれ。随分、身体が汚れてるべよ。」

お湯を持って来る途中、監督に会った。

「何処へ持ってゆくんだ」

「湯灌よ」

というと、

「ぜいたくに使うな。」まだ何かいいげにして通って行った。

帰ってきたとき、その漁夫は、「あの時ぐらい、いきなり後から彼奴の頭に、お湯をブツかけてやりたくなった時はなかった！」といった。興奮して、身体をブルブル顫わせた。

監督はしつこく廻ってきては、皆の様子を見て行った。——しかし、皆は明日居睡りをしても、のめりながら仕事をして——例の「サボ」をやっても、皆で「お通夜」をしようということにした。そう決った。（98-99 頁）

このように気の毒な状態で亡くなった若い漁夫に対して、湯灌に使うお湯を「ぜいたくに使うな。」と言う浅川の冷酷無比な性格が露わに描写されています。繰り返しになりますが、船長や監督は毎日お湯に入っていました。しかし、それは濫費にはならなかったのです。自分たちは毎日風呂に入り、ぜいたくにお湯を使っているにもかかわらず、湯灌に使うお湯を節約させるのは誰にとっても納得がいかないと思います。

「明日居睡りをしても、のめりながら仕事をして——例の「サボ」をやっても、皆で「お通夜」をしようということにした。そう決った。」という文章、しかも「皆で」という言葉から読み取れるかと思いますが、仲間の死に直面してここではじめて連帯感、仲間意識が生じてくるように思われます。

第五章でも触れましたが、ここで「サボ」と言われているのはサボタージュのことで、怠業を

意味します。労働者側が行う争議行為の一種で、故意に正常の作業行程を遅延させ、雇い主側に経済的損害を与えることによって、要求の貫徹を図るものです。しかし、「例の」という言葉でわかるように、この段階では彼らはそこまでは考えていません。

通夜

通夜では、吃りが重大な誓いを立てます。

八時頃になって、ようやく一通りの用意が出来、線香や蠟燭ろうそくをつけて、皆がその前に坐った。監督はとうとう来なかった。船長と船医が、それでも一時間ぐらい坐っていた。片言のように——切れ切れに、お経の文句を覚えていた漁夫が「それでいい、心が通じる」そう皆にいわれて、お経をあげることになった。お経の間、シーンとしていた。誰か鼻をすすり上げている。終りに近くなるとそれが何人にも殖えて行った。

お経が終ると、一人一人焼香をした。それから坐を崩して、各々ひと一かたまり、一かたまりになった。仲間の死んだことから、生きている——しかし、よく考えてみればまるで危く生きている自分たちのことに、それらの話になった。船長と船医が帰ってから、吃りの漁夫が線香とローソクの立っている死体の側のテーブルに出て行った。

「僕はお経は知らない。お経をあげて山田君の霊を慰めてやることは出来ない。しかし僕はよく考えて、こう思うんです。山田君はどんなに死にたくなかったか、とな。——イヤ、本当のことをいえば、どんなに殺されたくなくなかったか、と。確かに山田君は殺されたのです。」

聞いている者たちは、抑えられたように静かになった。(99-100 頁)

吃りの漁夫の話は淡々としていますが、それを聞いている者は誰しも胸が詰まる思いだったに違いありません。かれは続けて話します。

「では、誰が殺したか？ ——いわなくたって分っているべよ！僕はお経でもって、山田君の霊を慰めてやることは出来ない。しかし僕らは、山田君を殺したものの仇かたきをとることによって、とることによって、山田君を慰めてやる事が出来るのだ。——この事を、今こそ、山田君の霊に僕らは誓わなければならないと思う……。」(100 頁)

吃りの漁夫が話しているように、この若い漁夫を殺したのは浅川たちです。そのことは言われなくても皆わかっています。

「仲間の死んだことから、生きている——しかし、よく考えてみればまるで危く生きている自分たちのことに、それらの話になった。」とあるように、彼らは、山田君がこのような悲惨な死に至ったことを実際に経験してはじめて自分たちの生命も危ういということを感じることになります。

吃りの漁夫は「僕らは」仇をとることを誓わなければならないと言っています。それでは、彼らはどのようにして仇をとるのでしょうか。それについては最後の章で話したいと思います。

水葬

山田君は次の日、水葬されることになります。先にも話しましたが、私にとってこの場面でのやり取りは最も印象に残っているひとつです。少し長いのですが、その描写を引用します。

次の朝、八時過ぎまで一仕事をしてから、監督のきめた船員と漁夫だけ四人下へ降りて行った。

お経を前の晩の漁夫に読んでもらってから、四人の外に、病気のもの三、四人で、麻袋に死体をつめた。麻袋は新しいものは沢山あったが、監督は、直ぐ海に投げるものに新しいものを使うなんてぜいたくだ、と行ってきかなかった。線香はもう船には用意がなかった。

「可哀相なもんだ。——これじゃ本当に死にたくなかったべよ。」

なかなか曲がらない腕を組合せながら、涙を麻袋の中に落した。

「駄目駄目。涙をかけると……。」

「何んとかして、函館まで持って帰られないものかな。……こら、顔をみれ、カムサツカのしゅっこい水さ入りたくねえっていつてるんでないか。——海さ投げられるなんて、頼りねえな……。」

「同じ海でもカムサツカだ。冬になれば——九月過ぎれば、船一艘も居なくなって、凍ってしまう海だ。北の北の端れの！」

「ん、ん。」——泣いていた。「それによ、こうやって袋に入れるっていうのに、たった六、七人でな。三、四百人もいるのによ！」

「俺たち、死んでからも、碌な目に合わないんだ……。」〔中略〕

そして、どんどん運び出されて、鮭か鱒の菰包みのように無雑作に、船尾につけてある発動機に積み込まれた。

「いいか——？」

「よオ——し……。」

発動機がバタバタ動き出した。船尾で水が掻き廻されて、アブクが立った。

「じゃ……。」

「じゃ。」

「左様なら。」

「淋しいけどな——我慢してな。」低い声でいつている。

「じゃ、頼んだど！」

本船から、発動機に乗ったものに頼んだ。

「ん、ん、分った。」

発動機は沖の方へ離れて行った。

「じゃ、な！……。」

「行ってしまった。」

「麻袋の中で、行くのはイヤだ、イヤだっしててるようでな……眼に見えるようだ。」

(102-103 頁)

新しい麻袋がたくさんあるにもかかわらず、あえて古い麻袋を使わせるというのは死者に対する冒瀆であるように思われます。ここでも浅川は「ぜいたく」という言葉を使っています。

しかも、船長が弔詞を読む約束になっていたにもかかわらず、それさえも許されませんでした。

「んでも、船長さんがその前に弔詞を読んでくれることになってるんだよ。」

「船長オ？ 弔詞イ？ ——」嘲けるように、「馬鹿！ そんな悠長なことしてれるか。」

悠長なことはしていられなかった。蟹が甲板に山積みになって、ゴソゴソ爪で床をならしていた。(102 頁)

ひとりの漁夫の「俺たち、死んでからも、碌^{ろく}な目に合わないんだ……。」という言葉には胸が詰まります。

脚気が原因で死んでしまうのは蟹工船だけではありません。第四章で話しましたが、「国道開拓」や「鉄道敷設」でも同様のことが起きていました。

脚気^{かっけ}では何人も死んだ。無理に働かせるからだった。死んでも「暇がない」ので、そのまま何日も放って置かれた。裏へ出る暗がりに、無雑作にかけてあるムシロの裾から、子供のように妙に小さくなった、黄黒く、艶^{つや}のない両足だけが見えた。

「顔に一杯^{はえ}蠅^{はえ}がたかっているんだ。側を通ったとき、一度にワーンと飛び上るんでないか！」
(65 頁)

「死んでも「暇がない」ので、そのまま何日も放って置かれた。」とあるように、ここでも労働者は仲間を世話をしたくても、それができなかったのです。

第八章 「赤化」と未組織労働者

第八章では船頭と平漁夫との対立、一致団結の兆し、「赤化宣伝」、「赤化運動」、未組織労働者の団結が語られています。

船頭と平漁夫との対立、一致団結の兆し

漁夫たちは水葬のことがあって以降、より足並みを揃えて「サボ」を続行します。当然、蟹の漁獲量は減っていくことになります。

表には何も出さない。気付かれないように手をゆるめて行く。監督がどんなに思いつ切り怒鳴り散らしても、タタキつけて歩いて、口答えもせず「おとなしく」している。それを一日置きに繰り返す。(初めは、おっかなびっくり、おっかなびっくりでしていたが。)——そういうようにして、「サボ」を続けた。水葬のことがあってから、モットその足並^{そろ}が揃ってきた。仕事の高は眼の前で減って行った。(104 頁)

漁獲高が減ると、その責任を負わされるのは船頭です。船頭は浅川から酷い目に遭わされます。それが原因で船頭と「サボ」をしている平漁夫たちの間に軋轢が生じます。

困ったのは、川崎の船頭だった。彼らは川崎のことでは全責任があり、監督^{ひらぎよふ}と平漁夫の間に居り、「漁獲高」のことでは、すぐに監督に当って来られた。それで何よりつらかった。結局三分の一だけ「仕方なしに」漁夫の味方をして、後の三分の二は監督の小さい「出店」——その小さい「〇」だった。(104-105 頁)

そこで船頭と平漁夫の間でちょっとした^{いさか}諍^{いさか}いが起きます。

こんなことがあった。——糞壺で、寝る前に、何かの話が思いがけなく色々の方へ移って行った。その時ひょいと、船頭が威張ったことをいってしまった。それは別に威張ったことではないが、「平」漁夫にはムツときた。相手の平漁夫が、そして、少し酔っていた。

「何んだって？」いきなり怒鳴った。^{てめ}「手前え、何んだ。あまり威張ったことをいわねえ方がええんだ。漁に出たとき、俺たち四、五人でお前えを海の中さタタキ落すぐらい朝飯前だんだ。——それッ切りだべよ。カムサツカだど。お前えがどうやって死んだって、誰が分るって！」

(105 頁)

このことがむしろ今まで屈従しか知らなかった漁夫たちを奮い立たせる契機となります。

しかし、こういうようなことは、調子よく跳ね上った空元気だけの言葉ではなかった。

それは今まで「屈従」しか知らなかった漁夫を、全く思いがけずに背から、とてつもない力で突きのめした。突きのめされて、漁夫は初め戸惑いをしたようにウロウロした。それが知られずにいた自分の力だ、ということを知らずに。(105-106 頁)

「それが知られずにいた自分の力だ、ということを知らずに。」という文章から読み取れるように、彼らは潜在的に持っている自分たちの力に気付きはじめます。漁夫たちはようやく浅川たちに反抗する気になってきます。そして、やろうと思えばできるという気持ちになってきます。

——そんなことが「俺たちに」出来るんだろうか？しかしなるほど出来るんだ。

そう分ると、今度は不思議な魅力になって、反抗的な気持が皆の心に喰い込んで行った。今まで、残酷極まる労働で搾り抜かれていた事が、かえってそのためにはこの上ない良い地盤だった。——こうなれば、監督も糞もあつたものでない！皆愉快がった。一旦この気持をつかむと、不意に、懐中電灯を差しつけられたように、自分たちの蛆虫そのままの生活がアリアリと見えてきた。

(106 頁)

漁夫たちは自分たちの今までの生活が蛆虫のような生活であったことを改めて思い知らされ、浅川たちに対する反抗的な気持が皆に強く共有されることとなります。単に過酷な労働ではなく、「残酷極まる労働」を強いられたことが、むしろその気持ちを押し進めることとなります。

こういった状況の中で常に決まった 3、4 人ほどが表に押し出されてきます。彼らの意見が皆と一致し、また皆もその通りに動くようになります。彼らというのは、学生上がり 2 人ほど、吃りの漁夫、「威張んな」の漁夫などです。ここでは登場しませんが、第九章で芝浦の漁夫が重要な役割を演じることとなります。

学生上りのひとりが、一晚中腹這いになって労働者「全体の問題」にするために船員も含めて漁夫、雑夫たちの責任者の図を発案します。そして、次のように呼びかけます。

「殺されたくないものは来れ！」——その学生上りの得意の宣伝語だった。毛利元就の弓矢を折る話や、内務省かのポスターで見たことのある「綱引き」の例をもってきた。「俺たち四、五人いれば、船頭の一人ぐらい海の中へタタキ落すなんか朝飯前だ。元気を出すんだ。」

「一人と一人じゃ駄目だ。危い。だが、あつちは船長から何からを皆んな入れて十人にならない。ところがこっちは四百人に近い。四百人が一緒になれば、もうこっちのものだ。十人に四百人！相撲になるなら、やってみろ、だ。」そして最後に「殺されたくないものは来れ！」だった。——どんな「ボンクラ」でも「飲んだくれ」でも、自分たちが半殺しにされるような生活をさせられていることは分っていたし、(現に、眼の前で殺されてしまった仲間のいることも分っている。)それに、苦しまぎれにやったチョコチョコした「サボ」が案外効き目があったので学生上りや吃りのいうことも、よく聞き入れられた。(108 頁)

第一章の冒頭で、「おい地獄さ行くんだで！」という印象的で衝撃的なせりふがありました。この「殺されたくないものは来れ！」という短い呼びかけも、私にとっては感動的なせりふです。

学生上りの「殺されたくないものは来れ！」という力強い呼びかけが転機となり、漁夫たちは一致団結して闘うこととなります。今までは皆、確かに強い反抗心は持っていましたが、しかし立ち上がろうと呼びかける者は誰もいませんでした。

なぜならば、最初に立ち上がって反抗するように主導することは、命がけで勇気がいることだからです。もし失敗すれば、その主導者たちはひどい目に合わされるかもしれません。その覚悟が必要です。できれば、誰かが矢面に立って犠牲になることを覚悟のうえで主導してくれたほうが自分を危険に晒すことがなく、しかも成功した場合には、それに乗っかることができます。確かに楽です。

しかし、誰かが立ち上がって闘わなければ、単に不平不満を言い募っていただけでは何の解決にもなりません。

そのためには同じ志を持った仲間が必要不可欠です。ここで私が想起するのは、少し大袈裟かもしれませんが、西郷隆盛の言葉です。

「命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は、仕抹に困るもの也。此の仕抹に困る人ならでは、^{かんなん}艱難を共にして国家の大業は成し得られぬなり。」（『新版 南州翁遺訓』西郷隆盛、角川ソフィア文庫改版、猪飼隆明訳・解説、2017年、158頁）

「赤化宣伝」、「赤化運動」、未組織労働者の団結

ところで、一週間ほど前の大嵐のときに、若い漁夫が「赤化宣伝」のパンフレットやビラをたくさん持ち帰ってきます。このことは彼らの今後の活動を後押しするものでした。第三章で触れましたが、ロシア人家族に救助された漁夫たちが「赤化」について話をしていたのを思い出してください。「やるよ、キットやるよ！」と彼らは誓っていました。そのときにはまだ、それほど自分たちのこととして受け止めていなかったように思えます。漁夫たちの中には「赤化宣伝」に反発を感じている者もないわけではありませんが、今度は自分たちのこととして真剣に「赤化運動」に関心を持ちはじめたように思われます。

一週間ほど前の大嵐で、発動機船がスクリュを^{こわ}壊してしまいました。それで修繕のために、雑夫長が下船して、四、五人の漁夫と一緒に陸へ行った。帰ってきたとき、若い漁夫がコッソリ日本語で印刷した「赤化宣伝」のパンフレットやビラを沢山持ってきた。「日本人が沢山こういうことをやっているよ。」といった。——自分たちの賃金や、労働時間の長さのことや、会社のゴッソリした金儲けのことや、ストライキのことなどが書かれているので、皆は面白がって、お互に読んだり、ワケを聞き合ったりした。しかし、中にはそれに書いてある文句に、かえって^{はんぱつ}反撥を感じて、こんな恐ろしいことなんか「日本人」に出来るか、というものがいた。

が、「俺アこれが本当だと思ふんだが。」と、ビラを持って学生上りのところへ^き訊きに来た漁夫もいた。

「本当だよ。少し話大きいもな。」……

漁夫たちは、飛んでもないものだ、といいながら、その「赤化運動」に好奇心を持ち出していた。(108-109頁)

漁夫たちが遭難して、ロシア人家族に救助されたときのことを思い起こしてください。

「船頭は、これが「赤化」だと思っていた。馬鹿に恐ろしいことをやらせるものだ。これで一

「この手でロシアが日本をマシマと騙すんだと思った。」と話しました。漁夫たちの中には赤化運動が恐ろしいことだと思っている者も少なからずいるのです。

「自分たちの賃金や、労働時間の長さのことや、会社のゴツソリした金儲けのことや、ストライキのことなどが書かれている」という文章からわかるかと思いますが、彼らは内地における賃金、労働時間、会社による搾取、ストライキなどについてさまざまな情報をパンフレットやビラから得ることができたようです。

ところで、会社はどのようにして漁夫たちを集めたのでしょうか。第一章でも話しましたが、「てんでんばらばらのものら」を集めたのです。

——そして、こういうてんでんばらばらのものらを集めることが、雇うものにとって、この上なく都合のいいことだった。(函館の労働組合は蟹工船、カムサツカ行の漁夫のなかに組織者を入れることに死物狂いになっていた。青森、秋田の組合などとも連絡をとって。——それを何より恐れていた。) (18 頁)

この第八章ではその理由がより詳しく叙述されています。つまり、会社にとって都合のいい「模範青年」を集めたのです。

——何時でも会社は漁夫を雇うのに細心の注意を払った。募集地の村長さんや、署長さんに頼んで「模範青年」を連れてくる。労働組合などに関心のない、いいなりになる労働者を選ぶ。「抜け目なく」万事好都合に！しかし、蟹工船の「仕事」は、今ではちょうど逆に、それらの労働者を団結——組織させようとしていた。いくら「抜け目のない」資本家でも、この不思議な行方までには気付いていなかった。それは、皮肉にも、未組織の労働者、手のつけられない「飲んだくれ」労働者をワザワザ集めて、団結することを教えてくれているようなものだった。(110 頁)

会社は細心の注意を払って未組織労働者である「模範青年」を集めたにもかかわらず、「残酷極まりない労働」によって、むしろ彼らに団結することを教えることになるのです。つまり自然発生的に組織化させることになるのです。小林自身もこのことを熟知しており、意図的に描いたことは明らかです。小林は蔵原惟人に宛てた手紙の中で次のように述べています。

「労働者を未組織にさせて置こうと意図しながら、資本主義は、皮肉にも、かえってそれを(自然発生的にも)組織させるということ。

資本主義は未開地、殖民地にどんな「無慈悲な」形態をとって侵入し、原始的な「搾取」を続け、官憲と軍隊を「門番」「見張番」「用心棒」にしながら、飽くことのない虐使をし、そして、如何に、急激に資本主義化するか、ということ。」(264-265 頁。『蟹工船・党生活者』小林多喜二、角川文庫、新装改版初版 2008 年、276 頁)

第九章 闘争への衝迫

第九章では監督のアセリ、吃りの漁夫と「威張んな」の漁夫との会話、芝浦の現状認識の会話を中心として物語が進行します。

監督のアセリ

浅川は例年に比べて蟹の漁獲量が減っているので周章ではじめます。

監督は周章あせりを出した。

漁期の過ぎてゆくその毎年の割に比べて、蟹の高はハッキリ減っていた。他の船の様子をきいてみても、昨年よりはもっと成績がいいらしかった。二千函は遅れている。——監督は、これではもう今までのように「お釈迦様」のようにしていたって駄目だ、と思った。

本船は移動することにした。監督は絶えず無線電信を盗みきかせ、他の船の網でもかまわずドンドン上げさせた。二十哩ほど南下して、最初に上げた渋網には、蟹がモリモリと網の目に足をひっかけてかかっていた。たしかに××丸のものだった。(110-111 頁)

浅川は他の船の網でも構わずに引き上げさせました。それによって仕事が急激に忙しくなります。このように他船の収穫を横取りするほどの破廉恥な人間です。それ以前にも浅川は他船の川崎船を盗んだこともありました。それほどあくどい人物です。

そして第 36 号川崎船はウインチで、博光丸のブリッジに引きあげられた。川崎は身体を空でゆすりながら、零をバジャバジャ甲板に落した。「一働きをしてきた」そんな大様な態度で、釣り上がって行く川崎を見ながら、監督が、

「大したもんだ。大したもんだ！」と、独言した。

網さばきをやりながら、漁夫がそれを見ていた。「何んだ泥棒猫！ チェンでも切れて、野郎の頭さたたき落ちればえんだ。」〔中略〕

すると、別な方のハッチの口から、大工が顔を出した。

「何んです。」

見当外れをした監督は、振り返ると、怒りッぽく、「何んです？ ——馬鹿。番号をけずるんだ。カンナ、カンナ。」

大工は分らない顔をした。

「あんぼんたん、来い！」

肩巾の広い監督のあとから、鋸の柄を腰にさして、カンナを持った小柄な大工が、びっこでも引いているような危い足取りで、甲板を渡って行った。——川崎船の第 36 号の「3」がカンナでけずり落されて、「第六号川崎船」になってしまった。

「これでよし。これでよし。うッはア、様見やがれ！」監督は、口を三角形にゆがめると、背のびでもするように哄笑した。(45-46 頁)

思い出してほしいと思います。第四章で触れましたが、浅川と雑夫長は「船員」と「漁夫、雑夫」との競争心を煽ることによって業績を上げようとしてしました。すでにその時から他船の無線を傍受して漁獲高を盗み聞きしていたのです。漁獲高が他船より負けていることを知ると、浅川はその時はまだ焦っている状態に過ぎませんでした。

無電係が、他船の交換している無電を聞いて、その収穫を一々監督に知らせた。それで見ると、本船がどうしても負けているらしい事が分ってきた。監督がアゼリ出した。(57 頁)

今回は「アゼリ出した」のではなく、「周章て出した」のです。浅川の切羽詰まった状況が読み取れます。浅川は今までの自分の振舞いを厚かましくも「お釈迦様」のような振舞いと言っています。実際は漁夫たちにとっては「地獄」そのものでした。今度は今まで以上に労働者を虐待することになります。浅川は工場の降り口に大きなピラを貼ります。

仕事を少しでも怠けたと見るときには大焼きを入れる。
組をなして怠けたものにはカムサツカ体操をさせる。

罰として賃銀棒引き、

函館へ帰ったら、警察に引き渡す。

いやしくも監督に対し、少しの反抗を示すときは銃殺されるものと思ふべし。

浅川監督

雑夫長 (111 頁)

浅川は以前に「飴」と「鞭」の策略によって漁夫、雑夫と船員たちを競争させましたが、今度は「鞭」、制裁だけの方法をとります。

しかも、浅川は常に銃を携帯し、威嚇のために銃を撃って意地悪く哄笑します。そして、漁夫たちはそれを目の当たりにして縮み上がり、「本当」に撃ち殺されるのではないかと常に不安で怯えていました。

監督は弾をつめっ放しにしたピストルを始終持っていた。飛んでもない時に、皆の仕事をしている頭の上で、鷗や船の何処かに見当をつけて、「示威運動」のように打った。ギョッとする漁夫を見て、ニヤニヤ笑った。それは全く何かの拍子に「本当」に打ち殺されそうな不気味な感じを皆にひらめかした。(112 頁)

また、水夫や火夫は船長の命令に従わなければならないにもかかわらず、浅川はそれを無視して彼らも動員します。

水夫、火夫も完全に動員された。勝手に使いまわされた。船長はそれに対して一言もいえなかった。船長は「看板」になってさえいれば、それで立派な一役だった。(112 頁)

現在でも労働者を使いまわしたり、使い潰したりする会社があるのではないのでしょうか。

吃りの漁夫と「威張んな」の漁夫との会話

このような極限的状況の中で、糞壺へ帰ってきた吃りの漁夫と「威張んな」の漁夫とのやり取りがあります。吃りの漁夫は機会を見計らって浅川たちに立ち向かう決意をしているように思えます。その支えとなるのが漁夫たちの心の中に充満している強い不平と不満です。

——「糞壺」に帰ってくると、吃りの漁夫は仰向けにでんぐり返った。残念で、残念で、たまらなかった。漁夫たちは、彼や学生などの方を気の毒そうに見るが、何もいえない程ぐっしゃりつぶされてしまっていた。学生の作った組織も反古のように、役に立たなかった。——それでも学生は割合に元気を保っていた。

「何かあったら跳ね起きるんだ。その代り、その何かをうまくつかむことだ。」といった。

「これでも跳ね起きられるかな。」——威張んなの漁夫だった。

「かな——？ 馬鹿。こっちは人数が多いんだ。恐れることはないさ。それに彼奴らが無茶なことをすればするほど、今のうちこそ内へ、内へともっているが、火薬よりも強い不平と不満が皆の心の中に、つまりにいいだけつまっているんだ。——俺はそいつを頼りにしているんだ。」

(113 頁)

「学生の作った組織」というのは、第八章で言及しましたが、何か問題が発生した場合にそれが全体に速やかに伝達されるための責任者の組織図のことを意味しています。

また、ここで使われている「跳ね起きる」という表現は、闘いに立ち上がることや覚悟を決めて行動を起こすという意味です。つまり、漁夫たちの覚悟が見て取れます。

ところが、「威張んな」は皆がそのような決意を持っているのかどうか不安に思っています。というのは、今度、事件が起きれば「生命がけ」の闘いとなるからです。「生命がけ」という言葉が口にされるのは、この一箇所だけです。

「道具立てはいいな。」威張んなは「糞壺」の中をグルグル見廻して、

「そんな奴らがいるかな。どれも、これも……………」

愚痴ッぽくいった。

「俺たちから愚痴ッぽかったら——もう、最後だよ。」

「見れ、お前^めえただけだ、元気のええのア。——今度事件起こしてみれ、生命がけだ。」

学生は暗い顔をした。「そうさ……………」といった。(113-114 頁)

そんななか、浅川は何か察したのか、糞壺に手下を潜り込ませます。

監督は手下を連れて、夜三回まわってきた。三、四人固まっていると、怒鳴りつけた。それでも、まだ足りなく、秘密に自分の手下を「糞壺」に寝らせた。

——「鎖」が、ただ、眼に見えないだけの違いだった。皆の足は歩くときには、^{インチぶと}吋太の鎖を現実に後に引きずっているように重かった。(114 頁)

芝浦の現状認識

ここで今度は芝浦の漁夫が自分たちの過酷な現状について次のように話します。

「俺ア、キット殺されるべよ。」

「ん。んでも、どうせ殺されるって分ったら、その時アやるよ。」

芝浦の漁夫が、

「馬鹿！」と、横から怒鳴りつけた。「殺されるって分ったら？ 馬鹿ア、何時だ、それア。——今、殺されているんでねえか。小刻みによ。^{あいつ}彼奴らはな、上手なんだ。ピストルは今にもうつように、何時でも持っているが、なかなかそんなへまはしないんだ。あれア「手」なんだ。——分るか。彼奴らは、俺たちを殺せば、自分らの方で損するんだ。目的は——本当の目的は、俺たちをウンと働かせて、縮木にかけて、ギイギイ搾り上げてしこたま儲けることなんだ。そいつを今俺たちは毎日やられてるんだ。——どうだ、この滅茶苦茶は。まるで蚕^{かいこ}に食われている桑の葉のように、俺たちの身体が殺されているんだ。」〔中略〕

「……いいか、まア仮りに金持が金を出して作ったから、船があるとしてもいいさ。水夫と火夫がいなかったら動くか。蟹が海の底に何億っているさ。仮りにだ、色々な仕度をして、ここまで出掛けてくるのに、金持が金を出せたからとしてもいいさ。俺たちが働かなかつたら、一匹の蟹だって、金持の懐に入って行くか。いいか、俺たちがこの一夏ここで働いて、それで一体どのぐらい金が入ってくる。ところが、金持はこの船一艘で純手取り四、五十万円って金をせしめるんだ。——さあ、んだら、その金の出所だ。無から有は生ぜじだ。——分るか。なア、皆んな俺

たちの力さ。——んだから、そう今にもお陀仏^{だぶつ}するような不景気な面してるなっていうんだ。うんと威張るんだ。底の底のことになれば、うそでない、あっちの方が俺たちをおっかながってるんだ、ビクビクすんな。

水夫と火夫がいなかったら、船は動かないんだ。——労働者が働かねば、ビター文だって、金持の懐にゃ入らないんだ。さっきいった船を買ったり、道具を用意したり、仕度をする金も、やっぱり他の労働者が血をしぼって、儲けさせてやった——俺たちからしぼり取って行きやがった金なんだ。——金持と俺たちとは親と子なんだ……。」(114-117頁)

ここで「芝浦」とあだ名で呼ばれている漁夫は、第四章ですでに登場しています。

「——今、殺されているんでねえか。」と芝浦の漁夫は言っていますが、漁夫たちはいつか殺されるのではなく、今すでに殺されているのです。

芝浦の漁夫は浅川の過酷な労働に対して当初から強い怒りを感じていました。

「飛んでもねえ所さ、しかし来たもんだな、俺も……。」その漁夫は芝浦の工場にいたことがあった。その話がそれから出た。それは北海道の労働者たちには「工場」だとは想像もつかない「立派な処」に思われた。「この百の一つぐらいのことがあったって、あっちじゃストライキだよ」といった。(63頁)

「この百の一つぐらいのことがあったって、あっちじゃストライキだよ」という芝浦の言葉から、彼が内地のまともな「工場」で働いており、しかも労働組合に関する知識も持っていたことが窺えます。つまり、かれもインテリゲンツィアだったのです。

「目的は——本当の目的は、俺たちをウンと働かせて、締木にかけて、ギイギイ搾り上げてしこたま儲けることなんだ。」「俺たちからしぼり取って行きやがった金なんだ。」と芝浦の漁夫は言っていますが、会社の目的は労働者からの搾取であって、彼らの人権など気にかけていません。

第十章 一致団結 —— 反逆と再起

第十章ではストライキ、「威張るな」と雑夫の演説、「要求条項」と「誓約書」、駆逐艦の水兵の乗船、再起の決意が語られています。

ストライキ

ある日大暴風^{おおしけ}にもかかわらず、浅川は船を出させました。前に「我慢の限界を超えるのは一体いつなのでしょう。」と私は問いかけました。そう、まさに今なのです。もう漁夫たちは黙っていられません。敢然と行動に出ます。

「あ、兎が飛んでる。——これア大暴風^{おおしけ}になるな。」

三角波が立ってきていた。カムサツカの海に慣れている漁夫には、それが直ぐ分る。

「危ねえ、今日休みだべ。」〔中略〕

「やめたやめた！」

「糞^{くろ}でも喰え、だ！」

誰かキッカケにそういうのを、皆は待っていたようだった。

肩を押し合って、「おい、引き上げるべ！」といった。

「ん。」

「ん、ん！」〔中略〕

次のウインチの下にも船夫たちは立ちどまったままでいた。彼らは第二号川崎の連中が、こっちに歩いてくるのを見ると、その意味が分った。四、五人が声をあげて手を振った。

「やめだ、やめだ！」

「ん、やめだ！」

その二つが合わさると、元気が出てきた。〔中略〕

吃りの漁夫が振りかえって、大声で呼んだ。「しっかりセッ！」

雪だるまのように、漁夫たちのかたまりがコブをつけて、大きくなって行った。皆の前や後を、学生や吃りが行ったり、来たり、しきりなしに走っていた。「いいか、はぐれないことだど！ 何よりそれだ。もう、大丈夫だ。もう——！」〔中略〕

「よオし、さ、仕事なんてやめるんだ！」

ロープをさっさと片付け始めた。「待ってたんだ！」

そのことが漁夫たちの方にも分った。二度、ワアーッと叫んだ。

「まず糞壺さ引きあげるべ。そうするべ。——非道え奴だ。ちゃんと大暴風になること分っていて、それで船を出させるんだからな。——人殺しだべ！」

「あつたら奴に殺されて、たまるけア！」

「今度こそ、覚えてれ！」

殆んど一人も残さないで、糞壺へ引きあげてきた。中には「仕方なしに」随いて来たものもいるにはいた。(117-120 頁)

「今度こそ、覚えてれ！」という言葉から、漁夫たちのかたい決意が読み取れます。「——非道え奴だ。ちゃんと大暴風になること分っていて、それで船を出させるんだからな。——人殺しだべ！」と漁夫は怒りを露わにしています。もはや我慢の限界を超えたのです。

これでストライキに突入していきます。しかし、漁夫、雑夫をはじめ火夫や水夫も含めて多くの労働者が一致団結して行動しなければ大きな効果を期待することができません。そこで、吃りの漁夫が火夫のいる機関室に行って呼びかけます。

「お前たちの方、お前たちですっかり一纏めにしてもらいたいんだ。」

「ん、分った。大丈夫だ。何時でも一つぐれえ、ブンなぐってやりてえと思ってる連中ばかりだから。」

——火夫の方はそれでよかった。(123 頁)

第四章で他船との競争において「船員」と「漁夫、雑夫」との競争心を煽ることによって、船員も虐使されていたことについて触れました。しかしこれまでは、主に漁夫や雑夫の地獄のような労働について話してきました。実際には火夫も同じような労働を強いられていたのです。火夫たちが賛同してストライキに参加するのも当然の成り行きです。

吃りの漁夫と学生が、機関室の縄梯子のようなタラップを下りて行った。急いでいたし、慣れていないので、何度も足をすべらして、危く、手で吊下った。中はボイラーの熱でムンとして、それに暗かった。彼らはすぐ身体中汗まみれになった。汽缶の上のストーヴのストロールのような上を渡って、またタラップを下った。下で何か声高にしゃべっているのが、ガン、ガ——ンと反響していた。——地下何百尺という地獄のような堅坑を初めて下りて行くような無気味さを

感じた。

「これもつれえ仕事だな。」

「んよ、それにまた、か、甲板さ引っぱり出されて、か、蟹たたきでも、さ、されたら、たまったもんでねえさ。」

「大丈夫、火夫も俺たちの方だ！」

「ん、大丈夫——夫！」(120-121 頁)

「んよ、それにまた、か、甲板さ引っぱり出されて、か、蟹たたきでも、さ、されたら、たまったもんでねえさ。」という吃りの言葉から火夫も地獄のような労働を強いられていたことが読み取れます。地獄という言葉が使われているのは、これが最後で4回目です。

あとは雑夫と水夫を説得し賛同を得て、ストライキに突入する準備をする必要があります。

雑夫たちは全部漁夫のところに連れ込まれた。一時間ほどするうちに、火夫と水夫も加わってきた。皆甲板に集った。「要求条項」は、吃り、学生、芝浦、威張んなが集ってきめた。それを皆の面前で、彼らにつきつけることにした。(123 頁)

ここで「威張んな」とあだ名で呼ばれている漁夫は、第八章ですでに登場しています。前に「今まで、残酷極まる労働で搾り抜かれていた事が、かえってそのためにはこの上ない良い地盤だった。」と話しましたが、この文章のあとに「威張んな」の性格が次のように描写されています。

——こうなれば、監督も糞もあつたものでない！皆愉快がった。一旦この気持をつかむと、不意に、懐中電灯を差しつけられたように、自分たちの蛆虫そのままの生活がアリアリと見えてきた。

「威張んな、この野郎」この言葉が皆の間で流行り出した。何かすると「威張んな、この野郎」といった。別なことにでも、すぐそれを使った。——威張る野郎は、しかし漁夫には一人もいなかった。(106 頁)

浅川たちは漁夫たちが騒ぎ出していることに気づくと、危険を感じてか、まったく姿を見せなくなりす。

「威張んな」と雑夫の演説

吃りの漁夫が皆に演説をします。とても力強く、感銘を受ける演説です。

「諸君、とうとう来た！ 長い間、長い間俺たちは待っていた。俺たちは半殺しにされながらも、待っていた。今に見ろ、と。しかし、とうとう来た。

諸君、まず第一に、俺たちは力を合わせることだ。俺たちは何があろうと、仲間を裏切らないことだ。これだけさえ、しっかりつかんでいけば、彼奴ら如きをモミつぶすは、虫ケラより容易いことだ。——そんならば、第二には何か。諸君、第二にも力を合わせることだ。落伍者を一人も出さないということだ。一人の裏切者、一人の寝がえり者を出さないということだ。たった一人の寝がえりものは、三百人の命を殺すという事を知らなければならぬ。一人の寝がえり……

(「分った、分った。」「大丈夫だ。」「心配しないで、やってくれ。)」……

俺たちの交渉が彼奴らをタタキのめせるか、その職分を完全につくせるかどうかは、一に諸君の団結の力に依るのだ。」(124 頁)

「力を合わせること」、「団結の力」という言葉から、私はジョージ・オーウェルの『動物農場』の物語を想起します。この小説でも同様のことが語られているからです。荘園農場の雄ぶたであるメージャー爺さんが集会で言う演説です。

「〈反乱〉あるのみ！〔中略〕遅かれ早かれ正義の裁きはなされるのだ〔中略〕未来の世代のものがたたかいをつづけて、ついに勝利をおさめることになるように。

そして、よいか、同志諸君、みんなの決意がゆらいでしまうことがけっしてないように。いかなる理屈によっても道を外れてはならない。〔中略〕完全な団結をはかり、また完全な連帯をもつて、たたかってゆくようにしよう。」（『動物農場』ジョージ・オーウェル、1945年、邦訳岩波文庫、川端康夫訳、2009年、15-16頁、傍点筆者）

団結しなければならない時に、落伍者、裏切者、寝返りは必ずと言っていいほど出てくるものです。しかし、そのような者がいたら闘いに成功することは困難だと思います。

これに続いて火夫と水夫の代表が演説をしました。そして、最後に 15、6 歳の少年である雑夫が演説をします。私はこの物語の中で印象深かった場面が二つあると言いました。二つ目がまさにこの演説です。

「皆さん、私たちは今日の来るのを待っていたんです。」——壇には一五、六歳の雑夫が立っていた。「皆さんも知っている、私たちの友達がこの工船の中で、どんなに苦しめられ、半殺しにされたか。夜になって薄ッぺらい布団に包まってから、家のことを思い出して、よく私たちは泣きました。ここに集っているどの雑夫にも聞いてみて下さい。一晚だって泣かない人はいないのです。そしてまた一人だって、身体に生キズのないものはいないのです。もう、こんな事が三日も続けば、キット死んでしまう人もいます。——ちょっとでも金のある家ならば、まだ学校に行けて、無邪気に遊んでいれる年頃の私たちは、こんなに遠く……（声がかすれる。吃り出す。抑えられたように静かになった。）しかし、もういいんです。大丈夫です。大人の人に助けて貰って、私たちは憎い憎い、彼奴らに仕返ししてやる事が出来るのです……。」

それは嵐のような拍手を惹き起した。手を夢中にたたきながら、眼尻を太い指先きで、ソツと拭っている中年過ぎた漁夫がいた。（125-126頁）

雑夫たちはまだ 15、6 歳の少年です。精神的にも肉体的にも浅川たちに歯向かうことができなかつたのも肯けます。しかし、彼らには助けてくれる大人がいるのです。漁夫、火夫、水夫、雑夫の演説によって一致団結し闘うことが決まりました。

「要求条項」と「誓約書」

吃り、学生、芝浦、「威張んな」によってすでに要求条項は決められており、300 人の誓約書の作成にすぐに取りかかることになります。

学生や、吃りは、皆の名前をかいた誓約書を廻して、捺印を貰って歩いた。

学生二人、吃り、威張んな、芝浦、火夫三名、水夫三名が、「要求条項」と「誓約書」を持って、船長室に出掛けること、その時には表で示威運動をすることが決った。——陸の場合のように、住所がチリチリバラバラになっていないこと、それに下地が充分にあったことが、スラスラと運ばせた。ウソのように、スラスラ纏った。〔中略〕

三百人は吃りの音頭で、一斉に「ストライキ万歳」を三度叫んだ。(126 頁)

「三百人は吃りの音頭で、一斉に「ストライキ万歳」を三度叫んだ。」とあります。覚えているかと思いますが、吃りの漁夫は 27 歳の漁夫の通夜の時に仇をとることを誓いました。

「僕は、山田君を殺したものの仇をとることによって、とることによって、山田君を慰めてやる事が出来るのだ。——この事を、今こそ、山田君の霊に僕らは誓わなければならないと思う……。」(100 頁)

今こそその仇をとる時なのです。しかし、果たして本当に仇をとることができるのでしょうか。彼らが船長室に押し掛けると、浅川はなぜか落ち着き払っています。不気味です。何か企んでいるようにも見えます。かれは要求条項と誓約書をチラチラ見ながら返事をします。

ところで、要求条項の内容はどのようなものなのでしょうか。作品の中ではまったく言及されていません。しかし、「むすびにかえて」で触れますが、この作品は 1953 年に山村聡監督によって映画化されており、その中で具体的な要求条項が読み上げられています。

「ひとつ、作業時間を決めて交代制にしてもらいたい。」

「ひとつ、病人や怪我人は仕事を休ませてくれ。ひどい者は中積船に送り戻して手当てをしてやってくれ。」

「ひとつ、船医のカタオカさん呼び戻すこと。」

「ひとつ、風呂もそうだが、飯ももっと衛生的にしてほしい。」

「やることは一生懸命やるから、引っ叩いたり、焼き入れや便所へ監禁はやめてください。」

「ひとつ、死んだテラウチとハヤシ、怪我で死んだシマダヨウイチには十分に手当金を出してもらいたい。どんな処遇になっているか、それもよく聞かせてもらいたい。」

「賞与や封一金は十分に出してもらいたい。」

漁夫たちの要求条項は当たり前の要求であり、法外な要求は一切ありませんでした。

船長、雑夫長、工場代表……などが、今までたしかに何か相談をしていたらしいことがハッキリ分るそのままの恰好で、迎えた。監督は落付いていた。

入ってゆくと、

「やったな。」とニヤニヤ笑った。外では、三百人が重なり合って、大声をあげ、ドタ、ドタ足踏みをしていた。監督は「うるさい奴だ！」とひくい声でいった。が、それらには気もかけない様子だった代表が興奮していうのを一通りきいてから、「要求条項」と、三百人の「誓約書」を形式的にチラチラ見ると、

「後悔しないか。」と、拍子抜けするほど、ゆっくりいった。

「馬鹿野郎っ！」吃りがいきなり監督の鼻ッ面を殴りつけるように怒鳴った。

「そうか、いい。——後悔しないんだな。」

そういって、それからちょっと調子をかえた。「じゃ、聞け。いいか。明日の朝にならないうちに、色よい返事をしてやるから。」——だが、いうより早かった、芝浦が監督のピストルをタタキ落すと、拳骨で頬をなぐりつけた。〔中略〕

「色よい返事だ？ この野郎、フザけるな！ 生命にかけての問題なんだ！」

芝浦は巾の広い肩をけわしく動かした。水夫、火夫、学生が二人をとめた。船長室の窓が凄

音を立てて壊れた。その瞬間、「殺しちまい!」「打ッ殺せ!」「のせ! のしちまえ!」外からの叫び声が急に大きくなって、ハッキリ聞えてきた。——何時の間にか、船長や雑夫長や工場代表が室の片隅の方へ、固まり合って棒杭ぼうくわいのようにつつ立っていた。顔の色がなかった。

ドアーを壊して、漁夫や、水、火夫が雪崩なだれ込んできた。(127-128 頁)

船長室の外には 300 人が重なり合って大声を上げ、ドタドタ足踏みをしていました。ここで重要なのは、代表者たちを支えている 300 人もの労働者が団結してその場にいたという事実です。ここまできると、もはや反抗ではなく、反逆・暴動と言えるかもしれません。これによって浅川たちは窮地に追い込まれたかに見えます。

しかし、浅川の言う「色よい返事」とは一体何を意味するのでしょうか。一般的には期待通りの返事や好意的な返事を意味しますが、そうなのでしょう。信頼できる人間ではありません。

その後、漁夫たちは自分たちの「手」で「監督をたたきのめす!」ことができたと確信し、ウキウキした気持ちで騒いでいました。

昼過ぎから、海は大嵐になった。そして夕方近くになって、だんだん静かになった。

「監督をたたきのめす!」そんなことがどうして出来るもんか、そう思っていた。ところが! 自分たちの「手」でそれをやってのけたのだ。普段おどかし看板さかにしていたピストルさえ打てなかったではないか。皆はウキウキと噪さわいでいた。(128 頁)

さすがに浅川も怯ひろんでしまったのでしょうか。

駆逐艦の水兵の乗船

薄暗くなった頃、博光丸に近寄って来る駆逐艦に漁夫たちは気付きました。彼らはそれを見てどう思ったのでしょうか。

薄暗くなった頃だった。ハッチの入口で、見張りをしていた漁夫が、駆逐艦がやってきたのを見た。——周章あわてて「糞壺くそつぼ」に駆け込んだ。

「しまった!!」学生の一人がバネのようにはね上がった。見る見る顔の色が変わった。

「感違いするなよ。」吃りが笑い出した。「この、俺たちの状態や立場、それに要求などを、士官たちに詳しく説明して援助をうけたら、かえってこのストライキは有利に解決がつく。分りきったことだ。」

外のものも、「それアそうだ。」と同意した。

「我帝国の軍艦だ。俺たちの味方だろう。」

「いや、いや……」学生は手を振った。よほどショックを受けたらしく、唇を震わせている。言葉が吃った。

「国民の味方だって?……いやいや……。」

「馬鹿な!——国民の味方でない帝国の軍艦、そんな理窟なんてあるはずがあるか!?!」

「駆逐艦が来た!」「駆逐艦が来た!」という興奮が学生の言葉を無理矢理にもみ潰してしまっただ。皆はドヤドヤと「糞壺」から甲板にかけ上った。そして声を揃えていきなり、「帝国軍艦万歳」を叫んだ。(129-130 頁)

「しまった!!」という驚きの叫びからもわかるかと思いますが、ひとりの学生は駆逐艦が敵だ

と咄嗟に気付きます。しかし、吃りをはじめ他の漁夫たちは味方だと確信しているように思えます。実際、彼らがそう思うのは無理ありません。なぜかと言えば、「あっちへ行っても始終我帝国の軍艦が我々を守っていてくれることになっているのだ」と浅川に聞かされていたからです。しかも彼らは、駆逐艦をよく見かけていたからです。

甲板で仕事をしていると、よく水平線を横切って、駆逐艦が南下して行った。後尾に日本の旗がはためくのが見えた。漁夫らは興奮から、眼に涙を一杯ためて、帽子をつかんで振った。——あれだけだ。俺たちの味方は、と思った。

「畜生、あいつを見ると、涙が出やがる。」

だんだん小さくなって、煙にまつわって見えなくなるまで見送った。(77-78 頁)

「畜生、あいつを見ると、涙が出やがる。」と自然に思えるほど、彼らは駆逐艦だけが自分たちの味方だと思い込んでいたのです。つまり、彼らは自分たちを「護衛」してくれるものと思っていたのです。

第六章で話しましたが、士官連が博光丸に来て、船長、工場代表、監督、雑夫長と宴会をしていたのを思い起こしてください。次の日の午後、船長や監督らは缶詰を 2 人の船員に持たせて発動機船で駆逐艦に出かけて行きました。漁夫や雑夫がそれを「嫁行列」でも見るように見えました。この場面でも漁夫が駆逐艦を自分たちの味方だと思い込んでいることが窺えます。

「何やるんだか、分かったもんでねえな。」

「俺たちの作った缶詰ば、まるで糞紙よりも粗末にしやがる！」

「しかしな……」中年を過ぎかけている、左手の指が三本よりない漁夫だった。「こんなところまで来て、ワザワザ俺たちば守ってけるんだもの、ええさ——な。」(93 頁)

漁夫たちが糞壺から甲板に上がってきたときにはすでに、タラップの昇降口に顔と手に包帯をした監督や船長が立っています。吃り、芝浦、威張んな、学生、水夫、火夫らが彼らに向かい合っ立っています。駆逐艦から 3 艘の汽艇が出て博光丸に横付けになっています。そして、水兵が乗船してきます。

あ、叫ッ！ 着剣をしているではないか！ そして帽子の顎紐をかけている！

「しまった！」そう心の中で叫んだのは、吃りだった。

次の汽艇からも十五、六人。その次の汽艇からも、やっぱり銃の先きに、着剣した、顎紐をかけた水兵！ それらは海賊船にでも躍り込むように、ドカドカッと上ってくると、漁夫や水、火夫を取り囲んでしまった。

「しまった！ 畜生やりやがったな！」

芝浦も、水、火夫の代表も初めて叫んだ。

「ざま、見やがれ！」——監督だった。ストライキになってからの、監督の不思議な態度が初めて分った。だが、遅かった。

「有無」をいわせない。「不届者」「不忠者」「露助の真似する売国奴」そう罵倒されて、代表の九人が銃剣を擬されたまま、駆逐艦に護送されてしまった。それは皆がウケが分らず、ぼんやり見とれている、その短い間だった。全く有無をいわせなかった。——一枚の新聞紙が燃え

てしまうのを見ているより、他愛なかった。

——簡単に「片付いてしまった。」(130-131 頁)

吃りの漁夫は駆逐艦が味方であることにはじめは疑いを持っていませんでしたが、「叫ッ！^あ着剣^{つけけん}をしているのではないか！そして帽子の顎紐^{あごひも}をかけている！「しまった！」そう心の中で叫んだのは、吃りだった。」と書かれているように、今それが大きな間違いだと気づかされるのです。「しまった！ 畜生やりやがったな！」と芝浦の漁夫たちが叫んでいます。その理由は水兵が着剣と顎紐をし、彼らを取り囲んでいたからです。着剣というのは戦闘に備えて小銃の先に銃剣をつけることです。

その後、代表の 9 人は駆逐艦に護送されてしまいます。これが最後の、そして最大の「見せしめ」と言えるかもしれません。

最初から薄々感じ取られていたかもしれませんが、駆逐艦は労働者の味方ではなく、そもそも会社の味方だったのです。

先ほど話しましたが、浅川は 2 回「後悔しないか」と念を押して聞いています。しかも、実は 1 回目は拍子抜けするほどゆっくり言いました。何か企んでいる様子に見えました。これで「色よい返事」の意味がわかったかと思えます。

あの宴会は士官連に対する接待であり、船長、工場代表、監督、雑夫長、つまり会社、資本家と彼らは癒着していたのです。このことは出航前の次の描写ですでに示唆されていました。

糊^{のり}のついた真白い、上衣^{うわぎ}の丈^{たけ}の短い服を着た給仕^{ボーイ}が、「とも」のサロンに、ビール、果物、洋酒のコップを持って、忙しく往き来していた。サロンには、「会社のオツかない人、船長、監督、それにカムサツカで警備^{くわくかん}の任^{おんたい}に当る駆逐艦の御大、水上警察の署長さん、海員組合^{おりかほん}の折^{おり}鞆^{かほん}」がいた。

「畜生、ガブガブ飲むったら、ありゃしない。」——給仕はふくれかえていた。(18 頁)

「とも」という言葉は船尾を意味しています。

第六章で話しましたが、彼らが宴会をしていた場面をもう一度思い起こしてください。

「士官や船長や監督の話だけれどもな、今度ロシアの領海へこっそり潜入して漁をするそうだど。それで駆逐艦がしっきりなしに、側にいて番^{ばん}をしてくれるそうだ——大部、コレやってるらしいな。(拇指^{おやゆび}と人差指^まで円^まくしてみせた。)」

浅川たちは士官連に賄賂を渡していたように読み取れます。労働者が反乱を起こした場合に備えて、接待などをして自分たちの味方にしてたのではないのでしょうか。

再起の決意

代表の 9 人が駆逐艦に護送されてはじめて彼ら労働者全員が自分たちの置かれている状況を痛感することになります。

「俺たちには、俺たちしか、味方が無えんだな。始めて分った。」

「帝国軍艦だなんて、大きな事をいったって大金持の手先^ねでねえか、国民の味方？ おかしいや、糞喰らえだ！」

水兵たちは万一を考えて、三日船にいた。その間中、上官連は、毎晩サロンで、監督たちと一緒に酔払っていた。——「そんなものさ。」

いくら漁夫たちでも、今度という今度こそ、「誰が敵」であるか、そしてそれらが（全く意外にも！）どういう風に、お互が繋がりが合っているか、ということが身をもって知らされた。〔中略〕

「俺たちには、俺たちしか味方が無えんだ。」

それは今では、皆の心の底の方へ、底の方へ、と深く入り込んで行った。——「今に見ろ！」
(131-132 頁)

「俺たちには、俺たちしか、味方が無えんだな。始めて分った。」「俺たちには、俺たちしか味方が無えんだ。」という同じ言葉が2回繰り返されています。この事実に彼らは今ようやく直面したのです。そして、その「敵」が相互にどのように繋がっているのかも見透かされたのです。しかし、「今に見ろ！」という言葉からも窺えるように、諦めずに再び立ち上がるのだという彼らの気概も感じ取られます。

吃りの漁夫が演説で、「俺たちの交渉が彼奴らをタタキのめせるか、その職分を完全につくせるかどうかは、一に諸君の団結の力に依るのだ。」と言いました。しかし、ストライキは惨めにも失敗に終わりました。結局、亡くなった若い漁夫の仇をとることができなかったのです。

その後、上官たちが毎晩サロンで監督たちと一緒に酔っぱらっている間中、漁夫たちは「献上品」を作っていました。「献上品」というのは天皇家に差し上げる品物のことです。

毎年の例で、漁期が終りそうになると、蟹缶詰の「献上品」を作ることになっていた。しかし「乱暴にも」何時でも、別に齋戒沐浴して作るわけでもなかった。そのたびに、漁夫たちは監督をひどい事をするものだ、と思って来た。——だが、今度は異ってしまっていた。

「俺たちの本当の血と肉を搾り上げて作るものだ。フン、さぞうめえこったろ。食ってしまっ
てから、腹痛でも起さねばいいさ。」

皆そんな気持で作った。

「右ころでも入れておけ！ かまうもんか！」(131-132 頁)

齋戒沐浴というのは、神仏に祈ったり、神聖な仕事に従事するのに先立ち飲食や行動を慎み、水を浴びて心身を清めることを言います。

話が少し逸れてしましますが、この文章をめぐる後に事件が発生します。小林は小樽警察に呼ばれて尋問されましたが、1931年に治安維持法違反で投獄されたときに、この点で不敬罪の追起訴を受けました（『蟹工船 一九二八・三・一五』岩波文庫、2003年、「解説」蔵原惟人、269-270頁）。

このストライキ事件をきっかけに浅川は今まで以上によりいっそう過酷な労働を強制することになります。

しかし「今に見ろ」を百遍繰り返して、それが何になるか。——ストライキが惨めに敗れ
てから、仕事は「畜生、思い知ったか」とばかりに、過酷になった。それは今までの過酷にもう一つ更に加えられた監督の復讐的な過酷さだった。限度というものの一番極端を越えていた。——今ではもう仕事は堪え難いところまで行っていた。(132 頁)

前に、「人間の身体には、どの位の限度があるか、しかしそれは当の本人よりも監督の方が、よく知っていた。」と話しましたが、それをさらに超える過酷な労働を強制したのです。

ところで、彼らの団結は十分だったのでしょうか。何か反省すべき点があったのでしょうか。そしてまた、彼らにはまだ希望が残されているのでしょうか。

「——間違っていた。ああやって、九人なら九人という人間を、表に出すでなかった。まるで、俺たちの急所はここだ、と知らせてやっているようなものではないか。俺たち全部は、全部が一緒になったという風にやらなければならなかったのだ。そしたら監督だって、駆逐艦に無電は打てなかったろう。まさか、俺たち全部を引き渡してしまうなんて事、出来ないからな。仕事が、出来なくなるもの。」

「そうだな。」

「そうだよ。今度こそ、このまま仕事していたんじゃ、俺たち本当に殺されるよ。犠牲者を出さないように全部で、一緒にサボルことだ。この前と同じ手で。吃りがいったでないか、何より力を合わせることで。それに力を合わせたらどんなことが出来たか、ということも分っているはずだ。」〔中略〕

「ん、もう一回だ！」

そして、彼らは、立ち上がった。——もう一度！（132-134 頁）

確かに、「今に見ろ」を百遍繰り返して、それが何になるか。」と言っているように、単なる思いだけでは物事を変革することはできないと思います。しかし、「もう一回だ！」「もう一度！」という行動を伴う言葉は、我々に勇気と希望を与えてくれます。再起するのです。思想だけで世の中を変えることは容易ではありません。それを変革するためには団結して行動することが不可欠です。

ここで私が想起するのは『共産党宣言』の末尾の有名な呼びかけです。

共産主義者は、自分の見解や意図を秘密にすることを軽べつする。共産主義者は、これまでのいっさいの社会秩序を強力的に顛覆することによってのみ自己の目的が達成されることを公然と宣言する。支配階級よ、共産主義革命のまえにおののくがいい。プロレタリアは、革命においてくさりのほかに失うべきものをもたない。かれらが獲得するものは世界である。

万国のプロレタリア団結せよ！（『共産党宣言』マルクス・エンゲルス、1848年、邦訳岩波文庫改版、大内兵衛・向坂逸郎訳、2007年、97-98頁）

『蟹工船』のその後のことについては、この物語の最後に附記として、2、3付け加えられています（134-135頁）。結末はあえて話さないことにします。

しかし、下の者に対しては傲慢で横柄な態度をとり、上の者に対しては媚び諂う浅川はどうなるのでしょうか。所詮、浅川も会社にとっては歯車のひとつ、つまり一労働者にすぎないのでしょ

うか。作品では言及されていませんが、映画ではその冒頭で、会社の重役に高級幹部や高級船員が利用できる船室に呼び出された浅川は次のように言われます。

「とにかく我々の会社としても今年こそは伸るか反るかの一番勝負。全信頼を君ひとりにかけておる。この博光丸の全責任が君ひとりにかかるとるんだからな。」

浅川のその後を想像してみるのも興味深いと思います。

「はじめに」でも言いましたが、今まで話したことはあくまでも私の解釈です。現在の労働問

題を考えるためにも、『蟹工船』の原典をぜひ読んでいただければと思います。

むすびにかえて

わが国における資本主義の黎明期に彼らのような労働者の犠牲があったからこそ今の日本があることを忘れてはならないと思います。『蟹工船』をはじめ、わが国のプロレタリア文学を改めて読み返すことによって、現代社会のさまざまな矛盾を再認識できるのではないのでしょうか。

現在、行き過ぎた資本主義が世界的な規模で格差拡大などさまざまな深刻な問題を引き起こしています。今こそマルクスの『資本論』などを読むことによって、問題解決への示唆を得ることができるかもしれません。

私は今でもベルリンを訪れる度に必ずフンボルト大学に立ち寄ります。はじめて行ったのは30代の前半だったかと思います。フンボルト大学本館の入り口にある正面階段の踊り場の壁に書かれている次の言葉を見たときに深く考えさせられたことを今も鮮明に覚えています。

Die Philosophen haben die Welt nur verschieden interpretiert, es kommt aber darauf an, sie zu verändern. Karl Marx (「哲学者たちは世界をさまざまに解釈したにすぎない。しかし、重要なことは世界を変革することである。」カール・マルクス)

この言葉はフリードリヒ・エンゲルス『フォイエルバッハ論』の付録「フォイエルバッハにかんするテーゼ」(カール・マルクス)の中に見い出される11番目のテーゼです(『フォイエルバッハ論』フリードリヒ・エンゲルス、1888年、邦訳岩波文庫、松村一人訳、1960年、90頁)。

『蟹工船』は戦後になって映画化されました。脚本・監督は山村聡で、1953年の作品です。森雅之、日高澄子、中原早苗、若原春江、河原崎しづ江、河野秋武、森川信、花沢徳衛、浜村純、平田未喜三、脚本・監督の山村聡が出演しています。

先に触れましたが、この小説は軍国主義下の戦前には映画化が不可能とされていました。山村聡はその第一回監督作品としてこの映画で、激動の人間像をわが国初の海洋スペクトルの中にモノクロ映画であるにもかかわらず(むしろだからこそ)、ダイナミックに描き上げました。第8回毎日映画コンクールで撮影賞を受賞しました。

戦前の蟹工船は地獄船ともいわれ、鉱山などが「陸のタコ部屋」と呼ばれたのに対し、「海のタコ部屋」と呼ばれ、そこでは極度な奴隷労働が強いられました。消耗品扱いの過酷で非人間的な労働を漁夫たちは強いられます。不法、暴力と脅しに耐えかね、彼らはついに立ち上がります。しかし、待っていたのは国家による徹底的な圧殺でした。戦う人々を描き続けた小林多喜二もまた、戦前の特高警察に捕らえられ残虐な拷問を受けて亡くなりました。

私はこの映画を何度も観ましたが、そのリアリティーにとっても感銘を受けました。まるでドキュメンタリーを観ているようで、俳優の自然な演技に圧倒されました。多少の脚色はありますが、この作品は原作にほぼ忠実に描かれており、過酷な労働の実態がよくわかるかと思います(『蟹工船—かにこうせん—』DVD、制作：現代ぷろだくしょん、販売元：WORLD BELL Co.,Ltd.、2008年、解説参照)。ただし、結末が原作とは異なっています。ぜひ、鑑賞してみてください。

ところで、権利ないし法は闘争において闘い取られるものです。ドイツの法学者ルードルフ・フォン・イェーリングが『権利のための闘争』(1872年)の冒頭で主張していることは『蟹工船』にも当てはまるのではないのでしょうか。

我々の歴史を振り返ってみると、それは階級闘争の歴史であると言えるかもしれません。そし

て、この『蟹工船』の時代はまさにブルジョアとプロレタリアの階級闘争が激化していく時代だったと思います。ここで想起されるのは、やはり『共産党宣言』第一章「ブルジョアとプロレタリア」の冒頭の文章です。

「今日まであらゆる社会の歴史は、階級闘争の歴史である。

自由民と奴隷、都市貴族と平民、領主と農奴、ギルドの親方と職人、要するに圧制者と被圧制者はつねにたがいに対立して、ときには暗々のうちに、ときには公然と、不断の闘争をおこなってきた。この闘争はいつも、全社会の革命的改造をもって終わるか、そうでないときには相闘う階級の共倒れをもって終わった。……

しかしわれわれの時代、すなわちブルジョア階級の時代は、階級対立を単純にしたという特徴をもっている。全社会は、敵対する二大陣営、たがいに直接に対立する二大階級——ブルジョア階級とプロレタリア階級に、だんだんとわかれていく。」（『共産党宣言』マルクス・エンゲルス、1848年、邦訳岩波文庫改訂版、大内兵衛・向坂逸郎訳、1971年、38-40頁）

イエーリングは次のように述べています。ここで権利=法^{レヒト}というのはドイツ語のRecht^{レヒト}です。この言葉は権利と法の両方の意味を持っています。また、正義という意味もあります。

「権利=法^{レヒト}の目標は平和であり、そのための手段は闘争である。権利=法が不法による侵害を予想してこれに対抗しなければならぬかぎり——世界が滅びるまでその必要はなくなるのだが——権利=法にとって闘争が不要になることはない。権利=法の生命は闘争である。諸国民の闘争、国家権力の闘争、諸身分の闘争、諸個人の闘争である。

世界中のすべての権利=法は闘い取られたものである。重要な法命題はすべて、まずこれに逆らう者から闘い取られねばならなかった。また、あらゆる権利=法は、一国民のそれも個人のそれも、いつでもそれを貫く用意があるということを前提としている。権利=法は、単なる思想ではなく、生き生きした力なのである。」（『権利のための闘争』イエーリング著、1872年、邦訳岩波文庫、村上淳一訳、1982年、29頁）

ですから、臆病や不精や怠惰によって漫然と不法を甘受すべきではありません。私たちは自分の権利があからさまに軽視され蹂躪されたときには、その権利の目的物が侵されるにとどまらず、自己の人格までもが脅かされるということを理解し、そのような状況において自己を主張し、正当な権利を主張する衝動に駆られなければならないと思います（同上、13、15頁）。

イエーリングがこの著作の序文で主張していることは、現在でも重要だと思います。

「この本の〔中略〕目的は本来、理論的というよりは倫理的・実践的なものであり、権利=法^{レヒト}の学問的認識の深化をめざすというよりは権利=法に窮極の力を与える心的態度^{かんきょう}の涵養、つまり権利感覚を大胆に発揮して屈しない態度の涵養をめざすものである。」（同上、9頁）

しかし、イエーリングは何事においても常に権利を主張し、訴えるべきであると言っているではありません。イエーリングは次のように述べています。

「私はどんな争いにおいても権利のための闘争を行なえと要請しているわけではなく、権利に対する攻撃が人格^{べつし}の蔑視を含む場合にのみ闘争に立ち上ることを求めているのである。譲

歩と宥和^{ゆうわ}の気持ち、寛大さと穏やかさ、和解とか権利の主張の断念とかいったことについては、私の理論も十分にその意義を認めている。」(同上、15頁)

「はじめに」でも述べましたが、私自身がとても感銘を受け考えさせられた映画が多数あります。その中でも次の3つの作品をぜひ観ていただければと思います。いずれの作品も労働問題を取り扱った名作です。

第一に、文豪ジョン・スタインベック原作、監督ジョン・フォード、出演ヘンリー・フォンダ、ジェーン・ダーウェル、ジョン・キャラダイン、チャーリー・グレイプウィン、ドリス・ボウドン、ラッセル・シンプソン『怒りの葡萄』(1940年)を挙げたいと思います。

第二に、リチャード・レウエリン原作、監督ジョン・フォード、出演ウォルター・ピジョン、モーリン・オハラ、ドナルド・クリスプ、アンナ・リー、ロディー・マクドウォール、ジョン・ローダー、セイラ・オールグッド、パトリック・ノウェルズ『わが谷は緑なりき』(1941年)を挙げたいと思います。

最後に、監督マーティン・リット、出演サリー・フィールド、ポー・ブリッジス、ロン・リーマン『ノーマ・レイ』(1979年)も挙げたいと思います。

『怒りの葡萄』では、不況の嵐に農場を追われた貧しい一家がカリフォルニアの楽園を目指して旅立ちます。しかし、さまざまな困難を乗り越えて辿り着いた彼らが見たものは、溢れる農民と絶望的な生活でした。ジョン・フォードは政治の貧困や農民政策の不備にメスを入れ、強い人間愛を持ち、虐げられた生活でなお逞しく生きる人々を力強く描き出しています(『怒りの葡萄』DVD、発売元 20世紀フォックス ホーム エンターテイメント ジャパン、2005年、解説参照)。この作品は1940年度アカデミー賞で監督賞と助演女優賞を受賞した不朽の名作です。

『わが谷は緑なりき』については、少し詳しく話したいと思います。

今、ひとりの男、ヒュー・モーガンが50年間を過ごした故郷の谷を去ろうとしています。つらく不幸な出来事に見舞われた少年時代でした。父、母、姉、4人の兄からなる8人家族の末っ子であるヒューは、それでも挫けることなく生きてきました。目を閉じると少年時代の日々が懐かしく甦ります。舞台は、19世紀末イギリス、ウェールズ地方の炭坑町です。この地方で一番美しい谷でした。

これは1941年度アカデミー賞6部門を受賞したジョン・フォード監督の不朽の名作『わが谷は緑なりき』の冒頭シーンです。まだ父親が家長であり威厳があった時代を背景に、少年ヒューの視点から少年時代に焦点を当てて描かれています。

炭坑夫である父や兄たちはその仕事に誇りを持っており、傍らにいるヒューはそれがうらやましくて仕方がありません。冒頭のシーンでかれらが仕事を終えて家に帰り、石炭で汚れた身体を石鹸で洗っている姿をヒューは憧れを持って見えています。というのも、身体に染みついた石炭の汚れは坑夫にとって誇りに思えたからです。

そんな平穏な日々の中、突然、炭坑主が賃金を引き下げたことから、労働条件や組合結成に関わる諸事件が引き起こされることになります。

4人の兄たちは父に、鉄工所の閉鎖が本当の減額理由だと告げますが、使用者に無邪気な信頼を抱く父は聞く耳を持ちません。兄たちは「失業者が低賃金で炭坑の仕事を受けている。今は減額もわずかだが、日増しに賃金が下げられ、弁当にも困る」ことになると憤ります。それでも父

は、「炭坑主だって人の子」であり「腕がよければ賃金をくれる」と言い、状況の深刻さに気づいていません。十分な教育を受けていない父には、よき時代の人間味あふれる使用者側の視点が未だ内面化されています。

兄たちは、人手が余っていても使用者は「人の子」なら交渉に応じてくれるが、「僕らは無力」であり「皆で組合（ユニオン）を作る」ことが不可欠だと異を唱えます。これに対し、父は「組合？社会主義者でもないだろう」と権利意識に疎い労働者を体現しています。

父は、使用者側から組合活動へ関与しないように強い圧力を受けます。兄たちは怒りに震え、「結束して立ち上がろう。他の炭坑もきっと賛同するはずだ」と主張しますが、それでも父は頷きません。父と兄たちは、しばらくの間決裂することになります。ここには世代の断絶だけでなく、現代的な権利意識の覚醒がうかがえます。まさに今、労働に関わる大きな変革が始まろうとしているのです。

やがてストライキが起こり、通りには昼間から仕事のない男たちがあふれます。人々の心は荒み、ストに反対した父は仲間たちから目の敵にされます。家の正面の窓に石が投げつけられるシーンがそれをよく表しています。

そして物語は、少年ヒューの坑夫としての過酷な労働や、熟練の坑夫であり賃金の高い兄たちの一方的解雇によって引き起こされる家族の離散、父の落盤による死へと進展します。

私は年に一度は必ずこの映画を観ますが、そのたびに家族の絆だけでなく、労働の本質、労働法の意義やその重要性について改めて考えさせられます。この映画の中には、使用者による「一方的な賃金減額」、「一方的解雇」、「年少者の過酷な労働」、「組合結成活動」などの労働法上のさまざまな現代的な問題点が含まれています。私も少年時代を九州福岡の筑豊で育ち、友達の多くは坑夫の子供でした。中学になると廃坑に伴い、彼らもどこかに去ってしまいました。時代も場所も異なる映画ですが、私は素直に共感できます。80年も前に制作された作品ですが、ぜひ、観てほしいと思います。この作品は1941年度アカデミー賞で作品賞、監督賞、助演男優賞、撮影賞、美術監督賞、室内装飾賞の6部門を受賞した不朽の名作です（『わが谷は緑なりき』DVD、発売元 20世紀フォックス ホーム エンターテイメント ジャパン、2002年）。

なお、先に挙げた同監督によるスタインバック原作の『怒りの葡萄』も併せてご覧いただければ、労働問題についてより深く考えることができるかと思います。

『ノーマ・レイ』ではアメリカ南部の片田舎、厳しい労働を強いる紡績工場に勤めるノーマ・レイの視点から過酷な労働状況が描かれます。彼女は教養がなく、3人の子供の父親が全員違う男という、だらしない人生と、毎日ただ過酷な労働に耐えるだけの自分に希望も誇りも持てずにいました。ところが、ある日労働組合から派遣されたルーベンという活動家と出会い、彼に協力するうち、次第に彼女の中に自己の意識と生きるエネルギーが湧き出てきます。しかし、組合の結成を阻止しようとする会社側はありとあらゆる手を使って、ノーマを潰そうとします（『ノーマ・レイ』DVD、20世紀フォックス ホーム エンターテイメント ジャパン、2007年、解説参照）。この作品は1979年度アカデミー賞で主演女優賞、主題歌賞を受賞した秀作です。

本稿は2019年9月1日（火）高岡法科大学で行った講演を大幅に加筆・修正したものです。

参考文献

- 『蟹工船 一九二八・三・一五』小林多喜二、岩波文庫、2003年
- 『豪華版 日本現代文学全集 30 中野重治・小林多喜二集』作品解説 平野謙、中野重治・小林多喜二入門 小田切秀雄、講談社、1969年
- 『日本プロレタリア文学集・26 小林多喜二集 1』新日本出版社、解説 西沢舜一、1987年
- 『日本プロレタリア文学集・27 小林多喜二集 2』新日本出版社、解説 西沢舜一、1988年
- 十川信介『近代日本文学案内』岩波文庫別冊 19、2008年
- 『蟹工船・党生活者』小林多喜二、新潮文庫、1953年
- 『蟹工船・党生活者』小林多喜二、角川文庫、新装改版初版 2008年
- 『蟹工船』小林多喜二、責任編集 市古貞次（古典編）、小田切進（近代編）、解説 久保田正文、ほるぷ出版、1985年
- 『海に生きる人々』葉山嘉樹、岩波文庫、1950年
- 『葉山嘉樹短編集』道籐泰三編、岩波文庫、2021年、解説 道籐泰三、331-351頁
- 『海に生きる人々』葉山嘉樹、新日本文庫、1975年
- 『新潮日本文学アルバム 小林多喜二』編集・評伝 小笠原克、新潮社、1965年
- 『小林多喜二 上』手塚英孝、新日本出版社、1970年
- 『小林多喜二 下』手塚英孝、新日本出版社、1971年
- 『小林多喜二』手塚英孝、新日本出版社、2008年
- 『小林多喜二の手紙』荻野富士夫編、岩波書店、2009年
- 『闇があるから光がある—新時代を拓く小林多喜二』荻野富士夫編著、学習の友社、2014年
- 『「蟹工船」の社会史 小林多喜二とその時代』浜林正夫、学習の友社、2009年
- 『小林多喜二—21世紀にどう読むか』ノーマ・フィールド、岩波書店、2009年
- 『日本の名作 近代小説 62篇』小田切進、中公新書、1974年、葉山嘉樹『海に生きる人々』118-121頁、小林多喜二『蟹工船』126-129頁
- 『30分で読める...大学生のためのマンガ蟹工船』原作・小林多喜二、作画・藤生ゴオ、解説・島村輝、企画・編集白樺文学館多喜二ライブラリー、東銀座出版社、2006年
- 『まんがで読破 蟹工船』原作 小林多喜二、企画・漫画 バラエティー・アートワークス、編集 兼久政彦、小林千奈都、株式会社イーストプレス、2007年
- 『常紋トンネル—北辺に斃れたタコ労働者の碑—』小池喜孝、朝日新聞社、1977年
- 『北海道の夜明け—常紋トンネルを掘る—』小池喜孝、国土社、1982年
- 『新版 南州翁遺訓』西郷隆盛、角川ソフィア文庫改版、猪飼隆明訳・解説、2017年
- 『動物農場』ジョージ・オーウェル、1945年、邦訳岩波文庫、川端康夫訳、2009年
- 『人新世の「資本論」』斎藤幸平、集英社、2020年
- 『100分de名著 カール・マルクス 資本論』斎藤幸平、NHK出版、2021年
- 『労働法第九版』菅野和夫、弘文堂、2010年
- 『共産党宣言』マルクス・エンゲルス、1848年、邦訳岩波文庫改訳版、大内兵衛・向坂逸郎訳、1971年
- 『道徳形而上学原論』カント、1785年、邦訳岩波文庫改訳版、篠田英雄訳、1976年

『権利のための闘争』 イェーリング、1872年、邦訳岩波文庫、村上淳一訳、1982年

『フォイエルバッハ論』 フリードリヒ・エンゲルス、1888年、邦訳岩波文庫、松村一人訳、1960年

『働き方改革のすべて』 岡崎淳一、日本経済新聞出版社、2018年

『蟹工船—かにこうせん—』DVD、制作：現代ぷろだくしょん、販売元：WORLD BELL Co.,Ltd.、2008年

『小林多喜二』DVD、発売元：株式会社ディメンション、1974年作品、2018年

『小林多喜二』映画パンフレット、多喜二プロダクション、1974年

『怒りの葡萄』DVD、発売元：20世紀 フォックス ホーム エンターテイメント ジャパン、2005年

『わが谷は緑なりき』DVD、発売元：20世紀 フォックス ホーム エンターテイメント ジャパン、2002年

『JOHN・FORD FESTIVAL』映画パンフレット、インターナショナル・プロモーション

『ノーマ・レイ』DVD、発売元：20世紀 フォックス ホーム エンターテイメント ジャパン、2007年

『ノーマ・レイ』映画パンフレット、東宝株式会社、1979年

『《法と文学》の法理論』林田清明、北海道大学出版会、2015年

『法と文学 第3版（上）』リチャード・A・ポズナー著、平野晋監訳、坂本真樹・神馬幸一訳、木鐸社、2011年

『法と文学 第3版（下）』リチャード・A・ポズナー著、平野晋監訳、坂本真樹・神馬幸一訳、木鐸社、2011年

松本和彦「働き方改革と文学—『蟹工船』を題材として—」『月刊税理』第六十四卷第八号、2021年 7月、224-225頁

松本和彦「『わが谷は緑なりき』における労働問題」『労働判例』№.1022、2011.6/1

松本和彦『カントの批判的法哲学』慶應義塾大学出版会、2018年